

淳和天皇陵

西行手植といふ垂枝の老櫻がある、又寺の後大原山(小鹽山)の上に淳和天皇陵がある、謠曲小鹽に此邊の景色が見えてゐる。

「何んぞ語らん花盛り、いふに及ばぬけしきをば、いかゞは思ひ給ふらん、けにくく妙なる梢の色、うつる影も大原や、小鹽の山の小松が原より、煙る霞の遠山櫻、里は軒端の家ざくら、匂ふや窓の梅も咲き、茜さす日も紅の、霞か雲か八重九重の、都邊はなべて錦となりけり。なべて錦となりけり。櫻を折らぬ人を無き、花衣着にけりな。時も日も月も彌生、逢ひにあふ眺めかな。けにや大原や、小鹽の山も今日こそは、神代も思ひ知られけれ。神代も思ひ知られけれ。(謠曲小鹽)」

長岡舊都址

長岡舊都址——向日町の東方鐵道線路に沿ふ字鷄冠井の地がそれである、桓武帝延暦三年より同十三年に至る十年間の都址で、明治三十八年其址を表彰する爲めに有志が相謀つて一大石碑が建てられた。

▼京 都 驛

(大阪驛より二十六哩八分、到着時間約一時十分急行約五十四分)

京都交通——に就ては巻頭京都見物の京都驛及京都の交通参照。

京都名所——詳細は同じく京都の見物参照。



山科驛

(京都驛より三哩三分、到着時間約十六分)

京都驛より迂回して稻荷、山科、大谷の三驛を経て大津市に通じてゐた、舊山科驛は今の兩井餘丁字勸修寺にあつたのであるが、大正十年八月から其線は廢線となり、京都驛から此驛を経て大津に至る改正線が敷設された、驛のすぐ前に京津電車山科驛前停留所があるから、便宜上此驛から至る名所舊蹟は同線の部に詳しく説くことにした。

大津驛

(京都驛より六哩一分、到着時間約二十三分)

大津市 — は志賀大津の都址で、都は粟津から唐崎邊迄の擴大なものであつたといふ、さゝ波や滋賀の都はあれにしを、昔ながらの山櫻花。

東海道五十三次の最終驛で、滋賀縣廳の所在地だ、東海、東山、北陸の要衝に當り、濱大津から石山へ大津電車、札の辻から京都へ京津電車、三井寺下から叡山下へ江若鐵道が敷設され、湖上には太湖、湖南の兩汽船及び三井寺下から京都へ疏水運河の便がある。
琵琶湖 — 地が陥落して湖となり、同時に富士山が出来たといふ、東西五里廿六丁、南北廿六里十六丁

大津市

大津電車
京津電車
江若鐵道

琵琶湖

長等山

三井寺

周圍五十九里卅餘丁、我國第一の大湖で、國內の水流は總てこゝに注いでゐる、又鳴こ呼ぶ鶴に似たる小島が水中に出没して葦の間に葉を作るこゝで「鳴の湖」の名もある、
鳴の海や月の光のうつろへは、波の花にも秋は見ゆけり 藤原家隆
湖中に沖島、多景島、竹生島、奥島等の島がある(琵琶湖めぐり参照)、沿岸の名所は近江八景とて天下に鳴る處だ、又鮒で名のある源五郎鮒は此湖の産である、
時鳥 なくや 湖水の さゝ濁り、 許 六
長等山 — 市の西方に起伏する山脈の總稱で一に志賀山ともいふ、
さゝ浪や長等の山の嶺つゞき見せはや人に花の盛りを。(古 歌)

と詠まれた處、三井寺や高觀音等の名勝舊蹟を包容してゐる、老松古杉の間に櫻楓點綴して春秋ともに美しく、四時の景趣は琵琶の明鏡と相映輝して頗る眺めがよい。
三井寺 — 大津市神出(驛より九丁)にある、天安二年(凡そ千六十年前)の創建、智證大師の中興、天壽宗本名を園城寺といふが金堂の横手に天智、天武、持統三帝の産湯の井戸があるので寺の名がる。中世歴

々兵火に罹り、全山の堂塔灰燼に歸したが家康、秀忠の再興で、其一部は舊觀に復した、金堂に安置する本尊彌勒佛は南岳大師の作で用明天皇の朝に渡來したといふ靈佛だ、金堂の右にある釋迦堂に辨慶の汁餠がある、堂は往昔遠涼殿の材を賜つて建てた食堂である、金堂の上にある古鐘堂に辨慶が引摺つたといふ鐘がある、昔儀藤太秀郷が三上山の百足を退治したお禮に買つて寄進したものとといふもので

川柳に 浦島は無事かと藤太尋ねられ。

堂守の爺さんが「昔此鐘は——」と雄辯に説明してくれる、八景の一に數々知られてゐる「三井の晚鐘」は金堂の側にある鐘樓から送らるゝもので、斷つて續く鐘の音は湖上に響いて近きが如く、遠きが如く、餘音縹々として深い情趣につゞまれる、觀音堂の本尊は智證大師の作で西國十四番の札所になつてゐる、

いで入るや浪間の月は三井寺の、かねの響きにあくる湖。 詠 歌

堂前から望むと湖東湖西の連峰遠く、煙波深渺たる湖上の眺めは實に畫である、石段の下に素盞鳴尊を祀る縣社長等神社がある。

高觀音——長等神社の山門前を左に登ると至る、延喜年間（凡そ千二百年前）僧安然の開基、本尊千手觀

長等神社

高觀音

長等公園

長等山前陵

音を安置して居る阿彌陀堂の阿彌陀佛は信州善光寺の如來と同佛といふ境内櫻楓多く湖上の眺望頗るよい三井寺の山内から高觀音一帯の地を長等公園といふ、市の經營で規模は大きくないが極めて風致に富んだよい所だ、三井寺下から北に道をこつて進むと大津兵營の後に弘文天皇長等山前陵がある、此地は鐘丘といひ、又住吉の森とも呼んでゐる、

萬代に千代を重ねて見ゆるかな龜の丘なる松のみざりは。 資 業

義光の墓

義仲寺

こ古歌に詠せられし處、その北に接する新羅の森に新羅善神堂がある、源賴義の信仰が篤かつた明神で、其三男義光は常社で元服をしたので新羅三郎と命名し、後世を遁れて三井寺の北院に往生を遂げた、義光の墓は森の西南の丘上にある、其附近花樹多く春は美しい風致を添へる。

義仲寺——驛の東十餘丁へ大津電車の便あり馬場にある、栗津ヶ原で戦死した旭將軍義仲を葬る處、本堂に觀世音と義仲の像を安じてゐる、又大阪で歿した佛聖芭蕉の遺骸を遺命によつて此處に運んで篤く葬つた「芭蕉翁」と刻する墓が義仲の墓と並んでゐる、

木曾殿と背合せの寒さかな 又 玄

膳所町
唐崎の松
日吉神社

の句碑も立ち、芭蕉堂に蕉門三十六傑仙の畫像を藏してゐる。

義仲寺より膳所町方面は次の石山驛。大津市の北唐崎の松、日吉神社方面は江若鐵道參照。

— 以下 江 若 鐵 道 —

江 若
鐵 道

此線は大津を起點として北に向ひ、西近江路を経て若狭に出でんとするものであるが、今は大津、三井寺下、坂本、叡山下間を運輸してゐるのみである。

▼三井寺驛

(叡山驛より三哩七分、到着時間約十六分)

驛は三井寺の下、疏水運河に架す橋の北詰にある、名所舊蹟は大津驛參照。

▼滋賀驛

(三井寺驛より一哩八分、到着時間約八分)

大津宮址——驛の西北五丁餘、滋賀里にある、氏神八幡神社の邊りが天智、弘文兩天皇の宮址であるさうな、

ふるひこに吾あるらめやさ、波の古き都をみればかなしき。 萬葉集

催うちや昔は志賀の都人 乃 路

志賀の山寺

古墳百穴

崇福寺址

志賀山越

大伴黒主詞

唐崎の松

櫻 花 道

そこから山手に三丁程行くこ小庵がある、それが俗にいふ志賀の山寺で、其側にある古墳は何れも横穴式で他地方のそれとは變りはないが、天智時代のものといはれ構造に一種の特色がある、附近一帯は殆ど古墳で俗に古墳百穴の稱もある。更に山路二丁程登ると一字の奥に巨大な自然石に彫れた彌勒佛の座像が拜まれる、滋賀の大佛といふがそれで、附近の山間に天智天皇の勅願、延喜式十五大寺の一であつた崇福寺址の礎石がある、今は其遺址を傳へる爲めに石標が樹てられた。

志賀山越——志賀山は比叡山の脈を受け、南長等、逢坂の諸嶺に亘る、之を越えて京都の白川に至るを志賀山越といふ、行程二里餘、驛より八丁程の處に大伴黒主詞がある。

匂ひくる風の便りをしをりにて花に越行く志賀の山越 法印定爲

櫻花道見ぬまで散りにけりいかゞはすべき志賀の山越 橘成久

唐崎の松——驛の東北十五丁坂本村字唐崎の湖岸にある(大津から湖南汽船の便がある)、日吉神社の御旅所唐崎神社の社頭にある一幹の老松で、天智天皇の御手植が枯れて秀吉が植替へされたものといふが近頃に至つて枝葉いたく衰へ日々形うすく命旦夕に迫つてゐる、いや最早いつてゐるかも知れぬ、然し息子

東海道本線(江若鐵道)

の松が大きくなつて其北七八丁の處に新唐崎といつて親父の衣鉢を受け継ぎ、頗る雄大なる風格を備へてある、兎に角「唐崎の夜の雨」が八景の一に數ねられ、端唄に「志賀の唐崎一つ松、夜ごとく泊りがらす」が群來るを、あをくさ嬉しなみたの乾く間なく曇りがちな夜の雨」と唄はれてゐる、又大津から唐崎までの湖上は天正十年明智左馬介光俊が堀秀政に追はれ、愛馬大鹿毛に打ち跨がつて乗り切つた所た。「安土城の留守居なる、明智左馬介光俊は、君の先途の覺束なく、軍の様子見むものと、急げは廻る瀬田橋、敵に粟津の原越へて、もみにもむでぞ打出の濱、大津の宿にかゝる頃、はつたさ出逢ひし大軍は、堀秀政が一萬騎、光俊きつと思ふ様、敵勢こゝに來るからは、君の妻子のいまます、坂本城こそ大事なれ、さはさりながら今こゝに、小冠者原に出で逢ひて、槍も合さで引かん事、末代迄の無念なり、一當あて、引かへさばやこ、光俊やがて大音聲、己れ秀政來りしか、天王山を取りきりし、武略は流石の敵なるぞ、いざ光俊が一期の名残、語り聞かせんもの共と、味方の勇氣はゆまして、さつと許りにつきかへり、世巴に切り廢け、西に東に出没し、鬼神不思議の働きに、さしもの大敵もてあまし、浮足立し汐合を此所と見て取る軍の呼吸、サツと許りに乗り脱けて、一息吞みし掛壁に馬は忽ちさぶ如く、名に負

ふ近江の湖に、さんぶさばかりをざり入る、馬は天下の逸物にて、乗り人は元より古今の達者、眞一文字に乗切る様は、神か人かを見るばかり、水や空そらや水、眼の限り一碧の、波を蹴立つる大鹿毛に緋絨着たる左馬之介、一際目に立つ武者振に、無雙の名人永徳が、丹精籠めて畫きたる、墨畫の龍の陣羽織、比叡山嵐に翻がへし、或は緩にまた急に、揚鞭振ふ勇ましき、馬渡るれば人助け、人勞るれば馬に頼り、さしにも廣き湖を、事こそせざる不敵さに追手の勢も氣を取られ、酔るが如き心地してアレヨ／＼と云ふ許り、只一筋の遠矢たに、射掛人もなかりけり、(琵琶歌湖水渡)

月かけは消ぬ水と見ながらさ、浪よする志賀の唐崎 顯家

▼叡山驛 (三井寺驛より三哩七分、到着時間約十六分)

下坂本——地は元龜三年(凡そ三百五十年前)織田信長が、一城を築いた處、信長初め宇佐山城(滋賀驛の山手)に其將森可成を置いて北國の備にしたりが長井長政、朝倉義景の來り攻むる處となり守將可成は戦死し、信長叡山の衆徒が北國勢に應援したのを怒り、山に火をかけて山徒を斃殺にしそれが鎮壓に一城を築いたのが坂本城で、後城を光秀に賜ひ居城とせしが、間もなく光秀信長を弑し、秀吉の爲めに敗れて小

來迎寺

栗栖の露と消れた時、一族左馬之介が湖水を渡つて此城に入り、光秀及及自分の妻子を刺殺し、城に火を掛て自刃したことは今に美談として人に喧傳されてゐる處だ、天正十二年(凡そ三百四十年前)大津に城を築いて此處は廢しされた(驛より船場迄東二丁)

來迎寺——驛の東、船場から北へ十二丁比叡の辻にある、紫雲山と號ひ、長保三年(凡そ九百廿年前)の創建、惠心僧都が如來を迎へた夢を見て建てた寺で、惠心筆の阿彌陀佛を安じてゐる、本堂、開山堂、寶庫、鐘樓等何れも創建當初のもので古色を帯びてゐる、表門は坂本城の遺構で境内に森可成の墓がある。

日吉神社

日吉神社——驛の西北十二丁比叡山の東麓上阪本村にある、大山昨命以下七柱の神を祀る、今の社殿は天正十九年(凡そ二百卅年前)秀吉の再建に係るもので、特別保護建造物、丹塗の宏壯なるものた、毎年四月十四日の大祭即ち山王祭は七社の神輿が湖畔より船して唐崎の御旅所に渡御せられるので、當日は非常な雑踏を極める、神域二十萬坪、老樹蒼蔚として溪水其間を流れ、三橋の邊りは殊に雅趣がある、三橋は華表前の谷川に架す石橋で、下手から見ると三つの橋が恰も重なり合つてゐるかの様に見えるといふので名がある、花によく紅葉によく、更に青葉がくれに山郭公が啼きしきる新緑の頃もよい。日吉馬場を少し東に



御茶園

下る所に御茶園といつて十二株の大きな茶樹が現存してゐる、傳教大師が唐から歸朝のとき茶の實を持ち歸られて此處に栽けられたのが我國に於ける茶の始まりで、名産地たる、宇治、梅尾の茶は何れも此處から移植したさいはれてゐるが梅尾でも茶の元祖たといつてゐる。何うせ本家はどが茶化した。

日よしやま七坐す神の跡たれてくらぬ影は世を照すらん、 經 任

比叡山延曆寺

比叡山延曆寺——日吉神社から急坂(東坂)廿五丁、比叡山上にある、天皇宗總本山、延曆七年(凡そ千百卅年前)桓武天皇の勅を奉じて傳教大師が伽藍を建立し、比江山寺と號け平安城鎮護の靈場となし、後一乘止觀院と收稱した、弘仁十四年(凡そ千百年前)嵯峨天皇から今の延曆寺の號を下賜されたのである。目後法燈、愈盛んに堂塔伽藍山谷に滿々として榮へ、名僧善智識といはれた人々等は一度は必ず當山で修業したものだ、また盛んに兵器を貯へ僧兵を養ふて關擾を事としたことが史上に見えてゐる、元龜三年(凡そ三百五十年前)遂に信長の怒に觸れ一山悉く兵火の爲めに灰燼と化したのを、秀吉が再興し後家光が巨資を投じて諸堂を造營したのが今の伽藍である、堂宇はその所在によつて東塔、西塔、無動寺、横川の四つに分れてゐる、登山者の便宜上修學院村より來る順序に案内を記すことにする(京都の見物の項比叡

四明ヶ嶽

山修學院村道参照)

四明ヶ嶽——比叡山の最高峰、海拔二千八百尺、京都は脚下に湖水は一瞬の裡に落ちて、近江全體を指點するを得べく、遠く大和、河内、攝津、伊勢、美濃、若狹、越前の青峰淡く周圍に繞りてその大觀壯絶なること筆紙によく盡す處に非ずともいはふか、頗る附の眺望た、尙同所に傳教大師の石窟がある、坂の下りに千手觀音を安じてゐる千手堂がある、堂の下に山王社、山王社の西北一丁半に開山大師の廟淨土院がある、梅堂は淨土院の西北八丁聖德太子の持佛たる如意輪觀音を胎内に納むる千手觀音を安置してゐる、その上の西方に常行堂、常行堂の東に法華堂、兩堂の間は高廊で接續してゐる、俗に之を辨慶の擔ひ堂といふ、常行堂の下に真亮堂、其下に西塔の本堂たる釋迦堂がある本尊釋迦牟尼佛を安置してゐる。釋迦堂の東北八丁に青龍寺がある、元黒谷といひ、法然上人が藏經を閱覽した舊蹟で文珠菩薩や上人の木像を安じてゐる。以上は即ち西塔に屬するものである。

戒壇院堂——は傳教大師の遺旨によつて建立する處、宇多、一條、鳥羽三皇の御受戒があつた處といふ。堂の東下方に大講堂がある、本尊大日如來、觀音、彌勒、梵天、帝釋、四大天王、文珠と桓武天皇の聖像

- 千手堂
- 山王社
- 淨土院
- 梅堂
- 常行堂
- 法華堂
- 辨慶の擔ひ
- 真亮堂
- 釋迦堂
- 青龍寺
- 戒壇院堂
- 大講堂

東海道本線(江若鐵道)

前唐院
根本中堂
文珠樓
經藏堂
本願堂
大黒堂
無動寺明王
相應堂
辨天堂
大乘院
蔭蔭の木
横川中堂
元三大師堂
四季講堂
飯室谷不動
安樂院

を安じてゐる。堂の後に前唐院、其東下に根本中堂がある、傳教大師が創始した止観院で、本尊傳教大師
作等身の薬師如来、其他日光、月光、十二神將、梵天、帝釋、四天王を安置してゐる。文珠樓は中堂の正面
に經藏は左角にある。本願堂は中堂の北に。大黒堂は東南にある。以上東塔である。

阿耨多羅三藐三菩提のほそけたちわが立軸に冥加あらせ給へ、 傳教大師

無動寺明王堂——中堂の南十丁、不動明王を安置してゐる。堂の下に相應堂がある、辨天堂は明王堂の南三
丁。大乗院は明王堂の東三丁にある、觀音上人の舊蹟、自作といふ有名な蔭蔭の木像といふを安じてゐ
る、以上無動寺である。

横川中堂——は釋迦堂の東北約一里、天長六年(凡そ千九十年前)慈覺大師の建立、本尊聖觀音、毘沙門天
不動明王の像を安じてゐる、本堂の構造は唐船を擬して建てたものといふ。元三大師堂は中堂の東三丁、
元三大師の廟である。四季講堂は廟の西三丁にある日蓮上人の舊蹟といふ、中堂の下十八丁に飯室谷不動
堂がある、本尊不動明王は慈覺大師の作であるといふ。其東三丁に安樂院がある、恵心僧都の舊蹟だ、以上
横川の部である、これで大略案内は終つた以上四嶺何れも幽邃の勝を占め、山容雄偉、密林鬱茂、崇高森

西教寺

嚴、王城鎮護の靈山たることを思はせる、近時絶好の避暑地として夏をこゝで過ごすものが多く、寺で學者
の講習會が開かれ又天幕生活が流行してゐることだ。

西教寺——驛の西北約廿丁、坂本村西教寺にある(安樂院の下約十二丁)、天臺宗眞盛派の本山、文明十八年
(凡そ四百四十年前)眞盛の草創、諸堂の中にも客殿は伏見桃山の舊構で結構を極めたものである、時城
廣潤、郡内の古刹で、境内に明智光秀の墓がある。

高穴穗宮址
白鳥越

高穴穗宮址——上坂本村の南端から南七丁字穴太の地が成務天皇の皇居志賀高穴穗宮のありし處である
といふが今は偲ぶべき何物もない、地は叡山無動寺の東麓で、こゝから無動寺を経て京都修學院村に至る
山徑を白鳥越といふ。

石山驛

以上 江若鐵道

膳所城址——驛の北、膳所町の湖上に面した所にある、慶長六年(凡そ三百廿年前)徳川氏が關西の諸侯
に命じて大津城を移し築かしめたる處、樓門壯麗、城櫓水邊に鐘にて宛然慶重の繪を見る様な美觀を呈して

粟津ヶ原

ゐたが維新の際取毀されて其美が消夫せたのみでなく滋賀縣の監獄といふ殺風景なものになつてしまつた
粟津ヶ原——膳所町から南一帯の總稱である「粟津の晴嵐」が八景の一に數はられてゐる、木曾義仲が上京
のときには、此處で平家の大軍を破り、半年後には一族源義經と戦つて討死をした處、

川柳に

義仲も遂には西に傾かれ。
やみくも旭は泥の中に消ぬ。

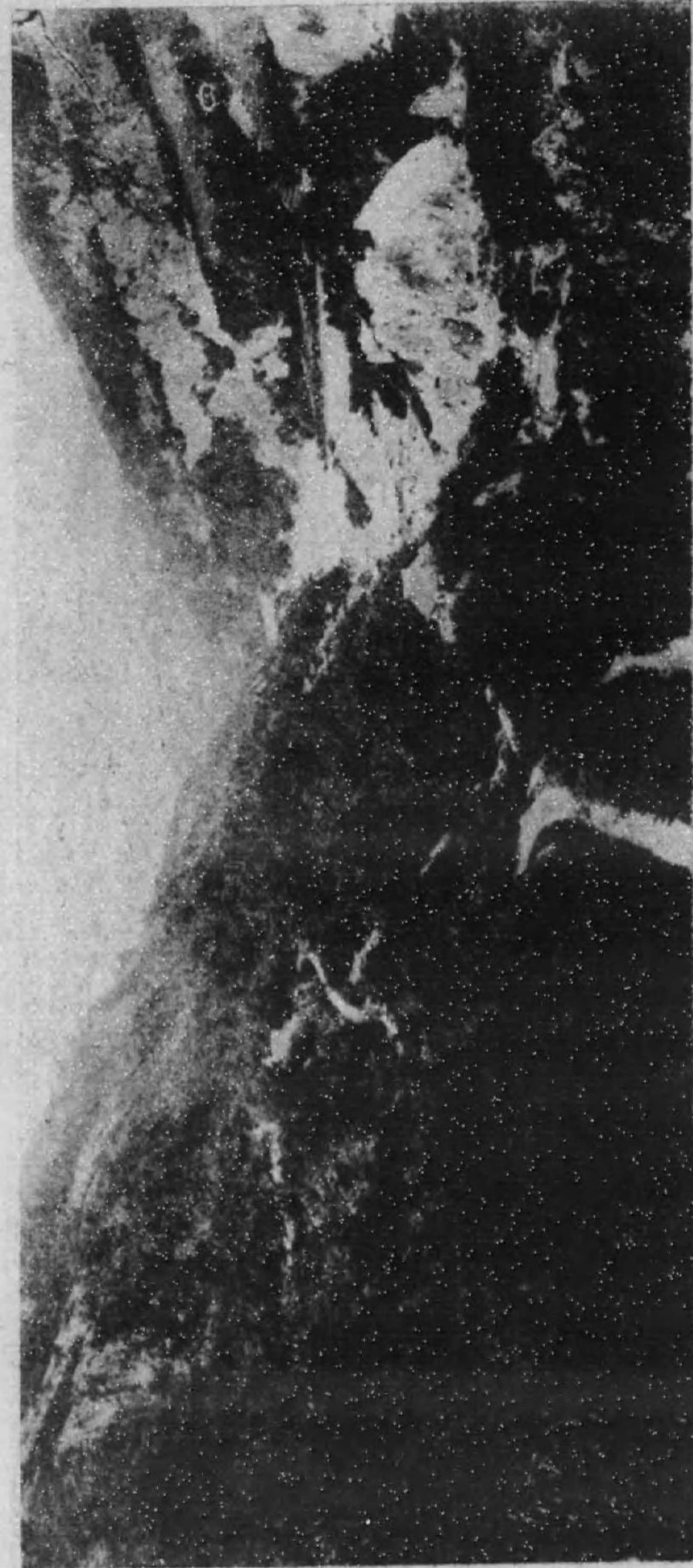
義仲の四天王の一人今井兼平の墓は膳所町の南端街道筋の西二丁程の處にある。

今井兼平の墓

「木曾殿其日の裝束には、赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧着て、いか物作りの太刀を帶き、鐵形打つた
る甲の緒を締め、二十四指たる石打の矢の、其日の軍に射て、少々残りたるを、頭高に負なし、滋藤
の弓の真中取て、開ゆる木曾の鬼鹿毛と云ふ馬に、金覆輪の鞍を置いて乗たりけるが、齧踏張立上り
大音聲を揚て、日來は聞きけん物を、木曾冠者、今は見らん、左馬頭兼伊豫守朝日將軍源義仲ぞや。
甲斐の一條次郎とこそきけ。義仲討つて兵衛佐に見せよやとて喚いて懸く。一條次郎是を聞いて、唯今
名乗は、大將軍ぞや。餘すな者共、漏すな若殿、討てやとて、大勢の中に取籠て、我討ち取らんぞと進



石山寺 (六八一事記)



みける、木曾三百餘騎、六千餘騎が中へ懸入り、堅様橋蜘蛛手十文字に懸破つて、後へつこ出たれけ
 五十騎許りに成にけり。そこを破つて行く程に、土肥次郎實平、二千餘騎で支へたり、そこをも破つて
 行く程に、あそこにては四五百騎、爰にては二三百騎、百四五十騎、百騎許りが中を、懸破々々行く程に、
 主従五騎にぞ成にける。(平家物語)

勢田の唐橋

勢田の唐橋——驛の南九丁(大津から電車及汽船の便がある)瀬田川に架す橋で東海道と中仙道の要所に當
 り、日本三大名橋の一として知られてゐる、又古來有名な古戦場で、武内宿禰は忍熊王を此處で破り、弘文
 帝は敗れて大津で崩し給ふ、義仲は今井兼平をして鎌倉の軍を防がしめ、承久には官軍北條氏爲めに敗れ
 て三上皇は隠岐、又は佐渡に遷幸し給ひ、織田信長は此處に陣して叡山を焼かしめる等其の重なるもので、
 俗説に倭藤太が龍神から三上山の百足退治を頼まれたのも此橋である又名物「勢田の蜆」が知られてゐる。

建部神社

建部神社——勢田橋の東詰から東五丁神領にある、宮幣大社、日本武尊を祀る、白鳳四年(凡そ千二百
 五十年前)の創建、賴朝が伊豆に追はれるとき此社に詣りて武運を祈つた、後志を得て大將軍となり西上
 する途次立寄り勢田三百戸を寄進した由緒ある社だ。

石山寺

石山寺——驛の南二十丁(大津、石山から大津電車及大津から汽船の便がある)眞言宗、天平勝寶年中(凡そ千百七十年前)良辨僧正の開基、本尊二臂如意輪観音を安置してゐる、西國第十三番の靈場である、

のちの世を願ふ心はかるくとも、佛のちかひおもき石山。

詠歌

祖師堂、寶塔、鐘樓等と本堂の間に紫式部が有名な源氏物語を著はしたといふ源氏の間といふものや、多寶塔の東に明治天皇が秋月を賞し給ふ月見堂がある。縁起は昔天智天皇が志賀の宮から、當山に紫雲の棚引くを御覽になり、侍臣をして訪ねさせ給ひしに八葉の蓮華岩上に在つて奇雲邊りを繞る、後、聖武天皇観音利生の靈地なるを知られ、良辨に勅して伽藍を建立させ勅願所と定め給ふとある「石山の秋月」は八景の一で、對岸の山の間からさし昇る月が、瀬川の清流にくだけて銀波金波を漂よはす有様をこゝに立つて頭に描いて見るも一興だ、秋の楓、夏の螢もここ更よい。

南郷の洗堰

南郷の洗堰——石山寺の南二十五丁(湖南汽船の便がある)周圍五十九里餘の湖上の水量を加減し洪水にも下流の氾濫を防ぐべく設けられた近年の大工事である。

立木観音

立木観音——南郷の洗堰から山路十七丁登つた處にある、養老年間(凡そ千二百年前)僧泰澄の開基、本尊

岩間寺

は弘法大師四十二歳のとき此山の立木で作つた観世音で、世に「厄除の観音」といつて幸運を祈願する人が多い、堂から東七丁下ると瀬田川の西岸で「米カシ」鹿跳の勝がある。

岩間寺——石山寺の西南一里餘丁岩間山にある、養老年間(凡そ千二百八十年前)僧泰澄の開基、眞言宗新義派、本尊千手観音を安置してゐる、西國第十二番の札所、

みなかみはいづくなるらん岩間寺きしうつ波か松風の音。

詠歌

縁起に泰澄和尚が此山の太木の下に座禪してゐるに終夜千手陀羅尼を唱ふる聲がするので奇異に思ひその太木を截る中から千手観音が顯々として出現せられた泰澄生身の尊容を拜して歡喜の餘り太木を以て尊像を刻み永年守護せる本尊を胎内に納めて安置したといふ、又元正天皇御不快の時泰澄をして祈らしめ給ふに病氣忽ち平癒、天皇歡感のあまり七堂伽藍を建立し給ふといひ又本尊を俗に「汗かきの観音」ともいふ、汗かきとは毎夜地獄に入りて受苦の衆生を救済する爲めに汗をかかれるに依るといふ。

草津

草津驛 (京都驛より十三哩七分、到着時間約五十分)

此驛から關西線の拓植に至る草津驛が分岐してゐる。

草津町
常善寺
立木明神

矢橋の浦

驪崎神社

守山町

草津町——東海道五十三次の一驛で、中仙道との追分になつてゐる、江戸時代には驛馬の荷物に規があつて此處で改めたものであるといふ、町には石田三成が擒はれて家康の見参にいつた常善寺や、鎮守立木明神等がある、又名物姥ヶ餅が名高い。

矢橋の浦——驛の西南一里、湖岸の稱で、こゝから船で對岸の大津へ行程一里、陸路勢田橋を迂回すると二里餘であるから、昔は此近道に依つたものが時々風浪の危険があるので「急がば廻れ勢田の唐橋」など、俚諺が出来た、「矢橋の歸帆」が八景の一に成つてゐる、同所にある驪崎神社は、應神天皇、神功皇后、武内宿禰の三座を祀る處、源頼朝が京師へ上るとき、馬上から鞭を以て當社を指し、浦人に祭神を尋ね、八幡の神を祀る社と聞き、馬を下つて参詣したといふので社の名があるといふ。諸曲兼平にまづ向ひに當つて大山の見えて候は比叡山候か。さん候あれこそ比叡山にて候へ。麓に山王二十一社、繁りたる峰は八王子、石津坂本の人家まで残りなく見えて候」と對岸の風景が扱はれてゐる。

▼守山驛

(京都驛より十六哩四分、到着時間約五十六分)

守山町——中仙道の一驛で、野州川の西岸にある、

兜屋址

觀音寺

雷塚

新善光寺

三上山

白つゆも時雨もいたくもる山は、下葉のこらす色附にけり。 貫之

と詠せし處で、町に兜屋址といふがある、昔信濃の安田莊司が望月秋長に殺され、其臣小澤友房が此處で兜屋といふ旅館を營んでゐる處へ、敵の秋長が宿り合せ、友房の計略で酒宴に事よせ、莊司の妻子を近附けて遂に仇討ちの本望を遂げた處、即ち諸曲の舊跡である。

觀音寺——町の西一里若浦にある、豐聰太子の開基、大慈山と號ひ、本尊聖觀音を安置してゐる、往昔は堂宇伽藍壯麗を極めたといふ。同所の「安國寺」に雷塚といふがある。

新善光寺——驛の東南卅餘丁、葉山村にある、平重盛の裔といふ小松宗定が一族の冥福の爲めに建立したといふ寺で、本尊は宗定が善光寺で夢に分身の如來を見、寺僧に乞ふて此處に安置した傳ふ。

▼野洲驛

(京都驛より十八哩四分、到着時間約一時間)

三上山——驛の東南二十八丁、山麓三上村から更に十八丁にして頂上に達する、琵琶湖の東南に秀立してゐる山峰で、高さ千百八十八尺、北を雄山、南を雌山の二峰に分れ、山容宛然富士に似てゐるので「近江富士」の名がある、

おもひたつ富士の根遠き 佛を、近く三上の山のはの雲。 興 孝
山腹の妙見堂から眺む湖上の景色が頗る雄大だ、昔此山の大蜈蚣が勢山の龍宮城を襲ふたといふ傳説がある、今でも一尺位の蜈蚣はよく見受るその話である。

千早ふる三上の山のさかき葉のさかゑどまざる末の世までに。 古 歌

三上神社 — 山麓三上村にある、天御靈神を祀る、孝靈六年(凡そ二千二百年前)三上山に降臨せられて山上に祀つたのを養老元年(凡そ千二百年前)に、今の處へ遷座したのである。

錦織寺 — 驛の北一里、字木部にある、眞言宗木部派の本山、天安二年(凡そ千六十年前)慈覺大師の開基した處で、初めは天臺宗を奉じてゐたが、嘉禎年間(凡そ六百九十年前)親鸞上人が常陸の體ヶ浦で感得したといふ阿彌陀佛を安置してから改宗したのである、寺寶の紫香錦は天女の織つたもので寺の名それによ源頼朝の信仰が篤かつた宏壯な社だ。

▼篠原驛 (京都驛より廿一哩九分、到着時間約一時十二分)

鏡山

鏡山 — 驛の南、三上山と相並ぶ山峰で、大伴黒主が大嘗會に

鏡山いざ立よりて見てゆかむ、年へたる身は老やしぬるこ。

大伴 黒主

平宗盛の墓
詠んだ古來の名所である、北麓の鏡村は即ち昔の鏡驛で、牛若丸が鞍馬から金賣吉次に伴はれて陸奥に下る途次、此處で元服したといひ、元服池といふがある。又鏡村の西、大篠原の東山中に平宗盛の墓がある八島の戦ひに擒はれた宗盛父子が鎌倉から此處に送られて遂に首斬られたる所だ。

▼近江八幡驛 (京都驛より二十四哩三分、到着時間約一時廿分)

湖南鐵道
八日市町

此驛から湖南鐵道が接續して八日市町に通じてゐる。沿線の名所は同線の部参照。

八幡町
城址
八幡町 — 驛の西北十四丁北近江の長濱と匹敵する町で、帆布や蚊帳の産で知られてゐる、天正十四年(凡そ三百年前)豊臣秀次が八幡山に築城して安土城下の工商を移してから市街をなした處、城址は麓の八幡社から十丁程登つた頂上にある、奥の島と細江を以て相隔て頗る眺望がよい。

八幡神社
八幡神社 — 町の北端にある、郷社、神功皇后、玉依姫を合祀せる處、初め山上に鎮座されたのを築城の際此處に遷座したのである、毎年三月十五日の左義長、四月十四日の火祭は遠近から來集する人で非常な雜

日杉山
願成就寺

杳を呈する。

日杉山——は町の西端にある、俗に観音寺山ともいひ、桃樹多く花時の美観はいふまでもない、願成就寺は聖徳太子の建立で、近江四十八寺の最後に建てられたので其名がある、往昔は中々盛観を極めたが叡山と共に信長に焼かれて、今は僅に其形を存じてゐるに過ぎない。

長命寺

長命寺——八幡町から西北二里、島村の長命寺山の半腹にある(町から船車の便がある)、天臺宗、聖徳太子の開基、同太子作の本尊十一面千手観音を安じてゐる、西國第三十一番の靈場

やちとせや柳にながきいのち寺、はこぶあゆみのかざしなるらん。 詠 歌

松ヶ崎

水莖の岡

昔武内宿禰が當山で長壽を祈願したといひ、後聖徳太子が「壽命長遠」の四字文字を見認め給ひ白髮の老翁の教示を受けて本尊の像を刻み伽藍を建立して長命寺と名附け給ふといふ縁起がある、山頂から俯瞰する、琵琶の連波一眸の裡に集まり、風光明媚、頗る眺望がよい。松ヶ崎は長命寺山の西麓で、昔鐘が石の間から出たといふ三ツ石がある、前方に水莖の岡、湖を望み、帆影波光相映じて明媚なる景趣を備へてゐる。水莖の岡——八幡町の西北一里餘、岡山村字牧に屬する湖邊の一小丘で、松ヶ崎に對し、山麓は筆ヶ崎、

硯ヶ淵なごさ詩歌に詠せられた處、山上に八疊石、八艘隠等の巨岩がある、昔巨勢金岡が此地の絶勝を描かんとして筆勢及はず、筆を抛けたといふので水莖の名がある、頗る眺望に富んだ所だ。雁がねのさむくなるより水莖の、葛の葉色つきにけり。 人 丸

湖南
鐵道

—以下 湖南 鐵道—

此線は東海道本線近江八幡驛から東、八日市町に通じ、近江鐵道八日市驛に接続してゐる。

▼近江八幡驛 (新八日市驛より五哩五分、到着時間約廿二分)

東海道本線近江八幡驛に接してゐる、名所舊蹟は同驛参照。

▼武 佐 驛 (近江八幡驛より一哩七分、到着時間約十四分)

長光寺——驛の東南二丁武佐村字長光寺にある、武佐寺といひ聖徳太子の開基で、武川綱の建立と傳ふ、源平盛衰記に「明けぬれば馬淵の里を打過ぎて、長光寺に參て、本尊の御前に暫し念誦し給へり、此寺は武川綱が草創、上宮王(太子)の建立也。千手大慈者の常住の精舎、二十八部衆擁護の寺院として、法華轉讀

東海道本線(湖南鐵道)——

長光寺

瓶割山

の聲幽かに、瑜伽振鈴の音澄めり、中將寺僧に硯を召寄せて、柱に名籍を書き給ふ。正三位行左近衛權中將平朝臣重衡と注される。こあるとほり平重衡が擣らはれて關東に下向の途次立寄つた所た、木尊は太子が靈木を以て作られた觀世音で、難産に靈驗著しして「子安觀音」の稱がある、又門の左側にある大木が花の木で本尊を刻んだ靈木の残りである、春には紅色の花が咲くさうで名の知れぬ處から唯花の木といつてゐる。寺後の山を瓶割山といひ、織田信長が一城を築いて柴田勝家をして守らした、長光寺山城のあつた處である。

廣濟寺

廣濟寺——驛の東二丁字武佐にある、眞宗、長光寺と同じく聖德太子の開基で武川綱の建立といふ、以前は天臺宗を奉じてゐたが、嘉禎元年(凡そ六百九十年前)親鸞聖人が關東から歸る途次錫を留めてから改宗した、又明治十一年先帝陛下御巡幸の時、行在所となつたといふ光榮のある淨刹だ。

鎌宮神社

鎌宮神社——驛の東北卅丁東老蘇にある、式内の古社、天津兒屋根命を祀る、昔この地に日本武尊が携へられた鎌を埋められたといふので社の名がある、今の社殿は天正の頃(凡そ二百五十年前)の再建で、特別保護建造物になつてゐる、社の森を「老蘇の森」といひ古來の和歌の名所である。

忘れにし人をそ更にあふみなる、おいその森に思ひ出でぬる (六帖)

櫻樹多く「近江吉野」の稱がある程で花の頃は萬葉の櫻花小池に映じて頗る雅趣に富む。

觀音正寺

觀音正寺——東老蘇の北五六丁山麓の石橋から更に十四丁觀音寺山にある、詳しくは東海道線安土驛參照

▼平田驛 (近江八幡驛より二哩七分、到着時間約十七分)

長樂寺

長樂寺——驛の西二丁平田村字平木にある、弘法大師建立せられた淨刹で、昔は堂宇全備の靈境であつたさうだが永祿十一年(凡そ二百五十年前)兵火に罹り灰燼に歸した、本尊の藥師如來が國寶になつてゐる。

▼市邊驛 (近江八幡驛より三哩九分、到着時間約廿三分)

市邊皇子の墓

市邊皇子の墓——驛の東南十丁市邊村字市邊にある、顯宗、仁賢兩帝の父君市邊押磐皇子の御墓である、同墓と稱するもの神崎郡妙法寺村と日野の奥音羽村にあるが明治八年教部省此地に確定せられたのである

▼太郎坊驛 (近江八幡驛より五哩、到着時間約廿九分)

阿賀神社

阿賀神社——驛の北九丁、大字小脇の山腹にある、急坂の石段三丁と無數の鳥居を滑り、對峙せる數十尺の夫婦岩の巨巖を経て至る、延暦八年(凡そ千百三十年前)駒の長者戸部眞美の創建、太郎坊權現を祀る、全

山巨巖奇石多く、社側の舞臺から望むと八日市の飛行場、湖東の平野は一瞬に、遠く伊勢の境を見渡して頗る絶景である。

▼八日市驛

(近江八幡驛より五哩五分、到着時間約廿二分)

近江鐵道が接続してゐる、官幣大社多賀神社は此線に依り高宮驛に出ればよい、東海道線彦根驛参照。

八日市町
第三飛行大
隊
衛戍神社

八日市町——神崎郡第一の都會、古來八日に市を開かるによつて名がある、物貨の集散地で菊の本場として著はれてゐる、町の東に近時第三飛行大隊が置かれた、飛行場は五十萬餘坪で、場の東端にある衛戍神社は飛行家の守護神として衛戍地帯の各神社の神靈を奉祀した社である、一般観覧者は此社から覽るのが一番安全で場所としても一番いゝ處だ。

延命寺公園
五寺

延命寺公園——驛の北近く、町の西端延命寺山麓にある、老樹繁茂して深林をなし、櫻樹頗る多く陽春の頃は観櫻の客で雑沓を極める。

瓦屋寺——驛の北十丁、瓦屋寺の山腹にある、臨濟宗、石崎山と號ふ、攝津四天王寺造營の時、其瓦十萬六千枚を燒造した處と傳ふ、聖徳太子弘法利生の爲め伽藍を建立、自作の本尊千手觀音と四天王の像を安



社 寺 宮 家



社 寺 宮 家

櫻の老

小松寺

置して瓦屋寺と名づけ給ふといふ古刹、

古はほさけの造る瓦屋寺、残りてすねの世まで頼まむ。

詠歌

今の堂宇は正保二年(凡そ二百八十年前)再興のものである、境内に太子手植の櫻、四十八坊の柱石、寺寶に太子自作の丸瓦等を蔵してある幽邃の境だ。その北十五丁大字平坂に小松寺がある、平重盛が各國に建立した小松護國寺の一で、聖徳太子作の觀世音を安置してある。

興福寺

興福寺——驛の東卅餘丁御園村字上村にある、臨濟宗、大智山と號ふ、行基の開基、本尊の五智如來及諸菩薩は、文明十六年(凡そ四百四十年前)雷火で諸堂焼失の時に不思議に災を免れ給ふといふ靈佛で參詣する人が多い。

高野永源寺

高野永源寺——興福寺の東二里餘、瑞石山の中腹にある(自動車の便がある)、愛知川の上流音無川に架す紅葉橋を渡つて、高野村に至り大歌橋から羅漢坂を経て至る、臨濟一派の本山、康安四年(凡そ五百六十年前)佐々木氏頼の建立、寂賢禪師の開基、本尊世繼觀音は禪師が支那の靈地の土を以て作つたといふ尊像で、佐々木滿高が祈願して嗣子を得たといふので名がある。

あいがたきのりに近江の永源寺、ねがふはのちの世繼觀音。

詠歌

境内に山門、法堂、開山堂、禪堂、方丈、經堂、鎮守社等がある巨刹で、山水の妙を極め、附近楓樹多く翠松趣を添へて、音無川(愛知川)の清流に映する様頗る美しい。

—以上 湖南鐵道—

▼安土驛

(京都驛より廿六哩五分、到着時間約一時廿五分)

安土城址

安土城址——驛の東北十四丁、高さ二丁、周圍一里半、安土山の頂上にある、天正四年(凡そ二百四十年前)信長の築城で、當時は七層の天守閣が聳いてゐたといふが天正十年に明智光俊の攻むるころとなり、惜しむべし今はその跡が残じてゐるに過ぎない、同所に信長の墓がある、眺望は湖東第一の稱があるほどで湖上から比叡、比良の連峰、奥の島、辨天島等も見えて頗るよい風光を備へてゐる、半腹に總見寺址がある樓門、三層塔等が各所に散在してゐる。

「去程に明智左馬介は、六月四日、隨身の兵六百餘人、江州安土の城に討ち入りしより以來、國土を懼け江洲平均し、國々を治めんと種々に思慮を廻らし居るに、十三日山崎合戦味方敗退(中略)剩へ小栗

柄野にて大將光秀並びに溝尾進士、比田等自殺せしと聞こければ、安土の城下又々騒動し、羽柴が兵士早來るよし、さまざまに沙汰しければ、左馬介思ひけるは、爰にて獨り犬死せんより、坂本の城に入りて、向州が妻子等城代長閑齋と安否をともにすべし、又は透も有らば京都に忍び上り、秀吉を伺ひ討つか、二つの内に有りと思案を極め、諸方の集まり勢は悉く暇を出し、丹波勢千餘人、十四日辰刻、安土の城に火をかけ一片の煙さなし、且佐和山の荒木山城守、長濱の妻木主計頭兩人へ使を立て、各其城を捨て坂本へ一所に籠らるべしと申遣はし、直に坂本へぞ急ぎける(繪本太閤記)

淨嚴院

淨嚴院——驛の西南八丁慈恩寺にある、淨土宗、聖德太子開基、本尊は嵯峨の釋迦と同體といふ、天正五年(凡そ二百四十年前)こゝで法華宗と淨土宗の宗論をやつた所で安土の宗論といつて知られてゐる。

沙々貴神社

沙々貴神社——驛の南九丁常樂寺にある、少彦名命外三柱を祀る、樓門の額は有柄川宮熾仁親王の染筆で表鳥居の額は源賴朝の書である、境域廣闊、乃木大將手植の松等がある。

桑實寺

桑實寺——驛の東十八丁、天臺宗豐聰大子の開基、正壽院と號ふ、本尊は俗に桑實藥師といふ藥師佛を安置してゐる、縁起は鎌足の子定惠和尚が唐から桑實を携へ歸朝して、此地へ植へ養蠶を教へしといふのだ。

觀音正寺

觀音正寺——桑實寺の東南觀音寺山にある(南麓石寺より十四丁)、聖德太子の開基、本尊千手千眼觀音を安置してゐる、西國第卅二番の靈場である

あらたうごみちびき給へ觀音寺、遠き國よりはこぶあゆみを。 詠 歌

寺傳に依るに聖德太子が佛法弘通の爲めに近江神崎郡に來り給ふとき、蘆原から一疋の人魚が現はれ我は湖の畔に住む獵師の果なるが明暮殺生した報ひで斯淺ましき姿に成りしを告げ觀音の尊像を作つて我苦を救ひ給はんことを願ふ、太子慈みて尊像を刻んで一字を建立されたのが當寺で、人魚は其佛德に依つて佛果を得たといふ有難い縁起がある、昔は六角佐々木の菩提所として堂塔伽藍壯嚴を極めたといふ、山は衣織山ともいひ標高千四百廿餘尺、佐々木氏十八代四百年の居城のあつた所、永祿十一年(凡そ三百六十年前)佐々木義賢、義弼父子、織田信長と戦ひ遂に城は陥つた、名高い觀音寺山の戦ひがそれだ。▼次の能登川▼稻枝▼河瀬の三驛は省略。

▼彦 根 驛 (京都驛より三十八哩三分、到着時間約二時間)

近江鐵道

此驛から近江鐵道が高宮、八日市を経て草津線の貴生川驛に通じてゐる、又同線の高宮驛から多賀への支線

彦根町
金龜城

が岐れてゐる。名所は同級参照。

彦根町——湖東の一都會で、井伊侯卅五萬石の舊城下である、驛の西に金龜城が築けてゐる、井伊家十五世の居城、徳川幕府が伊賀、伊勢、尾張、美濃、飛騨、若狭、越前の七ヶ國に課して其工を助けしめ廿餘年を費やして峻功したといふ、西に大湖、北に長湖、其東に摺針嶺があつて國道隘く、要害無双、關ヶ原の合戦の後、徳川家康が四天王の隨一人さたのむ井伊直政に近江一圓を興て、此處に封じたのは如何に此地が重要なるかを物語るものだ、

近江の海磯うつ波のいく度も、御代に心をくたきぬるかな。 直 弼

迎春館——(驛より十一丁)には今上陛下行幸の御座所がある、そこから望むと琵琶の湖水は眼下に澄み渡り、遙に竹生島、多景島、沖の白石は畫の如く、比良の高嶺は淡く、伊吹は獨り群山を壓して頗る壯觀を極めてゐる、又北麓に樂々園。八景亭等がある、井伊侯の別荘で樂々の名は「智者樂水、仁者樂山」の義による、櫻楓多く公園となり、八景亭は湖水の水を引いて近江八景に模した泉石の配置は人に知られてゐる今は料理屋だ。

迎春館
樂々園
八景亭

佐和山社
清涼寺
龍潭寺
大洞辨天
長曾根港
竹生島
多景島

佐和山——彦根町の東北にある、昔石田三成の居城のあつた所、慶長五年(凡そ二百二十年)關ヶ原の敗戦の後井伊直政の居城となつたが、彦根城が築かれてから廢城となり今はその殘礎があるのみだ、西麓に佐和山社、清涼寺、龍潭寺、大洞辨天等があつて風致がよい、又長曾根港(驛から廿五丁)は太湖汽船の發着所で、竹生島や多景島を探るに最も便利だ。

以下 近江 鐵道

近江 鐵道

此線は東海道線彦根驛より關西草津線の貴生川驛に通じ、支線は高宮驛から岐れて多賀驛に運輸してゐる。

彦根 驛 (貴生川驛より二十六哩、到着時間約二時間)

湖東の咽喉たる彦根町の名所舊蹟は東海道線彦根驛参照、官幣大社多賀神社の所在地たる多賀驛へ直通の列車がある、次の彦根口驛省略。

高宮 驛 (彦根驛より二哩五分、到着時間約十二分)

此驛から多賀驛へ支線が岐れてゐる、高宮町は舊中仙道の一驛で、商家多く麻布の産で者ははれてゐる、戦國

東海道本線(近江鐵道)

の頃高宮三河守頼勝の居城があつた處、多賀神社はこゝから東南一里、町に同社の大鳥居が建つてゐる
道傍に多賀の鳥居の寒さかな 尙白

▼(支線)多賀驛 (彦根驛より四哩五分、到着時間約廿分)

多賀神社——驛から七丁、多賀村字多賀にある、官幣大社、伊弉諾、伊弉册の二神を祀る、延命長壽の神とし
て上下の崇敬が篤い社で、「伊勢へ詣らば御多賀へ参れ御伊勢御多賀の子ぢやないか」と唄はれ「伊勢へ七
度熊野へ三度御多賀様へは月詣り」などの俗謡にもある處、社域廣潤、本社、拜殿、舞臺、樓門、四足門
等と幾多の攝社末社がある、老樹蒼鬱、神殿を偲はしむ、お土産の杓子をお多賀杓子」といひお玉杓子は
即ちその訛傳であるのだ、又名物糸切餅が知られてゐる。高宮の次驛▼尼子省略。

▼豊郷驛 (彦根驛より五哩七分、到着時間約廿分)

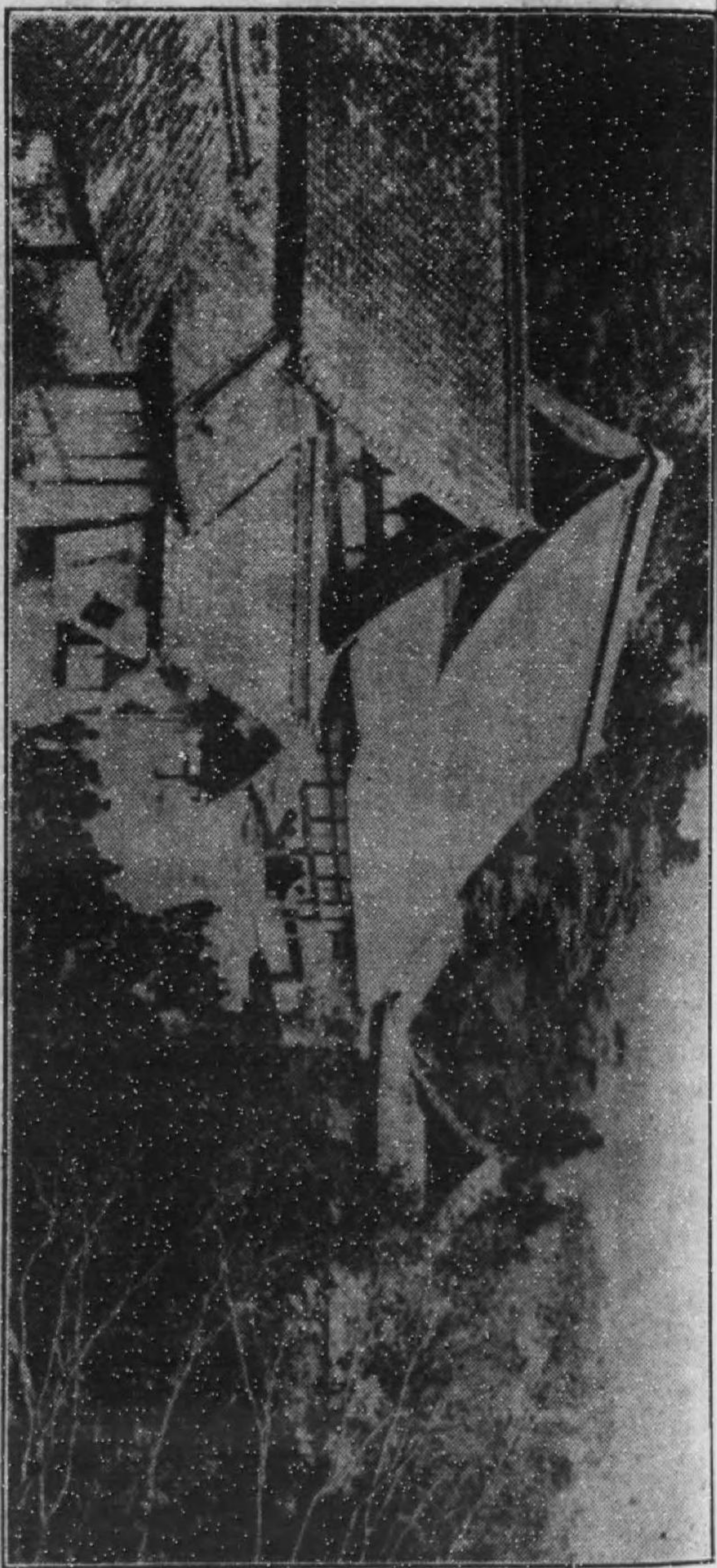
四十九院——驛の北十五丁四十九院にある、唯念寺と號ひ、行基が建立した四十九箇寺の一で聖武天皇の
祈願所となり、光嚴天皇の行在所にもなつたといふ古刹である。

西明寺——驛の東南一里半、東甲良村字池寺の上にある、俗に池の寺といひ、承和元年(凡そ千八十年

多賀神社

四十九院

西明寺



(八九一事記)

金剛輪寺

前)に草創した古刹で仁明天皇の勅願所となり、數十の堂宇が備はつてゐたが天正の兵火に罹り、今のは慶長年間(凡そ二百廿年前)徳川氏の再建である。西明寺の南廿五丁泰川村字松尾寺に金剛輪寺がある(驛の東南一里半餘)天平九年(凡そ千八百八十年前)行基の開創、聖武帝の勅願所であつたが其後荒廢せしを慈覺大師が再興した處、本堂、護摩堂、文珠堂、三重塔、鐘樓等がある淨刹だ。次の▼愛知川驛▼五個莊驛省略。

▼八日市驛

(彦根驛より十二哩一分、到着時間約五十九分)

此驛から湖南鐵道が東海道線近江八幡驛に通じてゐる。驛の附近名所は同線八日市驛参照。次の▼長谷野驛▼櫻川驛▼朝日野驛省略。

▼日野野驛

(彦根驛より十九哩九分、到着時間約一時廿分)

日野町——蒲生氏の在城せるより開かれた一市街で、徳川時代から豪商が多く輩出した、近江商人の本場である、城址は町の東端西大路に屬し、信長本能寺に於いて試せられたる時信長夫人初め安土の男女蒲生賢秀に伴はれて此城に難を避けたのである。附近に瀧の宮、綿向神社、新善光寺等の社寺がある。

▼水口驛

(彦根驛より廿三哩六分、到着時間約一時四十五分)

水口町

水口町——は舊東海道五十三次の一驛、甲賀山の麓、横田川の北岸にある、文庫、煙草入即ち水口細工が著はれてゐる。

大岡寺

大岡寺——驛の東南七丁大岡山(甲賀山)の麓にある、白鳳四年(凡そ千二百五十年前)行基の開基、甲賀三郎兼家の持佛たる觀世音を安置してゐる、又寺に中村栗園の墓がある、大岡山は天正十三年(凡そ三百四十年前)中村一氏が秀吉の命を受けて一城を築いた處、後長束正家の居城となり、關ヶ原の役に西軍に組し家康を害せんとして果さず、東軍池田備中守長吉の攻むる處となりて城は陥る、城址は山の頂上にある。

城址

町に水口神社、大徳寺等の社寺がある、水口神社は式内の古社で山王新宮ともいひ素盞鳴尊、大己貴命、稲田姫を祀る。大徳寺の境内には甲賀一揆記念碑がある、甲賀一揆は天保十三年(凡そ八十年前)幕府が新開墾の田地を踏査して苛酷なる課税をした爲めに、農民が蜂起し、幕吏を逐ふて帳簿を破毀した、刑される者三十餘人、碑は明治二年の建設で其始末が詳しく記されてゐる。

水口神社

田村神社——驛から街道に沿ふて東三里、一坂は照るく鈴鹿は曇る、相の土山雨が降る」さ俚諺でなくなく懐かしみのある舊東海道五十三次の一驛、土山の片畔にある、此地の鎮守神で、坂上田村麿を祀る

甲賀一揆記念碑

境城廣瀨、野州川の上流に臨み、楓樹多く秋は美しい所だ、

土山や歌にもうたふ初しぐれ。 關 更

▼貴生川 驛 (彦根驛から二十六哩、到着時間約一時間五十分)

此驛から關西草津線貴生川驛に接続してゐる。名所舊蹟は同線参照。

— 以上 近江鐵道 —

▼米原 驛 (京都驛より四十二哩、到着時間約二時十分) (急行一時卅五分)

此驛から北陸本線が岐れてゐる。

摺針嶺——驛の東南卅丁、鳥居本村字下矢倉と息郷村字番場の中間の峠で、琵琶湖の眺望第一の稱がある處、湖上遙になど、たくしく述ぶまでもなからふ。東北の番場の地は元弘三年越後守 仲時が京師に敗れて東に走るさき此地で野武士等二千餘の爲めに道を遮られ、野人の手に討たれんよりはと深く自及したことが太平記に見えてゐる。同所蓮華寺に仲時以下四百卅二人殉死者の過去帳を藏してゐる。

筑摩神社——驛の西北廿五丁、入江村筑摩にある御食津命、倉穗魂の神を祀る社で、四月八日の鍋釜祭は

蓮華寺
筑摩神社

摺針嶺

朝妻郷

奇祭として知られてゐる。又隣地宇朝妻は朝妻郷の舊稱で、往昔は湖東の大港として遊君と共によく歌なさに詠まれた處

にほの海や朝つま村も出にけり、つなぐ氷を風やさくらん。 家 長

世に「朝妻船」として元祿年間英一蝶が畫けるを傳ふ詞にあたしあた波よせてはかへる波、朝妻船のあさましやあゝ又あすの夜は、誰ごちぎりをかはして、まくらはずかし、いつはりがちなるわが床の山、よしこれこそ世の中。」とある。驛の東北卅餘丁息長村字能登瀨に山津照神社があるが次驛醒ヶ井に説くことにする。

▼醒ヶ井 驛 (米原驛より三哩八分、到着時間約十二分)

醒ヶ井——舊中仙道の一驛で、此驛に「居醒の清泉」といつて、日本武尊が伊吹山の妖神を討伐される時、其毒氣の爲に悶絶せられ給ひ、清泉を飲んで毒が醒めたと傳ふるものがあるによつて名附く處である。山津照神社——驛の西二十八丁、能登瀨にある、又の名を大梵天王社といひ、鳥羽天皇以下曆代の崇敬が篤かつた宮居である。

醒ヶ井

山津照神社

伊吹山

▼近江長岡驛

(米原驛より六哩六分、到着時間約二十三分)

伊吹山——驛の北、一里十餘丁、春照村を経て上野村の奥、伊吹神社(三宮)の畔から峻峻なる山路約二里にして頂上に至る、近江美濃兩國に誇る日本七高山の一で、海拔四千五百四十餘尺、又の名を騰吹、伊福ともいひ、日本武尊が登陟されてから史上に見えてゐる、尊東夷征伐の歸路此山に妖神あるを聞き、伊吹山に登り給ふ時、妖神巨蛇となつて道に横たはり、尊之を跨げられるとき其毒氣を感ぜられ、醒ケ井に湧く清泉によつて毒は醒めたれども、伊勢に至りて遂に死に給ふと傳ふ處、「江州は伊吹山のほとり……」と美聲を張上げて賣りに來た伊吹艾は此山の産で、藥草、奇草、珍蟲の多きを以て著はれてゐる、冬深く野はなりにけり近江なる、いぶきの外山雪ふりぬらし。好忠

折々に伊吹を見てや冬籠り。芭蕉

頂上の眺望頗る大觀で、晴天の日は東に富士山を見ることが出来る、近時冬になると此山の一合目邊でスキ一の練習が盛んに行はれる、安詳上人が建立した、所謂伊吹四寺の觀音護國寺は南麓に、太平寺は西麓に、長尾寺はその北に、彌高寺は太平寺の東南に何れも今は僅に其形を留めてゐるに過ぎない。

觀音護國寺
太平寺
長尾寺
彌高寺

▼柏原驛

(米原驛より九哩三分、到着時間約卅三分)

柏原——中仙道の一驛、驛に成菩提院がある、傳教大師の開基、嘉曆元年(凡そ六百年前)越前平泉寺の衆徒の爲に破却せられ後貞舜法印が再興した寺で、文珠、藥師、地藏の三尊を安じ寺寶に信長の制札や秀吉の制狀等を藏してゐる。清瀧寺は驛の北十丁にある、俗に法華塔といひ、京極家の菩提所で氏信以下十八世の墳がある、元弘三年(凡そ五百年前)佐々木道譽が源中納言具行を斬つた處で其墓もある。

寝物語の里——驛の東十五丁、美濃國今須村と近江の柏原村字長久寺の境界で、僅に小溝を隔つのみであるから兩國の者が寝ながら物語が出来たといふので名がある、平安紀行に

柏原
成菩提院

清瀧寺

寝物語の里

ひさりゆく旅ならなくに秋の夜の寝物語も忍ぶばかりに。

太田道灌

「今須の里を過ぎ小坂を経て道の右に芽茸きたる浅ましき庵一つあり、傍に幽かなる溝のありしを人に尋ぬれば美濃近江の境寝物語といふ所と致へし。かたはら痛き境にこそと打笑ひて過ぎぬ。池田綱政」

▼關ヶ原驛

(米原驛より十三哩七分、到着時間約四十六分)

關ヶ原古戰場——關ヶ原は中仙道の一驛で、北國街道の要衝に當つてゐる、地は不破の關の東の小原であ

關ヶ原古戰場

不破の關址

るので名がある。慶長五年九月(凡そ三百廿年前)西軍(石田三成)十二萬八千、東軍(徳川家康)七萬五千の大軍が會戦した所謂、天下分目の古戰場である、地域東西一里、南北十餘丁に亘り、驛を中心に東は野上(桃配)といひ徳川家康の陣した處)より、西は藤下(決戦後家康が首實驗せし處)に至る間、北は小關、笹尾(鳥津義弘、石田三成の陣址)、南は松尾山(東軍に裏切たる小早川秀秋の陣せし處)に當る間で、近年木標を樹て、當時の址を明かにした、宜しく一日を割いて當年の修羅場裡に英雄興亡の跡を偲ぶべきである

大谷吉隆の墳墓

不破の關址——驛の西十丁餘、松尾字大木戸にある、壬申の亂(天武弘文の争ひ)に天武天皇が要塞にし給ふに起るさいひ、古は鈴鹿と並稱されたる有名な關で、延暦八年(凡そ千百卅年前)勅して廢しなされた、附近藤下の丘上に大谷吉隆の墳墓がある。

妙應寺

秋風や 簾も 不 破 の 關 芭蕉
妙應寺——關址の西南廿五丁、今須村にある、禪宗、青坂山と號し、大徹禪師の開基、元伏見宮の祈願所といひ、正平年間(凡そ五百七十年前)今須城主長江重景が其母の追福の爲めに建立した處である。寺の東南十五丁松尾山の南麓字平井に聖蓮寺がある、親鸞上人の舊蹟で、八房梅、御杖の柱等を傳はてゐる。

聖蓮寺

野上

野上——驛の東廿五丁、古は桃賦、桃配といひ、天武天皇の行宮があつた所、中世の名邑で遊女多く歌によく詠まれてゐる。

ひさ夜かす野上の里の草枕、結び捨てける人の契りを。 定 家
恨むべき方こそなけれ東路の、野上のいほの暮かたの空。 寂蓮法師
打過ぎし野上の里の妹を見て、かへりくたるに涙なりけり。 頼 政

▼ 垂 井 驛 (米原驛より十七哩二分到着時間約五十六分)

垂井町——美濃國不破郡の町で、相川に臨む中仙道の一市街である。
昔見し足井の水はかはらねど、うつれる影ぞ年はへにける。 藤原隆經
旅衣足井の水の心あらは面やつれせし影な寫しぞ。 一條兼良
こ古歌に詠まれた清泉が玉泉寺の前にあるので町の名がある。

金蓮寺

金蓮寺——驛三丁、他阿上人の開いた處、寺に足利安王春王二人の木像がある、二人は鎌倉管領足利持氏の遺子で、持氏が上杉憲實に攻められ永安寺に自殺せし後、佐竹等の族に奉ぜられ結城氏の古河城に據

つて兵を擧げたが敗れて擄られ、京都へ護送される途次此處で失はれたのである、辭世に

よろこびの世にあふ身ともなりもせで青野ヶ原の露と消ゆまし。 春王

南宮神社

南宮神社 — 驛の西南十丁、南宮山の麓宮代にある、國幣中社、金山彦命を祀る、神武天皇元年頃の鎮座といひ、崇神天皇五年(凡そ二千年前)府中より遷座されたりといふ當國一の宮で、宏壯なる樓門、社殿、老樹を背景として頗る神嚴を極めてゐる、今の社殿は寛永年間(凡そ三百年前)の造營である、南宮山は、

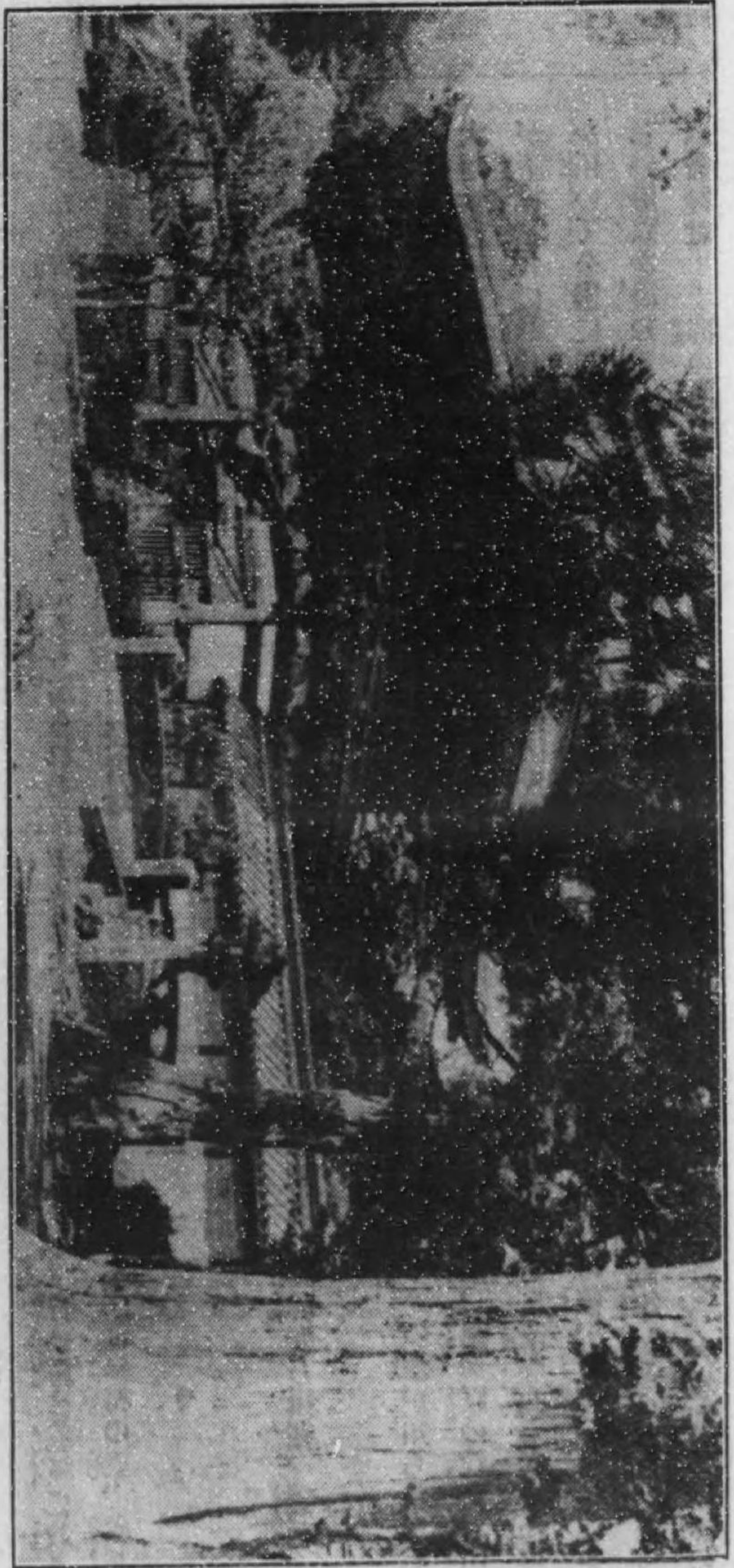
神さふるきさの山松幾年の、雪の白ゆふかけて見ゆらむ。 權律師秀水

朝倉寺

などの詠がある歌の名所で、象の山、美濃の御山ともいひ、海拔千三百八十餘尺、山腹に朝倉寺がある、朝倉山眞禪院とも稱し、南宮神社の奥院といはれてゐる、同神社の別當であつたが維新後神佛混合の禁があつてから此處に移つたといふ幽邃の境である。

青野ヶ原

青野ヶ原 — 垂井町から東北赤坂町に至る、青墓村附近の總稱である、延元元年(凡そ五百九十年前)北畠顯家が奥州勢を率ゐて足利の軍を破りし所、堯孝の寛富十記に「青野ヶ原さかやに、鹿のね遙かに聞ゆ



南宮神社

熊坂長範の塚
物見の松
長者址

養老鐵道

大垣市
大垣城

公園
崇葉神社
大神宮
招魂社
八幡神社
大垣別院

鹿そなく青野ヶ原の青つらら、くるも知られぬ妻をうらみて」と記されてゐる。青塚村に義經に殺された夜盗熊坂長範の塚や物見の松、照手姫の長者址等のつまらぬものがあるといふ。青塚村の東、赤坂町附近の名所は養老鐵道赤坂驛参照。

▼大垣驛

(米原驛より二十二哩三分、到着時間約一時七分、急行四十九分)

此驛から赤坂への短支線が岐れてゐる(赤坂は養老鐵道東赤坂驛参照)養老鐵道は此驛から揖斐、養老、桑名方面に通じてゐる。

大垣市——戸田氏十萬石の舊城下、岐阜に次ぐ西濃第一の都會で、大垣縮布、傘等の産が知られてゐる、大垣城は巨鹿城といひ、天文四年(凡そ三百九十年前)土岐氏の臣宮川安定の築城、關ヶ原の役に石田三成が諸將と共に軍議を凝した所といふ、後戸田氏鐵の居城となり世襲して明治維新に至つたもので今は其地を拓いて公園に開放してゐる(驛の南四丁)四季散策の好適地で、櫻楓多く、陽春の候、降霜の季には更に美しい風致を添へる、園内に天主閣、戸田家の祖を祀る崇葉神社、大神宮、招魂社等がある。

八幡神社——驛の西南四丁、附近十八郷の總社、應神天皇を奉祀する縣社である、大垣別院は驛の東六

丁字傳馬町にある、開闢寺ともいひ、大谷派本願寺の別院で町内無比の大刹であつたが明治二十四年の大地震に焼失し後再建したるものである。

— 以下 養老鐵道 —

養老鐵道

此線は東海道線大垣驛を起點として南北に兩岐し、北は揖斐町に、南は養老を経て桑名町に至り關西本線の桑名驛に接続してゐる。

▼大垣驛

(起點)

大垣町の名所は東海道線大垣驛参照。以下各驛の下に(撮)とあるは揖斐線、(桑)は即ち桑名線で、此驛を起點として順次に記述することにする。次の▼西大垣驛(桑)省略。

▼友江驛

(大垣驛より三哩五分、到着時間約十五分)

永壽寺——驛の西五丁多藝島村にある、眞宗、親鸞上人の徒弟教信の開基、當寺に「切りはめの御影」といつて高祖上人の畫像がある、七世空信の時、洪水の爲め畫像を流失せしに十二年後揖斐川の下流に光明を認め網を以て引上げて流した御影であつたが軸紙は悉く破損せるにもか、はらず畫像は少しも損

永壽寺

大垣町

じてゐなかつたといふ靈像だ。次の▼鳥江驛(桑)▼美濃高田驛(桑)省略。

▼養老

驛(桑) (大垣驛より八哩八分、到着時間約四十五分)

養老公園
千人塚

養老公園——驛の西十丁餘、養老村大字白石の地域、養老山の一帶がそれである、驛から新道を三丁程登つて行くと右側に千人塚といふがある、更に五丁程進むと道が二つに岐れてゐる、廣い本道を進んで約三丁、一雫の梅林の過ぎると

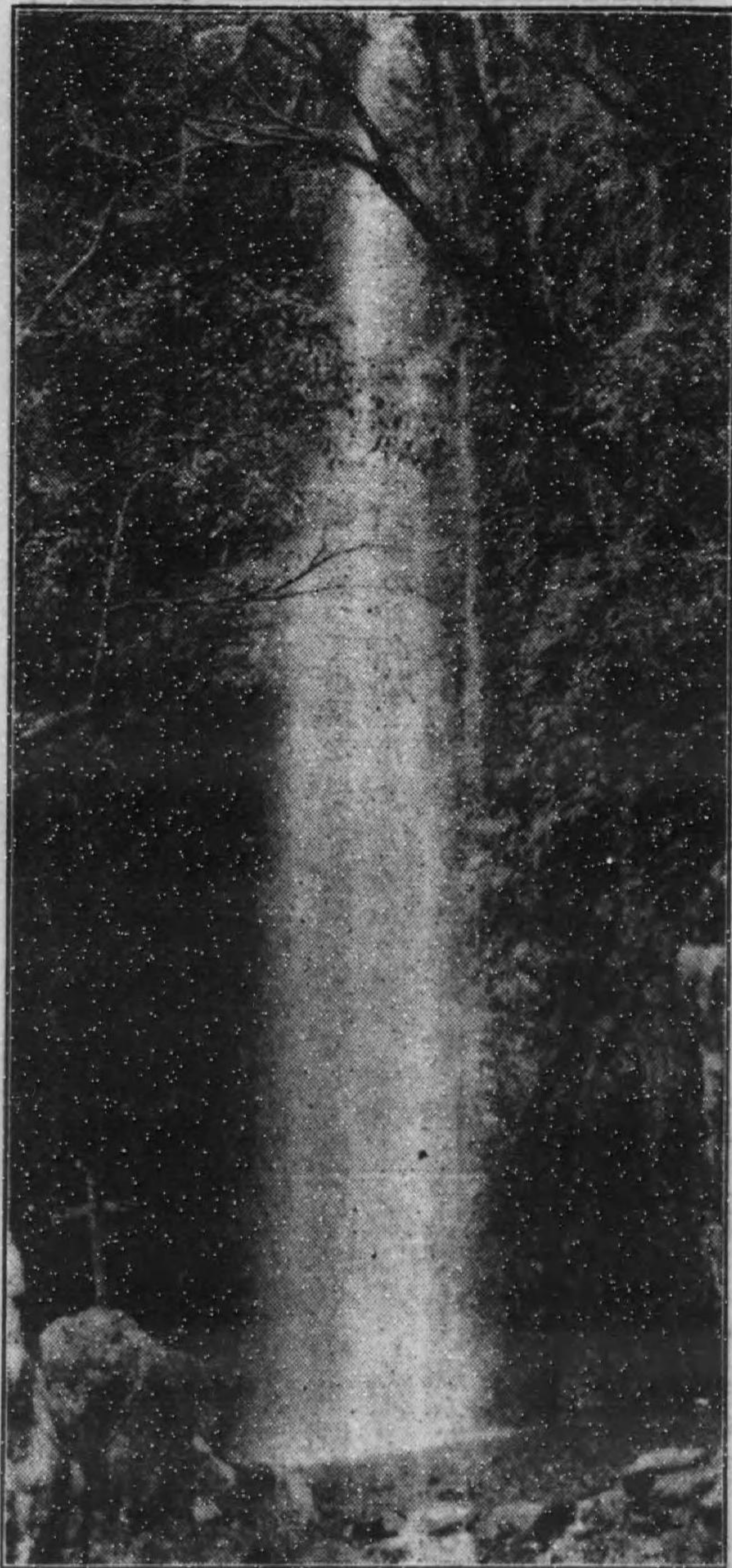
養老寺

養老寺——がある、養老山元正院と號ひ、元正天皇の勅願所となり行幸の砌山號を賜つた古刹で、初めは法相を奉じ後天臺となり今は眞宗大谷派に屬してゐる、當初の堂宇は信長の兵火に罹り今は慶長十二年(凡そ二百廿年前)高須城主徳永氏の再興といふ、本堂の南に不動堂がある、泰澄作の尊像を安じ、俗に餘ご胡爪を忌まるゝが故にそれを食して瀧に入ると祟りがあるといはれてゐる。寺から溪流に沿ふて四丁程上ると、老樹鬱蒼たる所に

養老神社

養老神社——がある、元正、聖武の兩帝と菅公を配祀する社で、俗に「菊水天神」といつてゐる、社壇の邊に「菊水の靈泉」がある、謠曲に「此水を何となく掬びて呑めば、世の常ならず、心も涼しく疲れも助

養老の瀧



素心庵

かり、さながら仙家の薬の水も、かくやと思ひ知られつゝ、やがて家路に汲み運び、父母に是を興ふれば呑む心よりいつしかに、やがて老をも忘れ水の、轉寝の床も起き憂からず、夜の寢覺も淋しからで「こある泉、孝子源丞内が汲みて父に進めしに美酒と變じたと傳ふもので傍に其碑が建つてゐる。尙本道を進むと左側に素心庵といふ茶亭がある。これから奥は道次第に勾配となり。櫻樹羅列するを過ぎると山脚相迫り楓樹頗る多く、溪間に架す一橋を渡つて小徑を辿ると幽邃次第に増して瀑聲いよく近く、路きはまる處片巖老樹に圍まれ、前面に十丈餘の有名な

養老の瀧

養老の瀧——が綠樹繁茂せる峭壁の頂きから奔下してゐる、萬鼓一齊に起り、百雷一時に震ふなごごむつかしい形容詞をつかふ所だ、

老の世はさもあらはあれ雄心をまづ養ひてたきは見るべし。 本居豊顯

妙見堂

瀧壺が淺いので婦女子でも容易に水浴することが出来る、路を元來た二ツ目の橋まで下り右に小徑を四丁程行くと妙見堂がある、花の頃は「一目千本」の稱がある處で、對岸公園一帶を見渡し頗る眺望に富んでゐる、つて養老社の社頭に出で、菊水館の前から舊道を辿ると櫻楓多く、一丁程行くと、元正、聖武兩帝

行宮古址

養老説教場

の行宮古址がある、今は養老神社の御旅所になつてゐる、道を引返して村上旅館の所を左折して下ると、養老説教場に出る、庭園の風雅と眺景が知られてゐる。村上旅館の横を右に下ると本道に合する、これ

で公園の案内は略終つたのである、春の花、秋の紅葉は勿論、夏季の遊覽地として絶好の勝地である。

原 三溪

大君の大御車をこめまし、多藝のみ山の櫻花散る。

▼美濃山崎驛(桑) (大垣驛より十六哩七分、到着時間約一時十五分)

行基寺——驛の西北廿五丁上野河戸の山腹にある、臥龍山と號ひ、聖武帝の勅によつて行基が建立した處、昔は七堂伽藍頗る壯麗を極めたといふ大刹だが南北朝のとき兵燹に罹り、後久しく廢滅してゐたのを高須に封を受けた松平義行が再建したものであるといふ、鑑を控へ、揖斐、木曾の長流を隔て、遠く名古屋の金城城が見ゆる景勝の淨刹である。次の▼石津驛(桑)省略。

▼多度驛(桑) (大垣驛より二十一哩四分、到着時間約一時卅分)

多度神社——驛の西十五丁多度山の山麓にある、國幣大社、天津日子根命を祀る、雄略天皇の勅により

一目連神社

多度山

八重谷

みそぎの瀧

千本松

創建した社で今の社殿は慶長年間(凡そ三百廿年前)桑名の城主であつた本多忠勝の造營に係るものである。隣て御子天目一箇命を祀る一目連神社がある、多度社と共に開運、除難に靈驗著しとて祈願する者が多い、古杉老柏神域を繞り、神楚なる社殿頗る神嚴を極む、大祭は五月四五の兩日で古式流鏑馬の行事等あり、遠近の賽者で雜沓する。社後の多度山に登ると山上に愛宕社、三本杉等がある、展望開豁、掛斐、長良、木曾の三大川曲流邂逅し、南は伊勢灣の白帆、知多半島の翠黛一眸に集まり頗る大觀である。

八重谷 — 多度神社前から西八丁、山脚相迫る所一溪を通じ、巨巖奇石多く、一條の飛泉落トするをみそぎの瀧といふ、多度神宮鎮座の時、此谷から山神が現はれ八ツの壺に酒を入れて神前に供へたといふ傳説のある所た。

千本松 — 驛の東廿五丁掛斐川の對岸大江村大字油島にある、油島は伊勢長島と相望の、木曾、掛斐二川合流する處、長さ半里の長堤は即ち此二川の混流を拒ぐ爲に築かれたもので、千本松は其堤に植附られた寶曆治水工事の記念樹である當時二川の水年毎にあふれて沿民飢饉に泣を見るに忍びず徳川幕府が薩藩に命じて(薩藩の財力を減らす爲めに)工を起さしむ區域廣大工事困難を極め、工成らんとして暴雨出水に遇ひ破壊すること數回、萬難を排して漸く竣功したが工費豫算を超過すること數倍、工事奉行平田親實以下五十士其責を負ふて屠腹す、松は其徳を傳へる爲めに植られたもので今は治水工事の碑が建てられた、碎けても玉は光の残るべし、思へば人は名こそ惜しけれ。 季 知

桑名驛 (大垣驛より二十六哩八分、到着時間約一時五十分)

此で關西本線桑名驛に連絡してゐる、名所舊蹟は卷尾一泊二泊の項参照。

東赤坂驛(樽) 大垣驛より二哩八分、到着時間約十分

赤坂町 — 驛の西約十五丁(東海道線大垣驛よりこの町へ短支線が岐れてゐる)、北に金生山を負ひ、東は杭瀬川に臨む舊中仙道の一驛で、石灰及石細工を産し、製品は文房具、風鎮、置物、擬珊瑚、茶具等その他に建築用及電氣用石材を出してゐる。金生山は礦物學上有數の山で、高さ二百尺に過ぎないが眺望が非常によい、山の東山腹に寶光院がある、金生山明辰輪寺と號ひ、俗に「赤坂虚空藏」の名がある、役行者の開基で、行者作といふ本尊虚空藏菩薩の尊像を大殿内に安じてゐる、堂後に狐石、ガタ／＼岩、屏風岩、

勝山

神樂石、鏡岩等の奇石がある。金生山の南にある小丘が勝山で、元岡山といつてゐたが慶長五年(凡そ三百廿年前)關ヶ原の役に徳川家康が陣して大勝を得しより改めたのである頂上に當時の陣址が残つてゐる

▼廣 神 戸 驛(橋) (大垣驛より四哩六分、到着時間約十八分)

神戸町 — 揖斐川の西岸、郡中有数の町である、日吉神社驛の北三丁、縣社、山王權現と稱し、小比叡神社ともいふ、弘仁年間(凡そ千百年前)阪本日吉の神を勧請した社で、老樹繁茂して神威を思はしむ、例祭は四月十四日七基の神輿の渡御がある。善學院は驛の東六丁、もと日吉神社の別宮、其本堂内陣九の間は傳教大師の居間であつたさうで古柱が存じてゐる。

▼池 野 驛(橋) (大垣驛より六哩五分、到着時間約廿五分)

寢覺の里 — 驛の西十五丁八幡村片山の地をいふ、小島の口すさみにも「寢覺の里さかいふも此わたりぞかし、實に明しかねたる草の枕は、こさはり過ぎたる秋の夜なり」と記し、

風の音におおろかれてや吾妹子が、ねざめの里に衣うつらん。伊勢大輔
さある處で、後光嚴天皇が垂井へ還幸の砌、當地に着き給ふ時、恰も寢覺の頃にて鶯の啼くを聞き給ひ

霞間谿の櫻

しより名がある處といふ。

霞間谿の櫻 — 驛の西南十五丁本郷村字藤代にある、一に鎌の谷に作る、養老の瀧、谷汲山と共に美濃九景の一に數ねられたる處で近時櫻を以て著はれてゐる、

花の山 櫛の往來や霞間谷 清 吟

麓から溪を渡つて二丁程登ると本願寺の説教場がある、其邊の風光最もよく、山谷花を以て埋められ溪水其間に隠見して宛然畫を見るやうである。驛の北五六丁街道の傍に池田勝入齋の墓がある、

▼揖 斐 驛 (大垣驛より九哩、到着時間約廿六分)

揖斐町 — 驛の北十餘丁、揖斐川に架す一橋を渡るに至る、北に城臺山を資ふ揖斐郡の首邑で、昔は三輪さいつた所である、城址は土岐頼康の弟出羽守頼雄の築く處で城臺山の上にある、山麓の揖斐公園には大物主命を祀る三輪神社、其北に松林寺、長源寺、大興寺又公園の東に舊領主岡田氏の祖を祀る三靈神社等の社寺がある。

谷汲寺 — 町の東北小野阪百間餘の隧道を経て約二里(自動車の便がある)谷汲村にある、谷汲山華嚴寺と

- 池田勝入齋の墓
- 揖斐町
- 城址山
- 城臺山
- 揖斐公園
- 三輪神社
- 松林寺
- 長源寺
- 大興寺
- 三靈神社
- 谷汲寺

號ふ、延暦十七年(凡そ千百年前)の草創、會津の人大口大領の本願、豊然上人の開基、本堂に文珠作十
一面觀音及び兩脇に運慶作の不動明王、菅公作の毘沙門天を安置してゐる、寛和二年(凡そ九百卅年前)花
山院法皇西國靈場卅三所を御巡幸せられ、本寺を満願所として御笈槽、御杖と三首の詠歌を納め給ふ靈刹
で、それに倣つて終札する者今に絶われないといふ、

花山院御製

同

今までは親さたのみしおひ槽を、脱きて納むる美濃の谷汲。
萬代のねがひをこゝに納め置く、水は昔より出づる谷ぐみ。

同

世を照す佛の誓ひありければ、またさもし火は消えずありけり。 同

昔大口大領といふ人が宿願あつて觀音の像を得るべく都に上り、神童から文珠作といふ七尺五寸の尊像を
得て喜び勇んで國へ歸る途次、靈夢に感じて此處に一字を建立して尊像を安じるとき、巖の間から油の如き
泉が湧出したのでそれを佛燈に供した、山號これに起因するといふ縁起がある、境域廣闊、十數の堂宇と
僧坊、放生池、御杖の白藤等と後山に妙法藏、菅公參籠の窟等が散在してゐる。

—以上 養老鐵道—



墨俣町
墨川

▼種 類 驛 (大垣驛より四哩八分、到着時間約十二分)
墨俣町——驛の南卅丁安八郡の東端、墨俣川(長良川)に沿ふ美濃路の一驛である。古來川を隔て、屢々合戦のあつた處、永祿五年(凡そ三百年前)豊臣秀吉が木下時代に城塞を此處に構へた、所謂一夜城の奇功を奏して敵軍を驚かした舊地である。川柳に「秀吉は潰しの利かぬ城を建て」とある。

▼岐 阜 驛 (大垣驛より八哩七分、到着時間約廿五分)

此驛から東、各務ヶ原を経て美濃太田驛に通じてゐる高山線が岐れてゐる。又驛前から美濃電鐵が接續してゐる、同線は市内を貫通して長良橋に至る市内線と、長良から北、高富町に至る高富線、新岐阜停留場から木曾川の北岸笠松町に通ずる笠松線及美濃町に至る美濃線の四線で、其他岐阜の交通機關としては市の西端忠節橋から西、北方町に至る岐北鐵道がある。

岐阜市

岐阜市——岐阜縣廳の所在地、濃尾平野の北に位し、飛騨高山を背にして中仙道の要衝を占め、稲葉山其東を擁し、長良川の西北を流る、水陸の便備はる山水秀麗の商業地である、明治二十四年の大地震には全崩千戸、半崩二千戸を數へ、火災六ヶ所、焼失二千戸餘に及び、死亡二百六十人、負傷七百人といふ

岐阜公園

大惨害を蒙り一時荒涼を極めたが日に追ふて舊に復し今日の繁昌を來した、縮緬、提灯、團扇、傘、油團等の産が知られてゐる。

板垣伯の銅像

岐阜公園——驛の東北卅丁(電鐵の便がある)金華山の麓、舊城主の居館址千疊敷を包容し、御料林の一部、自然の境を併せて、明治二十一年に開闢したる處、園の中央に「板垣は死すとも自由は死せず」と傲語した當年の意氣を偲ぶことが出来る板垣伯の銅像が建つてゐる、尙園内に三重塔、招魂社、大運動場等がある、老樹繁茂、花木又頗る多く四季の遊樂に適してゐる。

古城址

古城址——公園の後山、即ち海拔千百十六尺、金華山の頂上にある、登るには梶川町から公園からするこの二路があるが公園からする方が路も樂で樹間から長良川の清流を隱見して眺めよく、龜の橋、龜の石、神置の松等が點在してゐる、山は稲葉山ともいひ、在原行平が國守であつた當時の詠に
立わかれ稲葉の山の峰に生ふる、まつこしきかば今歸りこむ 行 平

なご、早くから詞藻に入つてゐる、城は建仁年間(凡そ七百廿年前)二階堂行政の築く處、永祿年間(凡そ三百年前)齋藤氏の居城となり、後織田氏の有に歸し關ヶ原の役に織田秀信西軍に應じて城は陥り終

名和昆虫研究所
大佛殿

に廢城となつたのである、今尙其當時を偲ぶ古堡が残りてゐる、又保勝會が建設した模擬の天主閣がある、そこを望むと、北には遠く白山御嶽の山脈、近く惠那の群峰、西に伊吹の高嶺、市は脚下に、長良、木曾、揖斐の三大川の奔流せる状等、ここ更に述べるまでもなく頗る雄大な景趣を備へてゐる。公園の西南端大宮町に有名な名和昆虫研究所がある、其西近く大佛町に大佛殿がある、寺は黄檗宗に屬し、金鳳山正法寺と號ふ、天和三年廣音和尚の草創、本尊は籠細工に一切經の古本を以て張り上げた四丈五尺の毘盧那佛で胎内に慈覺大師の作といふ藥師佛を納めてゐる。

伊奈波神社

伊奈波神社 — 大佛の南五丁、稻葉山の西麓にある、縣社、彦多都彦命以下三神を祀る、社殿は貞享二年(凡そ二百四十年前)徳川光友の改築で壯麗を極めたが明治二十四年の大震に燬失し今は同三十年の再築である、老樹鬱蒼として溪谷畫向暗く、又櫻樹が知られてゐる。同社の一の鳥居の側に善光寺がある、天正年間(凡そ二百五十年前)織田信長が信濃の善光寺如來を移して堂宇を建立したと傳ふる處で、堂宇は近來の再築である。善光寺から權現山(金華山つゞき)に沿ひ萬力町を南にさると鷲谷に東別院がある、眞宗大谷派の別院で俗に東御坊といはれ、堂宇頗る宏壯なるものであつたが明治二十四年の震害に罹り、

善光寺

東別院

美江寺觀音

今の本堂は其後のものである。東別院の西五丁美江寺町に美江寺觀音がある、天臺宗、延曆寺の末寺で大日山と號ひ、本尊十一面觀音を安置してゐる、天文年間(凡そ二百九十年前)時の城主齋藤道三が他から移した靈刹で本尊は國寶に成つてゐる。

西別院

西別院 — 美江寺觀音の西北近く西野町(驛の北十五丁)にある、眞宗本派本願寺派の別院、俗に西御坊といふ、明治十一年、先帝陛下御巡幸の御行在所となり、同廿二年には今上陛下東宮時代に御地行啓の節御休泊の光榮を辱のふせる市内屈指の巨刹た。前記美江寺觀音の南約五丁彌八寺町に彌八地藏がある、昔加賀井彌八郎といふ人が土地を購ひ、岐阜町の墓地となし地藏尊を安置したといふが、今は當市繁榮の中心地となりその當時の佛は偲はれない。彌八地藏から西の金町に出で南に二三丁行くと金神社がある

彌八地藏

金神社

圓徳寺

(驛の北五丁)彦多都彦命の後妃二王子を祀る社で、境内の東南隅に「加夫良木の櫻」といふ稀有の老樹がある社の東南近く神田町六丁目に圓徳寺がある、本派本願寺の末寺で、岐阜落城の時、中納言秀信近臣十四名と共に此寺に入り剃髮したといふ遺跡でその遺物も残りてゐる。

篠ヶ谷梅林

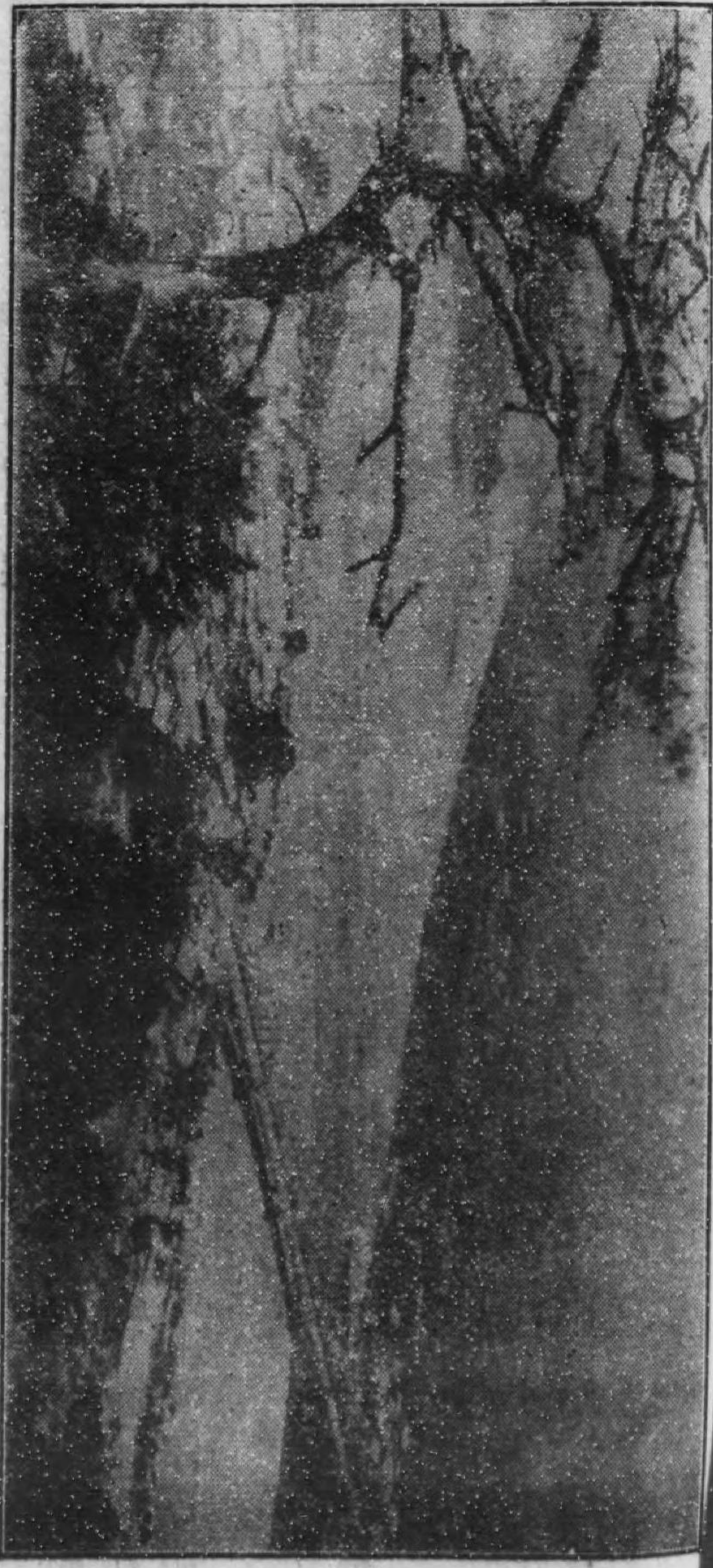
篠ヶ谷梅林 — 驛の東北十七丁(電車の便がある)數百株の梅林で、花の頃は杖を曳くものが多い、梅林

瑞龍寺

長良川の鵜飼

長良橋

崇福寺



川 長 長

の西三丁に臨濟宗の名刹、金龍山瑞龍寺がある。

長良川の鵜飼——岐阜公園より西に電車道に出で、北すると長良橋に出る(驛から電車がある)橋は延長百卅五間、プラットトラス式の大鐵橋で、南詰に遊覧船の會社がある、櫻幕と岐阜提灯とて装ふ見物船は即ちここから出るもので乗合も出来れば別に一艘雇ふことも出来る、川は源を大日岳に發し、吉田、板取、武藝等の諸川と合してここに来るもので流れ緩かに水清く、夏季の納涼に最も適してゐる、鵜飼の漁期は五月十一日から十月十五日に至る間で、月明りを厭ふ爲めに満月の夜と雨後の濁水を除く外は毎夜之れを行ふ、上弦は月の入るを待ち、下弦には月の出でさる前に、上流から漸次下流に狩り下るもので船の數は五艘から七艘まである、舳先には篝火を焚いて水面を照し、烏帽子と腰袋を着けた鵜匠は各十二羽の鵜を疾呼して之れを使役し、鉦を叩く音、激勵するの聲、水面に響いて頗る壯觀である。長良橋北詰の西三丁長良村に崇福寺がある、臨濟宗、文明元年(凡そ四百五十年前)の草創、織田氏の菩提所で、後國に信長父子の塔がある、又本堂の天井を血天井といひ岐阜城木丸の床板をばづして用ひたるものであるといふ。次の▼木曾川驛省略。

▼尾張一の宮驛

(大垣驛より十七哩、到着時間約五十分)

こゝから尾西鐵道が接続してゐる、同線は關西鐵道富から津島町を経て此處に來り更に北、木曾川の南岸笠松町に接して木曾川驛を設けてゐる。又名古屋電氣鐵道の市外一の宮線が岩倉を経て此處に通じてゐる。一の宮町——岐阜、名古屋間の名邑で、毎月三八の日に開かる、萬市は熱田の魚市、枇杷島の青物市と共に二大市の稱がある。

眞清田神社

眞清田神社——驛の北五丁にある、國幣神社、尾張一の宮で、神武天皇三十二年(凡そ二千五百五十年前)の鎮座と傳ふ、國幣立命外三神を祀る、翠松古杉社殿を覆ひ、境域廣潤、毎年四月三日の桃花祭は頗る盛観である。

いちのみや名さへなつかしふたつなく、みつなきのりを守るなるべし。十六夜日記

妙興寺

妙興寺——一の宮町の南十餘丁妙興寺にある、臨濟宗、圓光大照禪師の開基、貞和四年(凡そ五百七十年前)の創建、後光嚴天皇の勅願所で、現存せる覺皇寶殿の一字は應永以前(凡そ五百卅年前)のものであるといふ當國第一の名刹だ。次の▼階澤驛▼枇杷島驛省略。

▼名古屋驛

(大垣驛より廿七哩五分、到着時間約一時廿分、急行約五十五分)

關西本線(同線部参照)と中央本線の始發驛である。中央本線は東海道本線と同じく東京を起點として、甲府、鹽尻を経て、木曾路を走つてこゝに通ずるもので、其外名古屋の交通としては、名古屋築港に至る臨港線、名古屋電鐵(市、市外線)、愛知電鐵、一色電鐵、尾張電鐵、瀬戸電鐵、中村電鐵等がある。

名古屋市

名古屋市——徳川氏の親藩、所謂御三家の地である、古名を那古屋、那古野に作り我國第四の都府で、東京、京阪の地に對して「中京」の稱がある處、近年名古屋港を築いて更に活氣を加へ殷盛を極めてゐる、慶長十五年(凡そ三百年前)名古屋城が築かれてから清州の士民が移住して遂に市街を成したもので町の稱呼は重に清州の舊稱をこつたものであるといふ、又「音に聞けた那古屋の山を、ひきやならした肥後の衆」と當時の俗語に加藤清正の土工を唄つてゐるが今は其遺址も詳でない。地は濃尾平野の南部に位し、伊勢灣に沿ひ、東西三府の中心地として其要樞を占めてゐる、産物の主なるものは、織物、陶磁器、セメント、時計、機寸、履物等である。

名古屋城

名古屋城——驛の東北廿五丁(電車長島町の北三丁)にある、慶長十五年(凡そ三百年前)徳川幕府が西

國諸侯に課して築城せしめたるもので、俗諺に「尾張名古屋は城でもつ」とまでに唄はれた名高い處、天主閣は加藤清正の手になりしもので、巨石を疊んで臺とし、五層の樓閣の屋上には著名な一双の金鯱が燦として輝いてゐる、鯱の高さ八尺五寸、胴の周圍七尺三寸、其鱗片は黄金大判一千九百四十枚を鑄て造つたものであるといふ、今は舊本丸の一部を離宮となし舊城内の地には第三師團司令部が置かれ兵舎が建ち連つてゐる。

東照宮

名古屋神社

建中寺

若宮八幡宮

東照宮 — 電車長島町停留所の前にある、縣社、徳川家康、義直、慶勝を合祀する社で、元和五年（凡そ三百年前）舊城三の丸の地に創建せしを後こゝに遷したのであるといふ、東隣に名古屋神社がある、縣社、素盞鳴尊を祀る處、俗に龜尾天王社といひ、延喜十一年（凡そ千十年前）の鎮座と傳ふ。
建中寺 — 名古屋神社から東廿丁（電車本町下車）筒井町にある、淨土宗、慶安四年（凡そ二百七十年前）藩社義直追福の爲め二代光友が創建せし處、代々尾州家の菩提所で、其廟墓がある、境内廣濶、殿堂壯麗、殊に靈屋は東京の芝増上寺のそれと似てゐる。
若宮八幡宮 — 驛の東南廿丁（電車矢場町の西三丁）末廣町にある、前記名古屋城から本町筋を真直に南

大須觀音

旭遊廓

浪越公園

七ツ寺

西本願寺別院

東本願寺別院

にこれは十三四丁にして至る、應神、仁徳兩帝を祀る、天武天皇の御宇の鎮座と傳へ、慶長十五年城内より遷座されたる古社である。

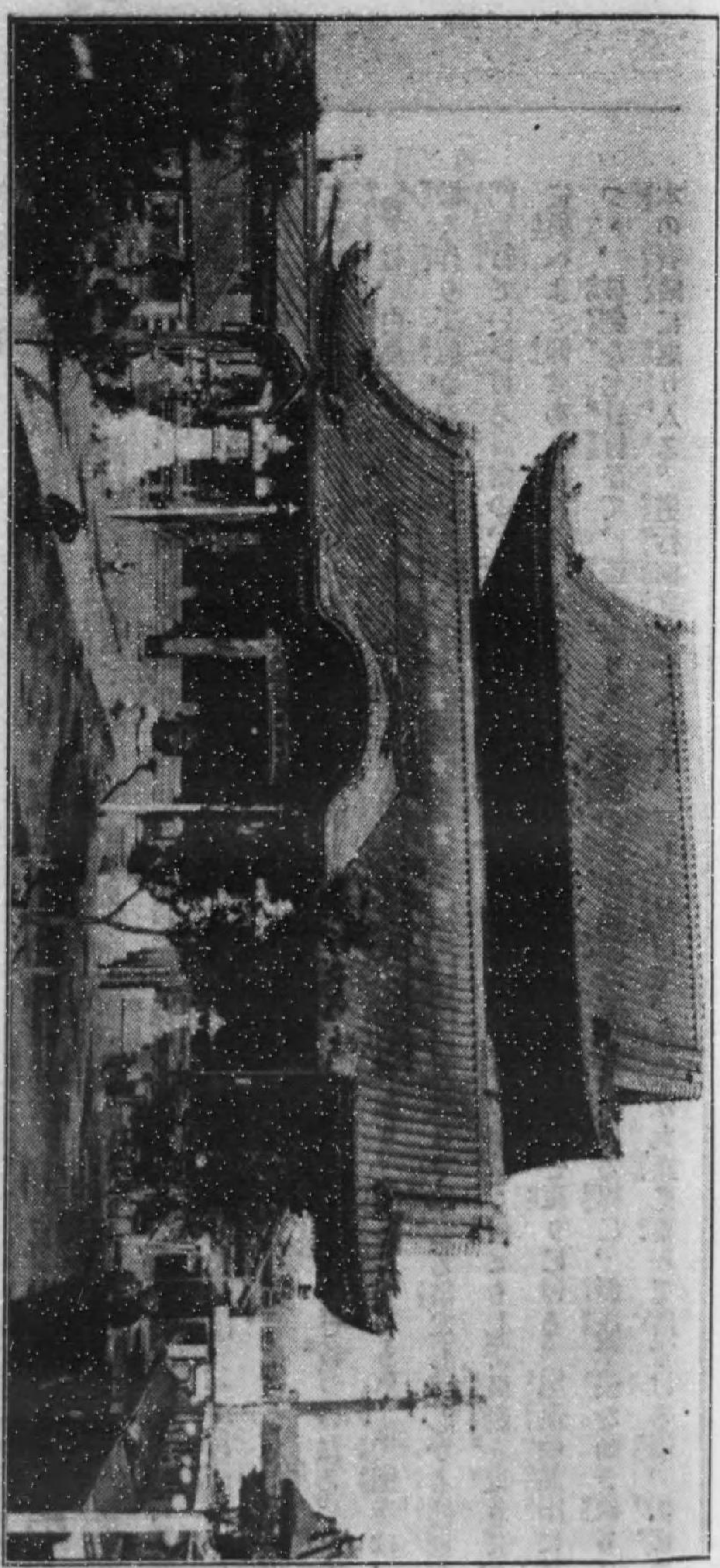
大須觀音 — 若宮八幡宮の西南三丁（電車門前町）にある、附近は東京の淺草、京阪の千日前、新京極ともいふべき市中第一の熱鬧地で晝夜雑沓を極めてゐる、寺は眞福寺といひ、慶長十七年（凡そ三百年前）美濃の大須より移したので今にその俗稱がある、本尊は弘法大師作の觀世音で、前立に聖徳太子作の觀世音を安置してゐる、又寺に古典籍を多く藏し、大須本、眞福寺本と稱ひ世に著はれてゐる、寺の西に旭遊廓北隣に浪越公園がある。

七ツ寺 — 大須觀音の近くにある、正覺院長福寺といひ、天平七年（凡そ千九十年前）行基の開基、平重盛の歸依ありし寺で、慶長十六年中島郡七ツ寺村から移轉したといふ古刹、寺寶に古佛像、古文書等を多く藏してゐる。尙同町に西本願寺別院がある、顯如上人が伊勢長島の廢寺顯證寺を清洲に再興したのを後此地に移したもので、東本願寺の別院と共に市内屈指の巨刹である。西本願寺から道を東南に四五丁、下茶屋町に東本願寺別院がある（電車東別院前）、元祿十五年（凡そ二百廿年前）の建立、文化年中（凡

鶴舞公園
動物園
開天閣
噴水塔
奏樂堂
熱田神宮

その十年前の改修、堂宇結構宏壯を極め、用材の美日本無比の稱がある、境内櫻樹多く花の頃は美しい
鶴舞公園 — 前記西本願寺から電車道に沿ふて東に約十丁（電車鶴舞公園前）鶴舞町にある、明治四十三年に開催した關西府縣聯合共進會の後を公園にしたもので、園域十畝坪、動物園、開天閣、噴水塔、奏樂堂等と其他の設備が遺憾なく整つてゐる當市最大の公園だ。

熱田神宮 — 東本願寺の南方卅丁（電車神宮東門下車）新宮坂町にある、（東海道熱田出驛の近く）官幣大社、中殿に日本武尊、西殿に天照大神、素戔鳴尊、東殿に官貴媛命、建稻種命を祀り、土用殿に三種神器の一なる草薙の寶劍を奉祀してゐる伊勢神宮に亞ぐ大社である、傳へ云ふ日本武尊東夷征伐の御時伊勢大廟に詣ふでられ倭姫命から神劍を授かつて駿河に至り、寶劍の威徳によつて夷賊を燒亡されしこそは人のよく知る處、東夷平定の後此地に至り官貴媛命を辛し、終に神劍を留められ、既にして尊は伊勢に於て薨じ給ふに及び媛は其兄健甕種命と議つて神宮を營み寶劍を安置し以て尊の靈を鎮め給ふといふ、境域極めて廣く、老杉古松生ひ繁りて神威を偲はしむ、昔は四圍の神門といひ今の鎮星、春敵、海藏の三門の外に清雪といふ御門があり、又八圍の鳥居とて八方に大華表があつたさうだ、今の社殿は明治二十六年



音 觀 須 大

八劍神社

年の改造で頗る神威を極めてゐる。殿前に渡殿、釣殿、祭文殿、廻廊、勅使殿等と末社がある。神苑の南に八劍神社がある。熱田神宮の別宮といひ、元正天皇の和銅元年(凡そ千二百年前)の鎮座、新造の寶劍を神體としてゐる。平家物語の劍卷に當社の縁起が記されてゐる。

「草薙劍をば、桑の枝に懸き給ひしを、岩戸姫(宮寶媛)此を取り、紀大夫が田、一夜の内に森になりたる社の杉に、掛けて置かれたりけるが、夜々劍より光立ちければ、彼光杉に燃ゆつきて、焼け倒れにけり。田に杉の焼け倒れ入りたりければ、田も熱かりけるといふ心に、熱田とぞ名づけたる。日本武尊は、白鳥にて飛び落ち給ひて、神になる。今の熱田大明神是なり。(中略)さても草薙劍をば、寶殿を作りて置かれたりけるが、夜々に劍に光立つ。知法行徳の人ならでは見る事なし。しかも新羅の沙門道行といひける高僧の、日本に立つ劍の光を見て、帝にかたりければ、何ともして彼劍を取りて、我に與へよと仰せありければ、さては取りて進らせ候はんさて、日本にぞ渡りにける。尾張の熱田に詣つ、彼劍を七日行ひて、盗み取りて、五條の袈裟に裏みて、逃げける程に、劍袈裟を衝き破りて、本の寶殿に返り入る。道行向立ちかへりて、三七日行ひて、今般は九條に裏みて出でける間、袈裟をも

白鳥陵

名古屋築港

破る事得ずして、筑紫の博多まで逃げ歸りたりけるを、熱田明神安からぬ事と思召し、住吉大明神を討手に下し、道行を蹴殺して、草薙劍を奪ひ取る。帝生不動といふ將軍に、七の劍を持たせて、日本へぞ渡しける。生不動既に尾張國まで攻め来る。熱田の神宮悪き奴かなさて、蹴殺し給ひにけり。所持の七の劍を召取りて、草薙劍に加へて、寶殿に祝はれたり。今の八劍の大明神は是なり。(平家物語) 白鳥陵 — 神宮の西二丁白鳥町「法持寺」の境内にある、日本式尊の遺物を埋め陵墓をつくる處といひ平家物語劍の卷には「尊は御惱重くならせ給ひて、終に失せ給ひにけり。白鳥となりて、南を指して飛び給ふ。(中略)尊に仕へる人々、別を悲しみ奉りて、跡目につき行く程に、紀伊國名草郡に、暫く落ち留まりけるが、此處を悪くや思しけん、東國に飛び返り、尾張國松子の島にぞ飛び行きける。白鳥にて飛び給ひし時は、長さ一丈の白幡二旒と見ゆしなり。尾張國に飛び落ちぬ。其處をば白鳥塚と名づけたり。幡の落ちける處をば、幡屋(旅屋町)とて今にあり。兵衛佐頼朝は末代の源氏の大将となるべき故にや、彼幡屋にてぞ生れ給ふ。」と記されてゐる、寺は曹洞宗で弘法大師が熱田神宮へ參籠の時、地藏菩薩を刻んで安置したと傳ふる古刹だ。白鳥町から南行の電車に乗ると終點が名古屋築港である。

誓願寺

誓願寺——旗屋町にある、浄土宗、往昔熱田大宮司藤原季範の邸宅であつた處、源頼朝の母は即ち大宮司の女で、久安三年(凡そ七百七十年前)頼朝は此地で生れたのであるといふ、寺内に産湯の池、白旗の碑、頼朝の祠等がある。

熱田町

熱田町——昔は東海道五十三次の要驛で「宮」といひ、此地から伊勢の桑名に至るを「七里の渡」と又は「間違の渡」といつてゐたが今は鐵道の便によつて廢された、又この魚市場は枇杷島の青物市場と並び稱せられ、清須が尾張の首邑であつた當時から魚類の供給所として古い歴史を有してゐる、明治四十年名古屋市と合併され、今は同市の南區に成つてゐる。

「亭主船場迄送り來り「船頭茶、お二人様ぢや。頼みますぞ」彌次「時に忘れた。御亭主さん、昨夕お約束の、かの小便の竹の筒は」亭主「ホンニちんご切らして置きましたに、ドリヤ取つて參りましたよかい」亭主かの竹筒を取りに歸る。此渡舟、七里の海上、一人前四十五文ヅ、其外駄荷、乗物、皆それ／＼に賃錢を拂ひ、舟に乗る。此時亭主竹筒を取つて來り、亭主「サア、御客様其處へ投げますぞ」北八「何だ火吹竹か」彌次「之れをあてがつてナ、さやらかすのだ。ヨシ／＼、イヤ御亭主大きにお世

話、サア是で大丈夫たハ……」

おのづから祈らずとも神います、宮のわたしは浪風もなし。

(中略) 乗合「コリヤ、何んぢやいな、水がねらう流れる、誰か土瓶を打ちこかいたさうな。ソレ／＼煙草入もびつしよりぢや。コリヤ堪らんは、ハアお前の小便ぢやな」と咎められて、彌次郎竹の筒の隠し所にうろたへて、まご／＼する。北八「エ、彌次さん何うしたのだ、お前小便するなら、其處へ上つて、竹の筒の先を海へ出してするのだ、めつそうな。船の中が小便だらけに成つた、エ、汚ねへ／＼」彌次「おれは又、へ仕込んで、後でぶちまけるのかと思つた」乗合「イヤハヤ途方もない。コリヤ臭くてならんわい(中略)船頭「エ、ソレまた竹の筒からおちる。それも早う捨て、仕舞なせへ」彌次「イヤ之れは其處へやらう、欠吹竹にならうから」北八「エ、お前が小便したものを、ナニ火吹竹になるものだ、早う拭きなせへ。舟のあかぬ」といぢめられて、彌次郎襦袢をはぎし、そこらを拭く、彌次「コリア皆様御免なせへ。飛んだ番狂はせを致しやした」と遂にない情氣かへりてそこら取片附ける。乗合皆苦笑して、たんまりである。この内早くも船は桑名の岸につく。乗合「來たぞ／＼、小便にこそ濡れたれ

- 中村公園
- 豐國神社
- 太閤山常泉寺
- 妙行寺
- 八事山遊園
- 興正寺
- 名古屋土産

船は恙なく桑名へ来た。日出度いくと皆々これより上りて此宿に喜びの酒汲みかはしぬ(膝栗毛)。
 中村公園——名古屋驛の西近くから中村電鐵に依ればすぐた、地は豊臣秀吉 加藤清正の生れし處、園内に秀吉を祀る豐國神社がある、又附近の本間山常泉寺には秀吉の像を藏し、其産湯の井及び秀吉の手植といふ狗骨樹が境内にある、清正の邸址といふ妙行寺には肥後熊本から傳來した清正の木像を安置してある
 八事山遊園——前記鶴舞公園の東北三丁尾張電鐵の起點千早から乗車して終點で下車すればよい、又市街電車の今池から同線に連絡してあるから同停留所からするもよい、遊園は櫻樹と眺望とで知られ、八勝館といふ立派な料理屋もある、眞言宗の巨剎興正寺は俗に「尾張高野」といひ、昔は婦人の參詣を禁じてゐたといふ、佛殿、五重塔等と夥しい石塔がある、本尊は大日如來の座像、堂前から海を隔て、紀、勢、三の諸峰を望んだ風景は頗る絶佳で、名古屋市民の行樂地である。
 以上で名古屋の名所舊蹟は大略終つたのである、尙附近の著名なる地は項を改めて説くことにする。
 名古屋土産——七寶燒、大根相漬、羊羹等。

山陽本線

神戸——岡山間

山陽本線とは神戸驛を起點として西に、瀬戸内海の沿岸を走つて姫路、岡山、廣島を経て下の關に至る三二九哩三分をいふのである、其間約十三時間を要し、下の關から西は連絡船によつて門司に渡り、鹿兒島本線に連絡し、一つは釜山に航して南滿州鐵道朝鮮線に連絡するのである、又神戸から東は東海道本線となつて大阪、京都、名古屋を経て東京方面に運輸してゐる我國有鐵道の幹線である。
 本線の案内は本書の主旨に基き(東海道本線参照)起點の神戸から西、岡山を以て區切となした、又本線は兵庫から西、明石迄、兵庫電車で殆んど並行してゐるから便宜上其間の驛を總括して列記し、名所舊蹟は同電車の各停留所を参照せらるゝやうにした。

▼神戸驛 (起點)

東海道本線の終點である、神戸市の案内は東海道本線の項に詳しく説いて置いた。
 ▼兵庫驛(神戸より一哩一分、到着時間約六分)——神戸市内の一驛此驛から和田岬へ短支線が岐れてゐる

- 東海道本線
- 神戸市
- ▼兵庫驛

▼豊取驛

▼豊取驛(神戸から三哩二分、到着時間約十三分)——豊取山驛の北方彌生寺西北廿丁兵庫電車西代参照

▼須磨驛

▼須磨驛(神戸より四哩六分、到着時間約十八分)——須磨寺北七丁兵庫電車須磨寺参照。次の▼鹽屋驛省略。

▼垂水驛

▼垂水驛(神戸より八哩二分、到着時間約三十分)——海神社東一丁兵電垂水参照。

▼舞子驛

▼舞子驛(神戸より九哩四分、到着時間約三十五分)——舞子公園驛の附近兵電舞子参照。

▼明石驛

▼明石驛(神戸より十二哩、到着時間約四十二分)——明石市、明石城址西北三丁、兵電明石驛前参照。

▼大久保驛

(神戸驛より十五哩九分、到着時間約五十三分)

天郷の梅林
金ヶ崎梅林
屏風ヶ浦

天郷の梅林——驛の北廿五丁天郷の小丘にある、千餘株の八重薄紅梅の梅林で、二町歩の畑地に枝を交へてゐる、丘から南淡路島を望んだ風光が頗るよい。金ヶ崎梅林は驛西北十五丁金ヶ崎の小丘にある、天郷に比べて樹も若く数も少いが眺望がよいので花の頃は杖を曳く人が多い。驛の南廿丁屏風ヶ浦は海水浴と風景がよいので知られてゐる。

▼土山驛

(神戸驛より二十哩、到着時間約一時二分)

二見港

二見港——驛の南廿五丁、明石、高砂間の一港で、古來二見浦といはれた勝区である、浦を東二見、西二見の二つに分け、今は東二見に防波堤を築いて泊舟の便にしてゐる。

玉くしけ二見の浦の郭公、明方にこそ鳴渡りけり。

名 寄

附近は章魚の漁獲最も多く、子を海蔵化と名付けて播州の一名産になつてゐる、海邊松樹連り、淡路島を望んだ風光は實に絶佳で海水浴場として好適の地である。

手枕の松

手枕の松——驛の西一里餘丁別府村(次驛加古川から輕鐵の便がある)住吉神社の境内にある巨松で、幹の太さ二圍に餘り、東西四十八間南北十三間さながら人が肘を枕に眠つてゐるかの様に見るので名がある。風ふけば木陰も涼もあら磯にたれかいをねし手枕の松。 富小路貞直

▼加古川驛

(神戸驛より二十四哩三分、到着時間約一時十三分)

こゝから播州鐵道が接続してゐる、本線は加古川から北に厄神、粟生を経て西脇、市原に至り、三木線は厄神から岐れて三木町に通し、北條線は粟生から分岐して北條町に(西國第廿六番の法華寺は此線に依る)高砂線は加古川から西南高砂町に(播州の松めぐりは此線に依る)運輸してゐるのである。

加古川町

加古川町——加古郡の町、中國街道の一驛で、天正の頃（凡そ二百五十年前）賤ヶ岳の七本槍の一人糟谷内膳の居た處といふ、町の西端を流る、加古川は賀古川、鹿子川に作り、印南川ともいはれた川で、町の西で二つに分れ、一は荒井村に流れ洗川となつて海に注ぎ、本流は高砂町の東から海に入つてゐる。

たび人の駒うちわたすむさし鏡、たゝなそかへる加古川の波。 爲家

明日よりは將行の河の出て、いなば、留まるわれは戀つゝやあらむ 萬葉集

鶴林寺

鶴林寺——驛の南十五丁北在家（播鐵北在家下車）にある、天臺宗刀山と號ふ、鹿嶋寺の別院で俗に戸田太子堂ともいつてゐる、用明二年（凡そ千二百卅年前）聖德太子の開基、佛殿に太子十六歳の植髮像と釋迦三尊、四天王の像を安置してゐる、境内の藥師堂、三層塔は何れも創建當初のものであるといふ、又寺に千四五百年を経たといふ古鐘が傳へられてゐる。

尾上相生松
尾上神社
片枝の松

尾上相生松——鶴林寺の西南七丁（手枕の松から西北廿三丁）（播鐵尾上下車）尾上村にある尾上神社の境内にある松で、一つの根から雌雄兩種の松が生じてゐる奇體なもので、その隣に都懸しき片枝の松といつて枝が皆東に片寄つた松がある、神社は神功皇后が三韓から御凱旋の時草創されたと傳ふ社で、表筒男以

下二柱の神を祀る、社殿の屋舎に吊るした梵鐘は皇后が三韓から持ち歸られたといふ非常に音色のよい古鐘で、尾上の鐘といはれてゐる。

高砂の尾上の鐘の音すなり、曉かけて霜や置くらん。 前中納言匡房

高砂町——尾上神社の西廿丁加古川に架す二百間の相生橋を渡ると至る（播鐵高砂下車）、徳川時代は姫路藩の所領で藩の米原があつた所、古來回漕船運を主とせるより有爲の航海者が出で、呂宋、暹羅まで航行したといふ天竺徳兵衛も此浦の産であるといふ、昔は松樹多く歌などによく詠まれた處だが今は開かれて人家となり、當時の風致は失はれた。

誰をかも知る人にせむ高砂の、松もむかしの友ならなくに。 藤原興風

打よする浪と尾の上の松風と、登高砂やいつれなるらん。 源順

高砂相生松——高砂町の縣社高砂神社の境内にある巨松で、尾上の松よりも一層よく繁茂してゐるので美觀た、幹は赤松、黒松の二つで明石の城主本多政武が植ゑいた三代目であるといふ、神社は神功皇后の創建で兼葦鳴尊、釋田姫、大己貴命を祀る、俗に牛頭天王社といひ、社殿は元和三年（凡そ二百年前）本多

高砂相生松
高砂神社

高砂町

忠政の再建である又社地は天正の頃別所長治に屬してゐた梶原平兵衛景行の居城の址たさうな、巨松の側に謡曲に現れる尉と姥の像を埋めたといふ祠がある、謡曲高砂は松の精が現れて由來を語る目出度ものた「謂れを聞けば面白や。さてくさきに聞えつる。相生の松の物語を、所に言ひ置く謂れはなきか。昔の人の申せしは、是はめでたき世のためしなり。高砂といふは上代の萬葉集の古の義、住吉と申すは、今此御代に住み給ふ延喜の御事、松は盡きぬ言の葉の、榮は古今相同じと、御代をあがむる喻なり。よくく聞けばありがたや。今こそ不審春の日の、光和らぐ西の海の、かしこは住の江、こゝは高砂、松も色そひ、春も、長閑に四海波靜にて、國も治まる時つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや。逢ひに相生の、松こそめでたかりけれ。けにや仰ぎても言もおろかや斯る世に、住める民とて豊なる、君の恵みぞありがたき。君の恵みぞありがたき(謡曲高砂)

十輪寺——高砂町の西にある、淨土宗西山派、圓光大師(法然上人)廿五遺跡の一で、寺に讃岐の祥福寺から移したといふ弘法大師の寶瓶の影像を蔵してゐるので「寶瓶山」と號ふ、境内に文祿征韓の役に従軍した此地の水手の供養塔がある。

十輪寺

寶殿 驛

(神戸驛より二十六哩四分、到着時間約一時廿分)

石の寶殿

石の寶殿——驛の西南半里米田村鹽市の山腹にある(高砂の西北一里餘丁)、幅二丈三尺高さ二丈六尺、その上に雅松が生じてゐる、周圍には水をたゝねて、石は恰も浮いてゐるかの様に見える、上古大日貴命、少彥名命の二神が夜の中に石殿を作らんとして工半にて夜が明けたので、その儘中止して去られたのがこの石であるといふのだ。石の寶殿の南三丁の山腹に觀瀾處の三大文字が刻された一大巖石がある、姫路の儒臣水峰文峰の刻せるもので、此上から望んだ播州灘の風光は觀瀾處の文字に反かない。

觀瀾處

高御座山

高御座山——驛の北卅丁大字成井から坂路十八丁で頂上に達する、山頂に高御座の神を祀る小祠がある、其邊は大古神座の遺跡であつたと傳ふる處で巨巖峙ち、山は海拔千餘尺、全山岩石よりなつてゐる。

時光寺

時光寺——驛の西二十五丁字阿彌陀にある、西の善光寺ともいはれた有名な寺で淨土宗西山派、遍照山と號ひ、又俗に「阿彌陀堂」ともいふ、時光上人(多田滿仲九世源賴經)の開基、後嵯峨帝の勅願所であつた古刹、初めは曾根に建立したのを後今の地に移したのである。又阿彌陀の地は延元元年五月(凡そ五百九十年前)兒島備後守範長が自刃した處で其墓が驛附近の路傍にある。

「去程に、此道より落人の通りけるを聞て、赤松入道三百餘騎を差遣はして、那波邊にぞ待たせける。備後守僅に八十三騎にて、大道へ志て打ける處に、赤松が勢、さある山陰に寄せ合つて、落人を見らるは誰人ぞ。命惜くは弓をはづし、物具脱で降人に參れと詞をそかけたりける。備後守是を聞て、からくぞ打笑ひ、聞も習はぬ言哉。降人に可成は、筑紫より將軍の様々の御教書を成してすかされし時こそ成らんすれ。其をたに引さきて火にくべたりし範長が、御邊達に向つて、降人にならんぞ、ぬこそ申すまじけれ。物具ほしくはいでとらせんと云ふ體、八十三騎の者共、三百餘騎の中へ喚で懸入り、敵十騎切つて落し、二十三騎に手負はせ、大勢の圍みを破つて、濱路を東へぞ落行ける。赤松が勢案内者なりければ、被懸散ながら、前々へ馳過て、落人の通るぞ。打留め物具はけと、近隣傍庄にぞ觸れたりける。依之、其邊二三里の間の野伏共、二三千人出合て、此の山の險、彼の田の邊に立渡りて、散々に射ける間、備後守が若黨共、主を落さんが爲に、進んでは懸破り、引下ては討死し、那波より阿彌陀宿の陣迄、十八度まで戦つて落ける間、打残されたる者、今は僅に主従六騎に成にけり。備後守或辻堂の前にて馬を控へて、若黨共に向つて申けるは、あはれ一族共たに打連たりせば、播磨の國中をば、安

姫路城 (春佳畫)



法華寺

く蹴散らして通るべかりつる物を、方々の手分に向けられて、一族一所に不届つれば、無力範長討たるべき時刻の到来しける也、今は可通共覺へねば、最後の念佛心閑に唱へて、腹を切らんと思ふぞ。其程敵の近附かぬ様に防けさて、馬より飛んでおり、辻堂の中へ走り入、本尊に向ひ手を合せ、念佛高聲に唱へて、腹一文字に切切つて、其刀を口に加て、うつぶしに成つてぞ伏たりける。(太平記)

法華寺——驛の北二里半、下里村坂本法華山にある、(加古川から播州鐵道に依り北條線に乗替て法華口で下車すればよい)一乗寺と號ふ、白雉元年(凡そ千二百七十年前)法道仙人の開基、本尊聖觀音を安置してゐる、西國第廿六番の靈場

春は花なつは橘秋はきく、いつもたにせぬのりの花山。

詠歌

寺傳による開基の法道仙人が天竺から渡來して此山に留まり空鉢を飛ばして供養を受けてゐることが觀聞に達し、孝徳帝御惱のとき仙人をして祈らしめ給ふに立所に平癒したので觀感の餘り勅して堂宇を建立せられたのが當寺で仙人の持佛の本尊を安置し、白雉元年御臨幸の節一乗寺たる勅額を賜ふといふ、三層堂、開山堂、常行堂、行者堂、太子堂等の堂宇がある。

會根天満宮

會根の松

國分寺

八家地藏

會根驛

會根天満宮——驛の南半里、(石の寶殿の西南廿五丁)會根村にある、縣社、天徳日命、菅原道真を祀る此地の産土神で、菅公左遷の時一松を手植されたる處といふ、今の社殿は天正六年(凡そ二百四十年前)豊臣秀吉が寺澤越中守に命じて再建したるものであるといふ、有名な會根の松は即ち菅公が手植になつた松苗が生育したのであるが今は枯て現在のものは古株の傍から生じたといふ老松の一粒種で百二十年の長壽を保つてゐる、高さ三丈、東西十七間、南北廿間、幹が三抱もあるといふ見事なものだ、「六つ昔の高砂や尾上の松や會根の松」と俗諺に唄はれてゐる。

着

(神戸驛より三十一哩四分、到着時間約一時廿五分)

國分寺——驛の西北約四丁御國野村字國分寺にある、俗に「牛寺」といひ、天平九年(凡そ千九百年前)聖武天皇が勅して建立せられた國分寺の一である、眞言宗、行基作本尊薬師如來を安置してゐる、造營の際に靈牛が現れて用材を皆運んだといふので「牛堂山」の山號がある古刹だ。

八家地藏——驛の南一里半的形村字福泊にある、著名な地藏尊で行基の作といひ正安三年(凡そ六百廿年

前)築港のとき此處に奉安したのである、又地藏尊は石が好きで奇石小石等を奉つて願を掛るを例とする、福泊は古「福泊」といつた海驛である。

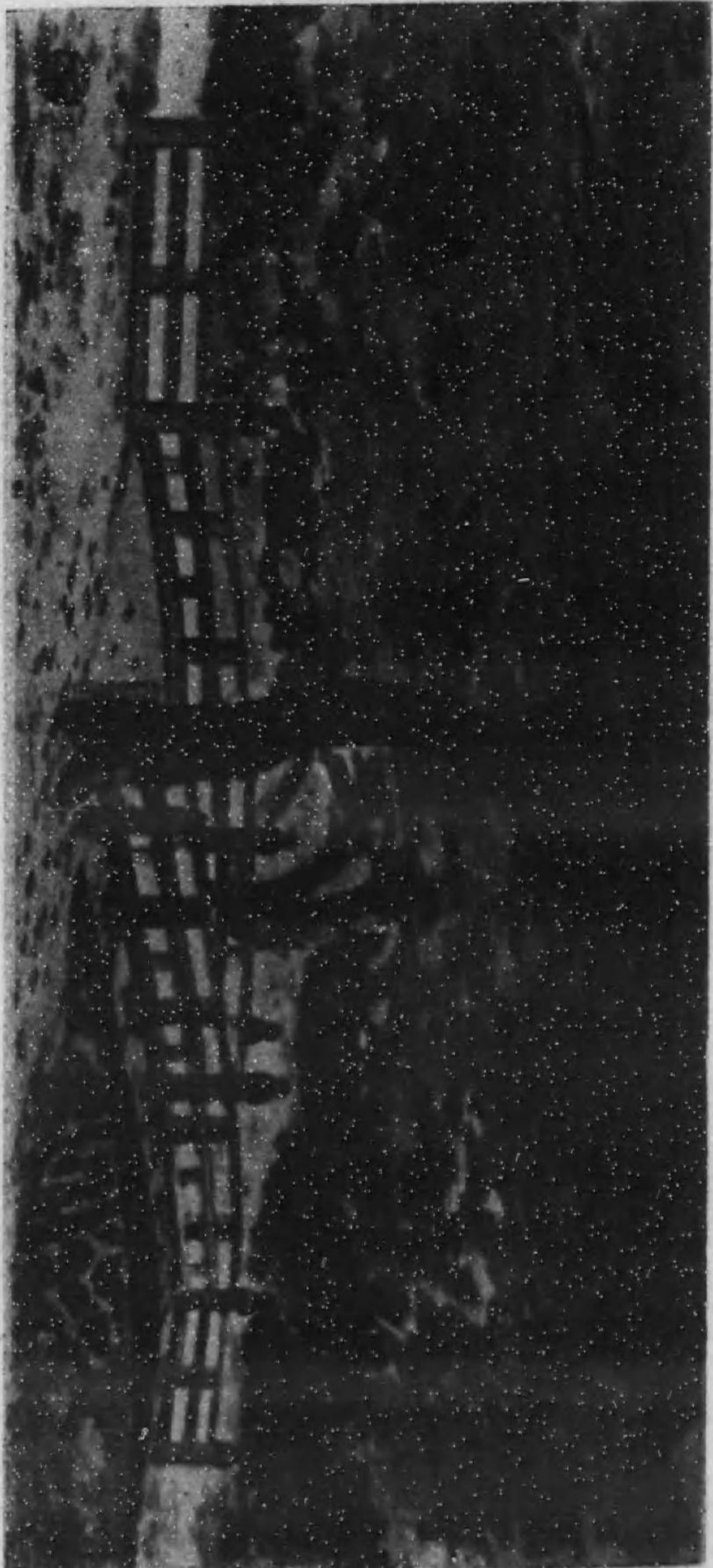
▼福路驛

(神戸驛より三十四哩一分、到着時間) 約一時四十二分、急行約一時〇六分

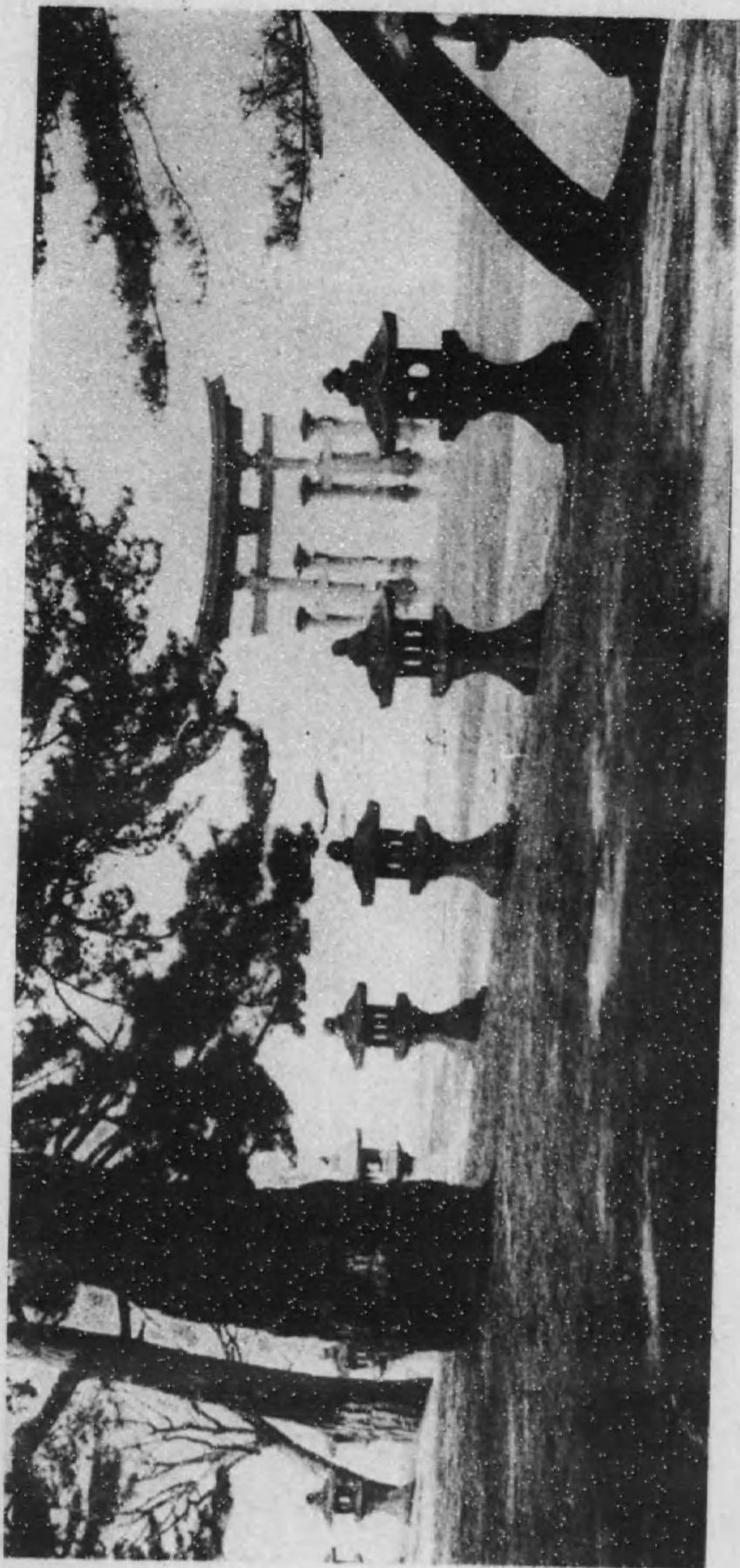
此驛から播但線が南北に分岐してゐる、南は飾磨港に通じ(飾磨線)、北は和田山に至つて山陰本線と接続してゐる(本線)。

姫路市
姫路城

姫路市—播州第一の都會、酒井氏十萬石の舊城下、中國、山陰の交通の要衝に當り、革細工、晒木綿、織物の産が知られてゐる、秀吉が中國征伐のとき本據を置いた所で、驛の北に姫路城が巍然として聳はてゐる、一に白鷲城ともいひ、貞和年間(凡そ五百、十年前)赤松貞範が初めて城をここに築き、天正年間(凡そ三百四十年前)豊臣秀吉の居城となつて今の天主閣が出来たのである、建築の様式は日本一の稱がある城で「来たか来て見たか姫路の城を、城は五層で七櫓」と俗語に唄はれてゐる、山崎合戦の後池田輝政の居城となり、徳川氏に至つて酒井氏を此處に封じ世襲して明治維新に至つたのである、今は陸軍の所轄で、第十師團が置かれてゐる。



姫路 (中々二書畫)



射楯兵主神
於菊神社
十二所神社

船場本徳寺

景福寺

龜山本徳寺

飾磨町

射楯兵主神社——城廓内の東南(驛より十丁)にある、縣社、大日貴命、五十猛命を祀る。於菊神社は驛の近く十二所前町にある、本殿は十二所神社といつて淡島明神を祀る、社の後に播州皿屋敷で有名な烈婦お菊を祀る社がある、社前の玉垣内にある老樹は即ちお菊を縛つた樹であるといふ。

船場本徳寺——驛の西北十丁地内町にある、眞宗、東本願寺の別院で、元和三年(凡そ三百年前)他から移したといふ巨剎で、本尊阿彌陀如来と親鸞上人の影像を安じてある、今の本堂は享保三年(凡そ二百年前)八世海澄の建立、境内に海澄の手植といふ龜居の松がある、明治十八年、先帝陛下御西遊の御行在所となつた光榮を有する寺だ。本徳寺の北敷丁、城の西五丁に景福寺がある、舊藩主酒井氏の菩提所で、通幻和尚の開基、今の堂宇は寛文年間(凡そ二百六十年前)の再興といふ。

龜山本徳寺——姫路市の一驛飾磨線の豆腐町驛から乗車、龜山驛下車、東三丁) 姫路市の西南廿丁大字龜山にある、眞宗、西本願寺派の別院、蓮如上人の開基、代々連枝を以て住職させる屈指の巨剎で、堂宇壯麗、初めは同郡英賀村に創立したのを後今の處に移したといふのである。

飾磨町——(飾磨線の終驛飾磨下車) 龜山本徳寺の西南十餘丁、飾磨郡の町、海濱の一港津を濠保といひ

——山陽本線——

防波堤を築き、溝渠を穿つて町に通じてゐる、古の飾磨の津で和歌によく詠まれてゐる、

たのますはしかまのかちの色を見よ、あひそめてこそ深くなりけれ。新續古今集

我戀はあひそめてこそまさりけれ、飾磨のかちの色ならねども。詞花集

家島

風光明媚、海水浴によく、前面三里の海上に廿餘の島嶼、所謂家島群島が碁布してゐる。大なるを家島、男鹿島、西の島、坊勢島といひ其風景が陸前の松島に似てゐるので島巡りをする人が多い、家島は周圍三里廿丁、島民は漁を業としてゐる、飾磨に面して宮浦灣がある、宮浦の天神鼻に延喜式内の古社家島神社俗に白髭明神が鎮座されてゐる。

家島は名にこそ有りけれ海原を、あか戀きつる妹にあらなくに。萬葉集

白國梅林

白國梅林——播但本線野里驛の北八丁、水上村大字白國にある、山に倚つた千餘株の梅林で、花の頃は非常に美しい。

隨願寺

隨願寺——姫路驛の北一里餘、(播但本線野里驛の北廿五丁)、廣峰山の東、増位山の半腹にある、天臺宗、聖德太子の開基、太子が自ら巖に像を刻されたので今に太子谷の名が残つてゐる、天平七年(凡そ千百九

雲塚

風蘿堂

増位温泉

廣峯神社

書寫山圓教寺

十年前)行基が藥師如來の示現を受け、自ら其尊像を刻んで安置した處、後仁明天皇の勅を奉じて天臺宗を奉じ増位山の寺號を賜ふといふ、今の堂は天正十三年(凡そ三百四十年前)豊臣秀吉の再建、本堂、觀音堂、文珠堂、經堂、護摩堂等がある、雲塚は山の麓字太子谷にある、芭蕉翁の門弟惟然が師の養を傳へ、播磨の俳人千山に譲りしを、千山此處に塚を建て其養を埋めしといふ、傍にある風蘿堂は芭蕉の舊蹟岡崎の風蘿堂を移せるもので翁の木像を安じてゐる、附近に増位温泉がある。

廣峯神社——増位山の北、廣峰山の頂にある、山は海拔千六十六尺、山麓白國より十八丁で達する、縣社、素盞鳴尊を祀る、京都八坂神社の元宮で、本殿、拜殿、奥の宮、白帶神社、軍殿其他末社がある、老樹繁茂眺望がよい。

書寫山圓教寺——姫路驛の西北一里卅丁、山畑、田寺、御立を経て山麓書寫より更に山路約卅丁にして至る(播但本線野里驛より山麓書寫迄西北一里十丁)、山麓より寺に至る坂路の左右に後醍醐帝の御車寄の舊址、王子社、女人堂、定願寺、總門、東嶽社、大日如來、護法石等がある、寺は天臺宗、康保三年(凡そ九百五十年前)性空上人の開基、本尊如意輪觀音を安置してゐる、西國第廿七番の札所である、

はるくこのほれば書寫の山おろし松のひまきも御法なるらん。 詠歌
 論曲素拜櫻に「是は比叡山の性空いへる法師なり、我佛法擁護の爲、佛像を刻まんと思ひ、國々をまはり御衣來をたづぬる所に、爰に播州北天にあつて瑞雲たなびける山あり。人に問へば素蓋のを山といへり」此山の縁起を扱つてある、堂宇頗る壯麗を極めたが惜むべし大正十年火災に罹り寺寶も多く焼失した、豪勇武藏坊辨慶は此山で修業したと傳へ其硯水池なるものや如意瀧、烏帽子岩等の勝區がある。
 何を書何にを寫して歸る雁 涼布

▼網干驛

(姫路驛より六哩四分、到着時間約十七分)

此驛から龍野電車が接續してある、同線は南、網干港に、北は、鵜、龍野町を経て新宮町に通じてある。
 鵜斑鳩寺——驛の北廿丁(龍野電車に依り鵜停留所で下車すればよい)鵜村にある、天臺宗、推古帝十四年(凡そ千二百廿年前)聖德太子の開基、法隆寺の別院で、金堂に釋迦、藥師、觀音を安じ、三層堂に佛舍利を納めてある、往昔は堂宇多く頗る壯麗を極めたが、天正の兵火に罹り、今の堂は其後昌仙僧都が再建したるものである、太子堂に聖德太子自作の植髮像を安じ、毎年正月四日の太子祭には賽者で雑沓を極め

龍野電車
鵜斑鳩寺

龍野町

城址

龍野神社

聚遠亭

網干港

龍門寺

る、其他境内に仁王門、彌勒堂、鐘樓等の堂宇がある。

龍野町——次驛龍野驛の北一里餘丁(網干驛から龍野電車で龍野町で下車)、西播磨の都會、揖保川の西岸に臨む、脇坂氏五萬三千石の舊城邑である、名産龍野醬油は天下に名たる處で、揖保川の鮎、又龍野の名に依つて著はれてある、城址は町の北部、鵜籠山の南腹にある、今は其本丸の址に小學校が建てられてある、城は延徳年間(凡そ四百四十年前)赤松政則の築く處、寛文十二年(凡そ二百五十年前)脇坂安治の居城となり世襲して明治維新に及んだのである、其西に脇坂氏の祖を祀る龍野神社がある、社殿の石階の北に聚遠亭がある、もと脇坂氏の別業で眺望頗るよく聚遠亭の名に反かない。

網干港——驛の南一里(龍野電車網干港下車)、揖保川と大津茂川の間にある港で、古は商船輻輳し、防波堤等をも築いたが揖保川から流下する土砂の爲めに填塞せられ、舟楫の便大いに減じたといふが上流龍野、山崎から物産を輸出するので今尚播州海港中繁昌地の一に數はられてある、網干の西、大字濱田に龍門寺がある、(五丁)、臨濟宗、天徳山と號ふ、寛文年間(凡そ二百五十年前)盤桂和尚の開基、本堂に本尊十一面觀音を安置し、境内に地藏堂、禪堂、不動堂、鐘樓等がある巨刹だ。

龍野驛

(姫路驛より哩十一分、到着時間約廿七分)

室津港

室津港——驛の西南二里にある、古は室の泊といひ、早くから遊女のあつた處、山陽の一名所として歌などにもよく詠まれてゐる、徳川時代は西國の諸侯參勤の往來の船は皆此津に繫泊するを例とし頗る繁榮を極めたが維新後大に衰微してゐる、

むろの浦せこの崎なる鳴島の、磯こそ波にぬれにけるかも。 萬葉集

友さそふ室の泊の朝風に、こゑをほにあげていつる舟人。 茂重

あさしもや室の楊屋の納豆汁。 蕪村

加茂神社

岬を港岬といひ、縣社加茂神社がある、祭神は加茂別雷命である。一室の海、波ものごけき春の夜の月の御舟に棹さして、霞む空は面白やな。梅が香の、磯山遠く匂ふ夜は、出船も心ひく、花ぞ綱手なりける。こある謠曲室君は、此明神の社で遊君達が棹の歌を誦ひ神楽を奏して、明神影向せらるゝ事を作つたものだ、境内から望むと近く港内に地の唐荷、中の唐荷、沖の唐荷の三島が一行に浮び、遠く家島の群島を隔て、小豆島、四國の山峰が目に入る、所謂海上百里の美景とでもいふ所だ。次の▼那波驛省略



寺 聖 堂

有年驛

(姫路驛より十七哩五分、到着時間約五十一分)

赤穂鐵道

赤穂町

城址

大石神社

大石良雄の屋敷址

赤穂神社

華岳寺

此驛から播州赤穂町へ赤穂鐵道が通じてある。

赤穂町——驛の南三里(前記赤穂鐵道終點下車)、赤穂郡の町、千種川の西岸に位し、森氏二萬石の舊城下で、赤穂鹽の産で知られてゐる、又四十七士の義舉によつて懐しみのある町だ、土假屋に城址がある、即ち御馴染の淺野長矩の居城で、後森長直封ぜられ明治維新に至つたのである、城内の大石神社のある處は即ち大石良雄の屋敷址で、其他良雄の遺愛の櫻等元祿の故事を偲ぶ遺跡が今尚残つてゐる。又城の西に舊藩主森氏の祖を祀る赤穂神社がある。

華岳寺——大字土假屋にある、曾洞宗、和岸和尚の開基、淺野系累代の菩提所で、同家三代の墓や四十七士の遺物を多く蔵してゐる、觀覽料を拂ふと義士の木像や遺物が見られる、境内に四十七士の墓、大石櫻大野柳等と藤江忠廉の選した忠義塚の碑がある。

「赤穂の海濱は、東は新濱村より、西は鹽屋村に至り、凡そ一里餘、眼界一様にして、鹽田萬頃。鹽夫鹽婦、交互して業を作し、煙塵々々として、浦叙白を採し、眞に西播治海の美觀也。元祿初年、淺野氏

の老臣大石良雄、人民を奨励し大に此の業を興せしに、幾くも無くして赤穂鹽の美名、關左に藉々し、終に北海道に及ぶ。其の利賈られず。或は山を割りて水路を城市に通じ、永く生民を澤す。嗚呼大石氏其の功績没すべからず。若し夫れ、君家滅亡して、蒼皇の際、金庫を破して以て銀鈔を交換し、民衆の爲に其の後を善くせしにいたりては、曾に忠誠凛然なるのみならず、芳を百世に流すものにして、實に一代の完人たり。(横河安鼎)。次驛▼上郡▼三石驛省略。

吉永驛

(姫路驛より三十三哩九分、到着時間約一時四十二分)

閑谷疊
閑谷神社

芳嵐園

和氣清麻呂の碑

閑谷疊——驛の東南三十丁備前伊里村大字閑谷にある、疊は熊澤蕃山が藩主池田光政の命を奉じて子弟を養育した處、傍に池田家の祖先を祀る縣社閑谷神社がある。

芳嵐園——驛の西北三十丁(次驛和氣驛より東北約一里)、和氣郡藤野村、日笠川の西岸にある、櫻樹隨る多く、俗に「藤野櫻林」といつてゐる、大和吉野の景趣に京都嵐山の風致を加へた趣があるといふので芳嵐園の名が起きたのである、陽春の頃は頗る美しい。村内實成寺の境内に和氣清麻呂の碑がある、清麿は此郡の出であるといふことだ。次▼和氣驛▼萬富驛▼瀬戸驛省略。

西大寺 寺 驛

(姫路驛より五十哩五分、到着時間二時卅分)

此驛から西大寺鐵道が接續してゐる、同線は西大寺町を起點として西北に、廣谷、長利を経て財田(驛前)に至り、更に西南山陽道に沿つて岡山市後樂園の傍に通じてゐる。

西大寺

西大寺 驛の東南一里半(西大寺鐵道西大寺驛の東三丁)西大寺町にある、眞言宗、金陵山觀音院といふ天正勝興年間(凡そ千百六十年前)周防の人藤原泰明の女皆足姫の創建、本尊十一面觀音を安置してゐる、古は犀載寺といひ金岡莊中島に建立したのを寶龜八年(凡そ千百四十年前)僧安隆が今の地に移したのである、西大寺の名は後醍醐天皇が改められたといひ、足利尊氏が西上の時改めたともいふ、地は吉井川に臨み、堂塔伽藍頗る壯大を極む、又毎年二月十四日の修正會は「會陽」といひ神木を參詣人に投與するを例とする、參詣人は裸體となり吉井川で身を淨め、其神木を獲得せんとして互に締め合ひ、喧嘩、雜沓又雜踏を極める、俗に之れをハダカ祭と稱し、來集する者數萬を數ふるといふ。西大寺町は吉井川の右岸に位し兒島灣を距る約一里餘、南は九播港に近く、隣接金岡を併算せる岡山縣下屈指の商業地である。

岡山 山 驛

(姫路驛より五十五哩、到着時間約二時四十三分、急行二時間)

宇野線 中國鐵道

こゝから南、宇野港に至る宇野線(省線)が岐れてゐる、宇野からは連絡船に依つて四國高松に至り讚岐線と連絡する。又別に此驛から中國鐵道が接續してゐる、同線は北、津山町に至る津山線及び、溝井町に通ずる溝井線の二線がある。

岡山市

岡山市 池田氏卅二萬石の舊城下、中國屈指の大都會で縣廳の所在地だ、旭川市内を貫き水陸共に便利よく、紡績絲、花苳、小倉織、綿ネル、備前燒等の産がある、「わたしや備前の岡山育ち、米のなる木はまた知らぬ」等と俗諺に唄はれてゐる米の取引が盛んだ、又名物吉備團子が知られてゐる。

蓮昌寺

蓮昌寺 驛の東南五丁東田町にある、日蓮宗正平年中(凡そ五百七十年前)金川城主松田元賢の創建、往昔は城内榎の馬場にあつたのを後森下町に移し、更に現在の處へ移轉したのである、寺寶に日蓮上人の筆になる大曼羅を藏してゐる、市内屈指の巨刹で、毎年三月二十八日より四月八日に至る大曼羅の開張には近郷から參詣する者が夥しい。

岡山城址

岡山城址 驛の東十二丁(蓮昌寺の東北八丁)(電車の便がある)、岡山城は一に金鳥城ともいひ、永祿年間(凡そ三百六十年前)金光宗高の築く處、元龜元年(凡そ三百五十年前)宇喜多直家の爲めに亡はされ、直

家の居城となつて其子秀家に至り、安土城に模して天主閣を築き、旭川の水を城下に引き二天橋を架す等大工事を起したが關ヶ原の役に西軍に組して封土を失ひ、後池田忠繼の治所となり世襲して明治維新に及んだのである。

岡山神社

岡山神社——驛の東北十二丁石關町にある、縣社、貞觀年中(凡そ千六十年前)の創建、日本武尊を祀る、「酒折の宮」ともいひ、初め石山に在りしを宇喜多氏城を築く時、今の地に遷座したのであるといふ、社殿壯麗、市内の一名詞である。

以樂園

以樂園——驛の東北十二丁(電車の便がある)前記岡山神社から電車路に沿ふて右折、旭川に架す鶴見橋を渡るに至る、日本三公園の一として天下に名たる名園で、貞享四年(凡そ二百四十年前)藩主綱政が家臣津田永忠を奉行として築造せしめた處、初め御茶屋敷と稱し、後後樂園と改めたのである、明治十七年縣の有に歸し公園として開放されたものであるといふ、周圍一里に餘り、旭川の清流を隔て、岡山城と相照してゐる、地域幽邃閑雅、水を旭川の上流から引き、瀧あり、瀧あり、石あり、丘あり、花木あり、四季の眺め一として佳ならざるはなく、家屋の結構、亭樹の雅致、所謂人工の極致と天巧の妙を盡せる名園



春佳園

園

樂

後

國清寺

で岡山に來た人は是非見に行かねばならぬ所だ。
國清寺——隣の東南十八丁小橋町にある、市内西大寺町迄電車の便がある(蓮昌寺の東南八丁)慶長九年(凡そ三百年前)池田輝政の創建、大華和尚の開基、池田家累代の菩提所で、同家の墓地がある、寺寶に悪七兵衛景清の守り本尊といふ一寸八分の觀世音及び後醍醐帝の宸翰、後水尾帝宸筆の和歌、池田光政筆の法華經等を藏してゐる。

東山公園

招魂社

三動神社

宗忠神社

東山公園——國清寺の東五丁、一に借樂園ともいひ、市の東端にある、老樹繁茂、花木點綴して四季の散策によく、園内に戊辰以來國事に斃れたる將士の忠魂を合祀する招魂社がある、其東方操山に、和氣清磨(こじまのり)兒島高德、楠正成の三公を祀る三動神社がある、望むと市は脚下に南方旭川の盡くる所、兒島灣の真帆片帆の去來する状、頗る美しい眺景を備へてゐる。
宗忠神社——驛の西南卅餘丁、岡山市の西、御津郡今村にある、黒住教の開祖黒住左京宗忠を祀る、宗忠此地に生れ、道を説くこと卅餘年、嘉永三年二月(凡そ七十年前)歿す、後安政三年(凡そ六十五年前)勅して宗忠大明神の號を賜り、慶應二年(凡そ五十五年前)從四位下の神階を授けられ、同十二年郷里なる今の

岡山土産

地に社殿を創立したのである、毎年三月廿四五の兩日、七月卅一日、十二月廿二日の大祭日には夥しい参詣者がある。
岡山附近の著名なる名所舊蹟は項を改めて説くことにする。
岡山土産——吉備團子、びん付、輕燒、備前燒等。

名所都々逸

- ▼今日は昨日の河瀬と變り、あてにならない飛鳥川。
- ▼須磨の浦波また立ちかへり、きては迷はず濱千鳥。
- ▼女波男波の魔がさすとも、堅く結んだ夫婦岩。
- ▼蟹の小舟の櫓權を押し、すまや明石の作すまひ。
- ▼涼み過ごして思はぬ口説、浮名流した四條川。

山陰本線

京都—園部間

山陰本線は京都を起點とし、保津川の溪谷に沿ふて、龜岡、園部を過ぎ、綾部に至つて北に舞鶴線を岐ち本線は西して福知山線に遇ひ、和山に至つて播但線に會し、豊岡、城崎を過ぎて日本海の沿岸に出で、鳥取に至つて左に因美輕鐵線、大山驛からは伯備北線、米子にては北に境線を岐けて更に西し、出雲今市に至つて茲に大社線を分岐し、本線は濱田に通じて留まるのである。哩數二九五哩一分、京都大社間約十二時間を要す、即ち京都から天の橋立見物や大社詣ふでは此線に依ればよいのだ。案内は本書の主旨上（凡例参照）京都、園部間とし、園部以北の著名なる地は項を収めて記述することとした。

▼京都 驛 (起點)

京都市の名所案内及交通等は京都見物の項に詳しく説いて置いたから其部参照。又次の▼丹波口▼二條の二驛は即ち京都の市驛であるから之れを省略する。

▼花園 驛 (京都驛より四哩二分、到着時間約二十三分)

妙心寺

妙心寺—驛の北三丁花園にある、臨濟宗妙心寺派の大本山、花園上皇の離宮を上皇の思召に依つて伽藍をなしたる處、無相大師の開基、本殿に釋迦如來、左右に迦葉、阿難の三尊を安置してゐる、佛殿の前にある四株の松は「四派の松」といつて由緒あるものたそ、勅使門、山門、法堂、寢堂、方丈、庫裡、古鐘樓、經藏、玉鳳院、開山堂等の多くは特別保護建造物で、玉鳳院は花園上皇御隱栖の舊蹟であるといふ、佛殿の東南にある經藏は大阪の富豪淀屋辰五郎が造營したるもので、傍にある老松は「雪江の松」といつて當寺六世雪江和尚の手植といふ、創建當時の堂宇は應仁の兵火に罹り、今の建物は文明年間（凡そ四百四十年前）雪江和尚の再建で、境域に武田信玄、勝頼、信勝、信豐の墓や瀧川一益が建てたといふ織田信長父子の塔、佐久間象山の墓等がある。寺の西にある丘が雙岡で、南北に三丘が相連つてゐるので名がある。吉田兼好が遁棲した舊蹟で、有名な徒然草は即ちこゝで著はしたものだといふ。妙心寺の西に法金剛院がある、文徳天皇の勅願により天安年間（凡そ千六十年前）大伽藍を造營し、天安寺といつた處、後荒廢したのを、大治五年（凡そ八百年前）侍賢門院が再興して今の名に改めたのであるといふ、本尊は丈六の阿彌陀佛で春日作といひ、十一面觀音と共に精妙を極めたものである。

雙岡 法金剛院

等持院

等持院——妙心寺の東北九丁字等持院にある。萬手山と號ひ、臨濟宗、興國年間(凡そ五百八十年前)足利尊氏が夢窓國師を請じて仁和寺の一院の中興せし所、佛殿に本尊利運地藏尊と左右に達摩、夢窓を安置し、影堂に足利尊氏、義詮以下歴代の木像と、徳川家康の座像を安じてゐる、總門、中門等と足利尊氏の墓がある、高山彦九郎が尊氏の墓に鞭つて其罪を數へ、浪士の一團が尊氏、義詮、義滿の三木像の首を切つて三條の磧に梟らすべく襲ふたのも此寺だ。寺後の衣笠山は、又の名を絹掛山ともいひ、宇多法皇が夏に雪景の觀を作らん爲めに素練を全山に掲げさせ給ふによるといふ。

衣笠山

龍安寺

龍安寺——妙心寺の北九丁字谷口にある(等持院の西北殿丁)、大雲山と號ふ、細川勝元の別莊を勝元の遺命によつて寺院とした處、開基は義天和尙である、本尊釋迦牟尼佛を安置してゐる、庭園は流石に大名の居館の跡と頷かせる立派なものだ、又鏡谷油の風致がよい。寺の後を登ると附近に、後朱雀、後冷泉、後三條、陽明門院、一條、堀川以上五帝と一皇后の陵及び圓圓天皇御火所がある。

仁和寺

仁和寺——妙心寺の西北五丁(龍安寺の西南五丁)御室にある、仁和二年(凡そ千卅餘年前)光孝天皇の勅願で伽藍造営の工を起し、天皇は工半で崩御あらせられたので、宇多天皇がその御遺志を繼がせられ、同四



年に落成した眞言宗の名刹、大内山仁和寺の勅號を賜ひ、後天皇天位を遷れ給ひ當寺に入つて落飾あらせられたので御室の稱が起つたのだ、金堂に本尊三尊の彌陀、勢至、觀音を安んじ、御戸帳の裡に光孝天皇の御像を奉安してゐる、昔は五十に近い殿舎があつたさうだが、應仁の兵火に罹り、今は其當時の壯觀を見ることは出来ないが、寺域尙九萬九千坪に餘り、金堂、五重塔、御影堂等特別保護建造物で、其外山門、宸殿、方丈、唐門、法務所、中門、經坊、觀音堂、鎮守祠等の建築物がある、又境内に櫻樹頗る多く「御室の櫻」といつて昔から有名だ、寺の西に光孝天皇の陵、又寺の北の山中には宇多天皇の陵がある、謠曲「經政」は西海で討死した平經政（敦盛の兄で琵琶の名手）の追善供養の爲め管絃講を催されしに、經政の靈現はれ出づることを作つたものだ。

「詞」是は仁和寺御室に仕へ申す、僧都行慶にて候。さても平家一門但馬守經政は、いまた童形の時より君寵愛な、めならず候、然るに今度西海の合戦に討たれ給ひて候。又青山と申す御琵琶は、經政存生の時より預け下されて候、彼の御琵琶を佛前にする置き、管絃講にて弔ひ申せこの御事にて候ほごに、役者をあつめ候。諸「實」にや一樹の陰に宿り、一河の流れを汲む事も、皆これ他生の縁ぞかし。ましてや

多年の御値遇、惠みを深くかけまくも、忝なくも宮中にて、法事をなして夜もすがら、平經政成等正覺と、弔ひ給ふ有難さよ。地謠「ここに又、かの青山と云ふ琵琶を、かの青山いさふ琵琶を、亡者の爲めに手向けつ、同じく糸竹の、聲も佛事をなし添へて、日々夜々の法の門、貴賤の道も普しや。貴賤の道も普しや。（謠曲經政）」

平岡八幡宮
楓の三尾

平岡八幡宮——仁和寺の西北廿三丁宇平岡にある（嵯峨驛より北二里）、一に梅畑八幡宮といひ、祭神は宇佐禰と同じで、當地の産土神になつてゐる。

高尾
梅尾

楓の三尾——平岡八幡宮の西北廿丁、「楓の三尾」といつて天下に知られた高尾、梅尾、梅尾は驛の西北方愛宕山の麓、清瀧川の溪流に臨んだ山間にある、嵯峨からする人は長刀坂を越えて河記平岡八幡宮の前で、京都から來る道と合すればよい、三尾から歸路嵯峨に出る人はその逆、即ち平岡八幡宮から右に長刀坂にかゝればよいのだ。

高雄神護寺

高雄神護寺——延暦年間（凡そ千百卅年前）和氣清麿が河内國に建立した神願寺といふを此處に遷し、勅して、弘法大師に住持せしめたといふ眞言宗別格本山の巨刹である、後荒廢してゐたのを壽永元年（凡そ七

横尾西明寺

百四十年前、僧文覺が再興せし處、堂宇の多くは元和年間（凡そ三百年前）再建である、清瀧川に架した橋を渡つて石徑を辿ると右傍に額書石がある、弘法大師が川を隔て、此處から筆を飛ばして額の文字を書いたときに硯として用ひたものといふ頗る面白いものだ、仁王門を過ぎると本堂、講堂、大師堂、明王堂、鐘樓等がある、本堂に本尊薬師如来、講堂に五大尊、五大虚空蔵、大師堂に弘法大師、明王堂に不動明王の像を安置してゐる、鐘樓の鐘は三井寺、平等院の鐘と共に三絶といはれた有名なもので、地蔵院はその西北、溪に臨んだ所にある、前面山に望み清瀧川その裾を流れ風景絶佳である高雄の觀楓は此處が第一といはれてゐる、土器投げも中々面白いものだ、頼山陽の詩に「下に溪流一道の斜なる有り。最も是れ斜陽林際を射るところ。紅雲堆裏金蛇を撃く。」と云うまくいつてゐる。神護寺からもこの橋に引かへして路を左に清瀧川に沿ふて二丁程行つた對岸に横尾西明寺がある、眞言宗準別格本山、天長九年（凡そ千百年前）弘法大師の徒弟智泉法師の開基、今の堂は元祿十二年（凡そ二百二十年前）徳川桂昌院の再建といふ、本堂に本尊釋迦佛と千手觀音を安置してゐる、本堂の後の山上に入幡宮がある、此寺の邊りは楓は少いが至つて静寂ない、所だ、橋から道を迂回して進むと數丁で白雲橋に出る、楓樹千草、川の兩岸を挟む。板橋

樽尾高山寺

有り。白雲と曰ふ。長さ三丈許りにして絶間に架す。橋下奇石多く、狀奔牛驢馬の如し。水勢奔注して石に遇められ激して雪花と爲り、疊んで織文と爲る。潭水停蓄し、靑靑なること染むが如し。下手な形容詞を並べて味増附けるより菊池三溪の文を其ま、拜借する、實際橋から樽尾高山寺に至る間は楓樹枝を交へ深紅、淡紅、碧流に相映じて頗るよい、寺は初め天臺宗を奉じ後、文覺上人の法弟明惠上人が再興して今の華嚴宗に改宗したのである、本堂に釋迦佛を安置してゐる、本堂の東北に禪堂院がある吉水院ともいふ書院から溪を隔て、前山の楓を俯瞰した赴きは他に比すものがない。

廣隆寺

廣隆寺——驛の西南九丁太秦村にある嵐山電車太子堂前參照。

嵯峨 驛

嵯峨及嵐山附近の名所舊蹟は便宜上嵐山電車の部に詳しく説いて置いたから同線嵐山停留所の項參照。

龜岡 驛

龜岡町——丹波國南桑田郡の中央にある物質の集散地、保津川の南岸に位する、松平氏五萬石の舊城下で昔は龜山といつた處だが伊勢の龜山と紛らはしいので今の名に改めたのである、城址は驛の南方にある、天正

龜岡町

嵯峨、嵐山

七年(凡そ二百四十年前)明智光秀の築城で同十年五月兵を此處に集め中國勢を援けんと爲つて本能寺を襲撃したことは人の知る處、後城主轉々して寛延元年(凡そ百七十年前)松平信峯の居城となり世襲して明治維新に及んだのである。

保津川

保津川——大堰川の上流で、奇岩怪石流域に起伏し、急流激湍、奇景百出、驛の東北三丁保津瀧から船を雇つて(乗合も出来る)嵐山の渡月橋の畔まで下るのを保津川下りといつて行樂の一つになつてゐる、舟夫は竿を携へて船先に立ち巧に岩石を避けて舟を下す、流程四里、一時間餘で着く、躑躅の燃ゆる夏、連山紅葉の秋、山峽相迫り、奇巖怪石起伏するところ奔流激して下る有様は實に天下の奇勝である、先づ保津瀧に繩を解き、流れに従ふて下ると、河流は次第に小波を立て、水勢急に急激となる、輕舟泛々として飛ぶが如く、地藏ヶ淵、宮の下、はかりヶ淵を過ぎると、くゞりヶ淵、ちあみの瀧、烏帽子岩、東岩、鏡岩、八疊岩等、あれだ、これだといつてゐる間に過ぎて仕舞ふ、金かけの瀧に差しかゝると舟は木葉の舞ふが如く颯々爽快だ、屋根石、三ツ石、たぬき廻り、狸の松、小結ヶ瀧、豆腐石等を経て、大坪に出る此處は峽中最も幽邃な處、葉たばこ、獅子ヶ口、大つな打、曲り淵、孫六大石、屏風岩、蓮華岩(大略)等

穴太寺

無數の礁石が峭立し、奔流岩に砕けて飛沫煙る狀頗る心持のよい行樂だ。
穴太寺——驛の西一里穴太にある、天壽宗、菩提山と號ふ、慶應二年(凡そ千二百廿年前)左大將大伴古麿の創建、もも本尊は藥師佛であつたさうで、今は應和二年(凡そ九百六十年前)宇治宮成が安置した佛師感世作といふ聖觀音を安置してゐる、西國廿一番の靈場である、

かゝる世にうまれあふ身のあなうやと、思はでたのため十と一。 詠歌

如意輪堂、多寶塔、千佛堂等がある、寺傳によると此郷に宇治宮成といつて性來邪見無慚なる者があつた其妻は夫と反對に慈悲が篤く觀音に深く歸依してゐた、都から佛師觀世が此地に来て宮成の宅に滞在して觀音の尊像を刻んだ、妻は其間齋戒沐浴して普門品を誦じ、像成るに及んで夫に勧め感世に馬を贈つたが後宮成愛惜の念を起し感世の歸路をまぢぶせ、之れを射殺して馬を奪ひ返して家に歸り、佛像を見るに其御肌に己が射た矢が立つてゐたので大いに驚き、引返すと感世は無事であつたに二度びつくり、宮成罪を懺悔して菩提心を起し、尊像を此寺に安置すといふ至極有難い緣起だ。尙同所に圓山應舉が寄寓してゐた臨濟宗の古刹金剛寺がある。

金剛寺

出雲神社

出雲神社——驛の北約一里半千歳村にある、國幣中社、丹波の國の一の宮で、和銅二年（凡そ千二百年前）出雲大社の神靈を勧請した處、本殿は足利尊氏の造營で特別保護建造物である。

能勢妙見

能勢妙見——驛の西南四里半、妙見山の頂にある、詳しくは能勢電車一の鳥居参照。次の▼八木驛省略。

▼園部

園部町——驛の西北近くにある、小出氏二萬六千石の城邑で、園部川に沿ひ、山陰道の要衝を占む、船井郡第一の町である。

園部天満宮

園部天満宮——驛の西十五丁園部にある、府社、菅原道真公を祀る、延喜元年（凡そ千廿年前）菅公筑紫へ左遷の後、菅原傳授手習鑑でお馴染の公の龍臣武部源藏が仰慕のあまり木像を刻んで小祠へ安じたのが創始で、天曆九年（凡そ九百七十年前）社殿を造營、社務所の地は即ち武部源藏の屋敷があつた處「もつべき物は子なるとは、あの子が爲めによい手向け、思へば最前別れた時、何日にもない跡追ふたのを呵つたさきの其悲しさ、冥途の旅へ寺入と早や虫が知らせたか、と寺子屋の悲劇が思ひ出される。境内楓櫻多く、幽邃閑雅の境である。

流 璃 溪



摩氣神社

摩氣神社——驛の西南約一里半、摩氣村字竹井にある、府社、延喜式古社で、天兒屋根命の御子大御饒津彦命を祀る、神護景雲三年（凡そ千五十年前）の創建、今の社殿は明和四年（凡そ百五十五年前）城主小出英持の再建であるといふ。

流璃溪

流璃溪——驛の西南二里半西本梅村字南八田より山道を更に約卅丁（龜岡驛より南八田迄約四里）、大河内村の溪流をいふ、近年命名して世に紹介された處、流域頗る幽邃を極め、十餘丁の流底は一枚の滑石にて他にその類を見ない、自然の奇岩怪石各所に散在して奔流を怒らし緑樹繁茂、楓樹點綴して趣を添へ、身は仙境にあるの思ひがする、鳴瀧（溪口）、千秋潭（半丁）、座禪石（右手半丁）、湯軒瀧（六丁）、双龍瀧（七丁）、玉走瀧（八丁）、瀧凍泉（九丁）、水晶簾（右手九丁）、仙巖（十丁）以上例に依つて六つかしい名前の附いた勝區がある（記入の丁数は溪口鳴瀧よりの丁数である）。

梅は咲いたか櫻はまたかいな、柳なよく風次第、

山吹や浮氣で色はつかり、しよんがへな。（端唄）

福知山線

神崎——相野間

附有馬輕便線

三田——有馬間

福知山線は即ち東海道線の一支線で、東海道本線の神崎驛から岐れて北、三田驛に至り有馬輕便線を岐け更に北し、福知山に行つて山陰本線に接続する六七哩と、同線の塚口驛から南、尼ヶ崎に至る二哩をいふのである、大阪及神戸方面から天の橋立見物や大社詣ふをする人の便利を圖つて、大阪驛から此線を通じて新舞鶴及び大社への直送列車が運輸されてゐる。

案内は本書の主旨に基き（凡例参照）、神崎より北、相野驛で留めることとした。

▼神崎驛

（大阪驛より四哩六分、到着時間約十四分）

東海道本線の接続點、又ここから南、尼ヶ崎へ自動車及列車が運轉してゐる、尼ヶ崎は阪神電車尼ヶ崎の項に詳しく説いたから之れを省略する。

▼塚口驛

（大阪驛より六哩一分、到着時間約廿分）

近松門左衛門の墓

近松門左衛門の墓——驛の東南九丁、久々知の「廣濟寺」の境内にある、浄瑠璃本の作者で、大阪趣味の種を植いた人である(大阪の見物三十八頁参照)、同人は當寺の中興日昌上人と非常に親密にしてゐたさうで、この墓が眞物たといふことだ。

▼伊丹 驛 (大阪驛より八哩一分、到着時間約二十七分)

伊丹町——川邊郡第一の町で、文祿慶長の頃(凡そ二百卅年前)より清酒の産地として知られてゐる、「池田伊丹の上諸白も錢がなければ見てさほる」等と唄はれてゐる所、驛の前の小丘は荒木村重の據りし城址で、天正六年(凡そ二百四十年前)織田氏に叛き、其翌年城は陥つた。

猪名野神社——驛の西北七丁、延喜四年(凡そ千廿年前)の創建、古は「豊崎宮」といつた社で、祭神は素盞鳴尊である、荒木村重の亂に頽廢せしを豊臣秀頼が再建し、現在のものは貞享二年(凡そ二百四十年前)近衛基熙の造營であるといふ。

墨染寺

墨染寺——城址の附近にある、伏見墨染寺の分派で、多田滿仲の創建といふ、本尊藥師佛を安置してゐる城内に荒木村重の塔や俳人平泉鬼貫の墓及び伊丹城殞落のさき織田勢の爲めに殺戮せられたる女子等を葬

尾陽寺

るといふ女郎塚といふがある、鬼貫は此地の造酒家の主人で與惣右衛門といひ、西山宗因や井原西鶴などと同行して大阪の俳壇に名を馳した人である。

鬼貫や新酒の中の賢に處す。 燕村

尾陽寺——驛の西廿九丁字寺本にある、眞言宗、天平五年(凡そ千百九十年前)行基の開基、本尊藥師如来を安置してゐる、昔は堂塔伽藍頗る立派なものであつたといふが天正年間(凡そ二百五十年前)の織田、荒木の兵火に罹り、一時は衰頽しきつてゐたのを後再興して現時に傳へたものである、附近の地はもと「有馬山猪名の笹原風吹けは」古歌に見えてゐる猪名野の原である。

あやしくもくれに返す袂かな、猪名野笹原さして行くことも。 法性寺關白

寺の北九丁に行基が拓いた尾陽ヶ池といふ周圍一里に餘る大池や更にその北に瑞ヶ池といふデカイ池がある。次の▼池田驛▼中山寺驛▼豊塚驛は便宜上阪神急行電車の部に詳しく説いたから之れを省略する。

▼生瀬 驛 (大阪驛より十六哩八分、到着時間約一時八分)

浄福寺

浄福寺——驛の東四丁にある、淨土宗、寛元元年(凡そ六百八十年前)善恵上人の開基、本尊は宇都宮頼綱

尾陽ヶ池
瑞ヶ池

有馬温泉

の念持佛といふ彌陀佛を安置してある、寺に法然上人が讃岐へ流されるとき贈つて来たといふ古鐘がある
有馬温泉——驛の西方、太多田橋を渡つて左、太多田川に沿ふて約二里半、船坂を経て有馬へ道が通じて
ある、峭巖急湍多く四十八瀬の稱がある、健脚者は此道によつて有馬に至り、更に大甲山越をして住吉、
或は摩耶山に出る、一日の行樂として恰好の旅程である。

▼武田尾驛

(大阪驛より二十哩八分、到着時間約一時廿四分)

武田尾温泉

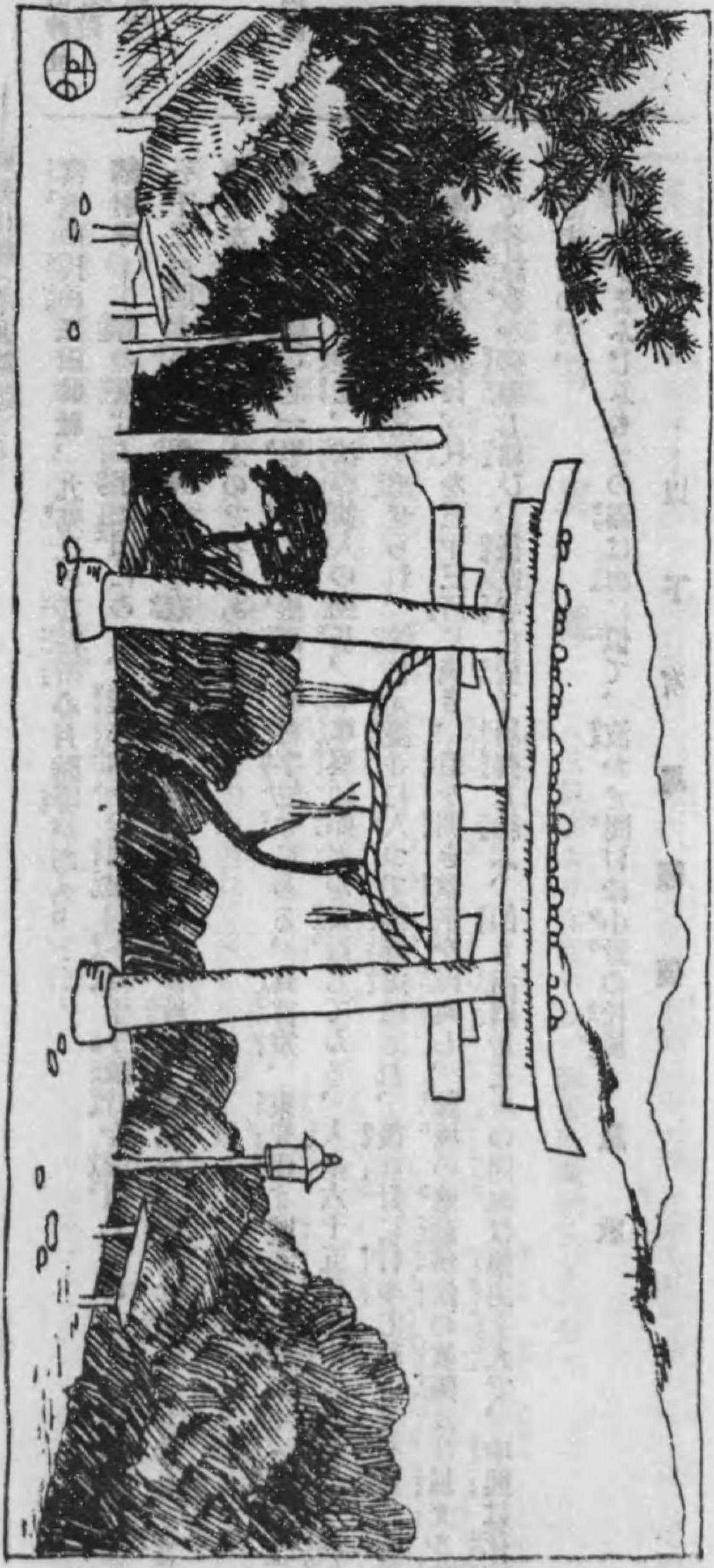
武田尾温泉——驛の西五丁、武庫川の右岸にある、寛永の頃(凡そ二百九十年前)樵人が發見したといふ
泉源は銀龍水といつて巖の隙間から湧出してゐるのださうな、兎角諸病に特效があるといはれてゐる、生
瀬から次驛道場に至る車窓の武庫川は奇巖怪石、急湍奔流で、京都の保津川、豊前の耶馬溪といった様な
趣があつて無聊を慰めるに足る。▼次の道場驛省略。

▼三田驛

(大阪驛より二十六哩六分、到着時間約一時五十三分)

三田町

此驛より有馬輕便線が岐れてゐる。
三田町——有馬郡の中央にある郡内第一の町で、播丹街道の要衝に當り、もゝ九鬼氏の舊城下である、町に



有馬見妙春佳畫

三田神社
心月院
鑄射寺

當地の氏神三田神社、九鬼氏の菩提所心月院等がある。
鑄射寺——驛の東廿丁字山田にある、聖徳太子の創建。本尊千手觀音を安置してある、敏達天皇十年(凡そ千三百四十年前)蝦夷邊境を寇せしとき、聖徳太子鳴箭を放つて之れを征服させ給ふことあり、寺にその矢を傳來せるといふので名がある。

花山院

花山院——驛の北一里廿餘丁有馬郡三輪村字尼寺にある、眞言宗、東光山と號ふ、白雉二年(凡そ千二百七十年前)の建立、法導仙人の開基、本尊藥師如來を安置してある、人皇六十五代花山天皇がその寵妃の薨去により世の無常を感じられ、遂に元慶寺に入つて落飾遊はされ、後熊野に行幸し給ふとき靈告を受け佛眼上人を隨ひ、杖を三十三所に曳き、道を開き堂宇を再興し、薩埵の悲願佛法の眞隨及び風光を收拾して各詠歌を御製し給ひ、後此寺に於て崩御し給ふ、即ち西國卅三所の開祖は徳道上人で、中興は花山天皇であるのだ。

ありまふじふもこの霧は海に似て、波かこ開けは小野の松風。 詠 歌

—以下有馬輕鐵—

有馬
輕鐵

此線は三田驛から南に岐れて、鹽田、新道場、有馬口の三驛を経て有馬湯山町に通じてゐるのである。

▼有馬驛 (三田驛より七哩六分、到着時間約三十八分)

湯山町

湯山町——驛の南五丁、「お醫者さんでも有馬の湯でも」と俗語に唄はれてゐる有名な有馬温泉の所在地だ草津や道後と共に古から知られてゐる温泉で、地は大甲山の北麓、神戸市を距ること五里廿餘丁、住吉驛より六甲山越して約三里餘、三面山に包まれ、土地高爽(海拔千五百五十尺)、空氣清淨、氣候溫和、最も避暑に適してゐる。特に提灯を持つて置かふ、温泉は大已貴命、少彦名命が發見されたと傳へ、舒明天皇及孝徳天皇の兩帝の行幸もあり一時は中々繁盛を極めたが、後荒廢し聖武天皇の御宇行基僧正が復興せしも承徳元年(凡そ八百廿年前)霖雨の爲め山崩れて温泉亦荒廢に歸すこと九十餘年、大和吉野の仁西上人之れ再興し、豊臣秀吉又修補して今日に及ぶといふ、土産物は有馬筆、竹細工、湯の花等。驛から町に至る途次にラヂーム新温泉がある、御大典紀念に建設されたもので、印度サラセン最近様式の建築である、温泉は看板通りにラヂームを含有してゐるといふことだ。

ラヂーム新
温泉

福知山線(有馬輕鐵)

温泉場

薬師寺

温泉神社

愛宕神社

灰形山

鼓ヶ瀧
有明樓

鳥地獄
虫地獄
稲荷社
炭酸水
瑞寶寺址

温泉場——湯山町の中央にある、御殿造りの建物がそれた、泉質は鹽類炭酸が主要分で、神経病、皮膚病、貧血病等、こ子の無い婦人が温まるに効果があるといふので、よく湯治に出掛けるが癒した病には効がないさうである。温泉から郵便局の左側を二丁程も登ると薬師寺がある、本尊は行基作といふ薬師如来で、寶物に行基や仁西の影像を藏してゐる。

温泉神社——薬師寺から道を愛宕山に上るとその山麓にある、延喜式内の古社で、祭神は大己貴命、俗に三所権現といつてゐる。神社から一曲り進んで五丁程も登ると山頂に愛宕神社や天狗岩がある、山頂から有馬富士を望んだ景色が頗るよい。山を下つて市街に出で、道を左折して約六丁、右に灰形山の奇景を眺めて、鼓ヶ瀧、有明樓の名勝に至る。瀧は雄雌の二瀑に分れ、水聲洞谷に響いて恰も鼓の音に似てゐるといふので名がある、奇巖峭立、老樹枝を交へ頗る幽邃なよい所だ。下つて道を六甲山麓に沿ひ、鬱蒼たる木の間に縫ふて行くに五丁程に鳥地獄、虫地獄の勝がある。道から右に月の巧地山に登ると稲荷社がある眺景に富んだ所で、遠く播丹の諸山を望んだ風景がよい。下つて炭酸水に湯を癒やし、炭酸温泉の前を通つて右に折れ、約四丁有馬川に架す杖藜橋を渡つて、右に川に沿ふて上ると五丁程にして瑞寶寺址に



道三登寺水清

錦繡谷
日暮の庭

丸山公園

城山妙見宮
落葉山

善福寺

六甲越

出る、巨利瑞寶寺の址で、境内楓樹頭多く、錦繡谷日暮の庭の稱がある幽邃の境で、秋は極めて美しい所だ。もとの杖藜橋に返り、生瀬道に出で、約三丁、左折すると丸山公園に至る。城山妙見宮——温泉場の西に架す橋を渡つて左に、坂路四丁程も登ると至る、山は落葉山ともいひ、天文年間(凡そ三百年前)三好宗二が城を築いた處で、城山の稱もある、市街を眼下に瞰下し殊に日没の眺景が知られてゐる。又山麓に禪宗曹洞派の名刹善福寺がある、光徳山と號ひ、行基の開基、本尊は正應二年(凡そ五百九十年前)攝津多田院から移した天竺傳來といふ阿彌陀一光三尊を安置し、寺寶に林羅山筆有馬温泉の繪巻物を蔵してゐる。

六甲越——有馬から六甲越で住吉に至る道がある、路は可なり峻しいが住吉から登る反對に、大阪灣の風光が前方に展けるので、ここから登る人が多い、行程約三里餘、東海道線住吉参照。
温泉寺 呼喚鐘殘、出浴豊肌汁未乾、銀管吹煙香馥郁、青山影裡倚欄干、春濤

相野驛

(大阪驛より三十三哩、到着時間約二時十五分)

清水寺

清水寺——驛の西北二里餘、加東郡鴨川村御嶽山の頂にある、天臺宗、法道仙人の開基、推古天皇の勅願によつて根本堂を建立、仙人作一刀三體の十一面觀音を安置したのが當寺の創始で、神龜二年(凡そ千二百年前)聖武天皇行基に勅して大講堂を造營、行基作の本尊千手觀音を安置し給ふといふ國內屈指の巨刹である、西國第廿五番の靈場だ、

あはれみや普き門のしなじなに、何をか波のこゝに清水。 詠歌

昔此山は水が乏しかつたので水神に祈請して遂に清水の湧出を見たので寺の名之れに起因するといふ、又田村鷹將軍が鈴鹿山鬼神退治のとき、太刀を當寺に納めて武運を祈つたといふ太刀や弘法大師筆の法華經菅公筆の觀音經等の寺寶がある、京都東山の清水寺は當寺に擬して名稱けられたともいふことだ、大講堂根本堂、大塔、方丈、仁王門等の大建物と稚兒岩、辨慶の力石、赤松氏範の切腹石など切腹石の傍に明月やさの山見てもみな低き。芭蕉

關西本線

湊町—龜山間

附草津線 拓植—草津間

關西本線とは、中京の稱がある名古屋を起點として、伊勢灣に沿ふて西し、龜山驛から南に參宮線、拓植驛から北に草津線を岐げ、伊賀上野驛に行つて伊賀鐵道に連絡し、本線は木津川に沿ふて木津驛に到り、奈良線及片町線に會つて南に走り、奈良驛に着いて櫻井方面に至る櫻井線を岐げ、王寺驛からは南に和歌山線を分岐し、大阪の市驛大王寺に至つて更に城東線を岐ち、本線は湊町驛に行つて止まる一〇八哩八分をいふのである、名古屋湊町間約六時間を要す、即ち伊勢參宮は此線に依り、龜山驛に至つて參宮線に乗次けはよいため、列車は參宮者の便宜を圖つて、名古屋、湊町、京都(草津線を通じて)の三驛から直通列車が運轉されてゐる、案内は本書の主旨上(凡例参照)湊町驛から龜山驛を以て止めることとした、又伊勢參宮及其他著名なる地は項を改めて説くことにする。

▼湊町驛 (起點)

大阪市の名所舊蹟及び交通等は大阪の見物の項に詳しく説いて置いたから其部参照。次の▼今宮驛省略。

▼天王寺驛 (湊町驛より二哩三分到着時間約十分)

城東線の分岐點。大阪から關西線に乗車する人は湊町からせず此驛からする方が賃金は安い、然しながら乗客が込み合ふから、ゆつたりとした遊山気分を味はふことは不可能だ。次の▼百濟驛省略。

▼平野驛 (湊町驛より四哩七分、到着時間約廿分)

平野郷町—古名は統全莊といつた處、嵯峨天皇のとき、坂上廣野麻呂に此地を賜り、廣野殿といつたのが轉訛して今の地名になつたのであるといふ、奈良街道の驛次で、往來頻繁を極め一商區を成してゐる近年南海電車がこゝまで延長され町の西南端に其停留所を置いてゐる。

抗全神社

統全神社—驛の東南四丁字泥堂にある、郷社、素盞鳴尊を祀る、貞觀四年(凡そ千六十年前)の創建、町の氏神で、昔は熊野三所權現といはれた社である。社の附近を流る、平野川は一名龍華川、百濟川といふ百濟川河瀬をはやみゆく駒の、あしの浦まにぬれにけるかも。(六帖)

大念佛寺

大念佛寺—驛の南三丁平野郷町にある、融通念佛宗の總本山、天治二年(凡そ八百年前)良忍上人の開

大阪無線電信局

基、中興は法明上人である、本尊に良忍上人感得の十一尊曼陀羅、俗に天得如来といふを安置してゐる、昔は堂塔輪奐の美を極めしといふが惜むべし明治三十一年に火を失し、悉く灰燼と化した、兎に角「平野の大念佛」といつて有名な巨刹である。

大阪無線電信局——平野郷町の西南端(南海電車平野停留所近く)にある、地上二百五十尺の受信鐵柱を中央に同じ高さの四本が五丁の間隔で點在してゐる、各塔は地下二十數尺の混凝土基礎を施した三十六本のスチールで支持され、更に數十本の小柱で聯接してゐる。歐州方面唯一の通信機關として大阪の新しき誇りである。次の▲加美驛▲久寶寺驛省略。

▼八尾驛 (湊町驛より七哩四分、到着時間約廿八分)

八尾町

八尾町——驛の北九丁、中河内郡の町で昔は箭負といつた所たさうな、町の東部宇木戸附近の地は即ち八尾城址で、延元二年(凡そ五百八十年前)高木遠盛、小山忠能等が之を攻めたことが史上に見えてゐる。

顯證寺

顯證寺——八尾町の西五丁久寶寺にある(久寶寺の北四丁餘)、眞宗、文明十一年(凡そ四百四十年前)兼壽上人の創建、本尊阿彌陀佛を安置してゐる、昔は木願寺の連枝の住房で、郡内第一の巨刹である。

大信寺

大信寺——八尾町にある、眞宗大谷派、一に「八尾御堂」の稱がある、慶長十二年(凡そ二百十年前)東本願寺の祖教如上人の開基、兩來連枝を以て任職となしたる處、本尊は聖德太子作の阿彌陀佛で、別に開運の御影といふ親鸞上人の畫像を掲げてゐる、又鼓樓は伏見桃山の城樓を模して造つたものといふことだ。

常光寺

常光寺——大信寺の東北、近く西郷にある、禪宗、天平の頃(凡そ千八百八十年前)行基の開基、本尊は小野篁作といふ地藏菩薩である、昔白河法皇が熊野へ行幸の途次鳳蓋を註められ舍利を寄進せられ給ふといふ舊蹟で、域内に元和の役で戦死した藤堂和泉守の軍兵七十士の墓がある。附近の地はその頃の古戦場であつたことは人のよく知る處、「我が一命を待たずして起つ者は斬つて棄てるぞ……」と麾下三百騎を長瀬川の堤に折敷かして敵兵を思ふ様近寄せ、大喝一聲、「懸れ！」と一命の許に藤堂高虎の先陣を骨破微塵に潰亂さし、騎馬以上の士として知られたる者七十、其他軍兵二百以上を討取つた長曾我部盛親の奮戦振が思はれる。常光寺の東南三四丁庄の内に延喜式の古社長柄神社及びその南七丁別宮に稱徳天皇由義宮址といふ別宮八幡宮がある。

長柄神社

別宮八幡宮

將軍寺

將軍寺——驛の西南十丁宇太子堂にある、眞言宗、聖德太子植髮の像を安じてゐる、用明二年(凡そ千三

物部守屋の墓

百廿年前(太子が物部守屋を澁川稻城(太子堂の北一里長瀬村衣摺の地?)に攻めさせ給ふ時、椽樹の蔭に隠れて危急を免れ給ふにより、戦後此處に伽藍を造營せられたのが當寺で、故に椽樹寺の號がある、昔は堂塔伽藍壯麗を極めたといふが度々の兵火に罹り今は衰微して二三の古堂が存じてゐるに過ぎない、寺の東に物部守屋の墓といふがある。次の一志紀驛省略。

▼柏原驛 (津町驛より十哩一分、到着時間約三十六分)

此驛から大阪鐵道が接續してゐる。詳しくは同線の部参照。

恩智神社
安養寺
信貴山毘沙門天

恩智神社——驛の東北廿六丁(八尾町の東一里)恩智の山腹にある、延喜式名神大社に列した古社で、食の事を司さる大御食津彦命、大御食津姫命を祀る。境内樹木鬱蒼頗る神寂な所だ、途次左折すると安養寺がある、又神社に登る反對側の路を登ると山越で南畑を経て信貴山毘沙門天に路が通じてゐる(行程一里餘)又恩智の地は南北朝の頃、楠、和田氏等が協力して王事に盡した恩智右近將監のゐた所であるといふ
元善光寺——恩智の北八丁垣内にある、因縁を聞けば有り難や、昔本田善光が大阪の阿彌陀池から佛像を拾ひ上げ、郷里信濃へ持歸る途次、この地に一夜を宿した、その夜の中に一體の阿彌陀佛が二體になつて

岩戸神社
高座神社
梅巖寺
教興寺

ゐたので奇意に思ひ、この地に一字を建て、その一體を安じたのが此寺の創まりであるといふ、又境内に奇特の楠、さてデカイ老樹がある、これも善光が挿て置いた楠の杖から枝葉が生じて斯の通り、南無阿彌陀佛、く。寺の東南三丁の山腹に岩戸神社がある、昔は岩谷の辨天といつた社で、市杵姫を祀る、隣地に天照大神、春日戸神を祀る延喜式高座神社がある、その左方の峰に登ると禪宗黃檗派に屬してゐる梅巖寺がある、堂前から河内平野を望んだ風景が頗るよい。

教興寺——垣内の北二丁字教興寺にある、眞言律宗別格本山、假堂の三昧院に聖德太子作の彌勒菩薩と今

法藏寺

の岩戸神社に安じてゐたといふ辨財天を安置してゐる、即ち古の高安寺であるといふことだ。

神光寺

千塚

法藏寺——教興寺の北三丁郡川の山麓にある、禪宗曹洞派、大覺山と號ひ、本尊は弘法大師作といふ聖觀音を安置してゐる、北隣に神光寺がある。

關西本線

十三峠

大石を用ひ頗る巧妙を盡してゐる、入るには是非マッチと蠟燭の用意が必要だ、塚に就て種々の説がある
穴居時代の遺跡とも亦高貴の方の墳墓とも傳へられてゐる、附近に千塚といふ村落の名が出来てゐる如く
以前は其數千以上もあつたといふのだ。十三峠方面は大軌電車瓢箪山參照。

▼王 寺 驛

(湊町驛より十六哩、到着時間約五十分)

此驛から高田、橋本を経て和歌山方面に至る和歌山線及び高田、畝傍、櫻井を経由して奈良に至る櫻井線が
岐れてゐる、沿線の名所舊蹟は各線の部参照。又信貴山上に至る信貴生駒電車が接続してゐる、同電車は
此驛を起點として信貴山下に至り(後記龍田本宮の東五丁)、更にケーブルカーに乗替へて山上六山門の約三
丁手前)に通じてゐる、終點附近から望んだ風景が頗る雄大である、切符は湊町、奈良間の各驛から山上
迄の連絡切符を發賣してゐるから便利だ、同線は山下から延長して生駒山麓に至る計畫であるが竣成する
のは早くて大正十三年迄のことである。

信貴山毘沙門天

信貴山毘沙門天——驛の西北一里餘、大和河内の國境に跨る信貴山上の懸崖にある、朝護國孫子寺といふ
本尊の毘沙門天は生駒の聖天と共に福徳の大安賣で名聲を博してゐる、俗傳によると聖徳太子が此山で生



三 信 貴 山

身の毘沙門天を拜し、遂に佛敵物部守屋を滅ぼされたので凱旋後此處に伽藍を建立されたといふ、醍醐、村上、朱雀三帝の勅願所にもなつた當時は、東西二里、南北七里、寺領二千八百町歩、坊舎百餘も数れたといふ大伽藍であつたか永祿年間(凡そ二百六十年前)松永久秀の兵火に罹り舊記諸共焼失した、今の堂宇は慶長年間(凡そ三百卅年前)豊臣秀頼が再建したるものである、又楠正成は當毘沙門天の申し子で、幼名を多門丸といつたのは毘沙門天の別名多門天からこつたのである、寺域に山門、聖徳太子の銅像、かやの木稻荷、護摩堂、開山堂、大日如來堂、辨天堂、虚空堂等の諸堂と、王藏院、千手院、成福院の坊舎がある、本堂の前面は京都清水寺のやうな構造の舞臺で欄干から大和平野を望んだ風景がよい、虚空藏の横手から五六丁も登ると信貴山の最高峰空鉢護法に至る、四顧すると南に葛城、金剛の連山、東に奈良の舊都、西方遙かに大阪灣を望み得る絶景の勝地である、又山門の附近から八尾に下る道に沿ふて四五丁も行くと辨天の牛瀧といふがある、聖徳太子が守屋征討の際此瀧に沐浴して戦勝を祈られたといふ縁起をもつてゐる、其邊の山上は松永久秀が權籠つた信貴山城の舊址であるといふことだ。

米尾山寺

米尾山寺——空鉢護法から東北十二丁山麓にある、信貴山の奥の院で、毘沙門天堂と牛頭天王の祠がある

辨天の牛瀧

昔聖徳太子が守屋を攻められてこゝに來り給ひしとき糧食が缺乏した、その時焼米を製して急を補ひ殘餘をこの邊に埋められた、守屋討伐の後一寺を建立されたのが此寺で、今に至るまで寺後の地中からその焼米が出るといふことである。

龍田本宮

龍田本宮——驛の西十五丁三郷村立野(信貴電車山下の西五丁)にある、官幣大社、祭神は伊弉諾命の御子、天御柱命、國御柱命の二神で、風を主宰し、氣候を調へ、風雨を順ならしめ、壽命息災を護らせ給ふ大神である、社殿壯嚴、社域一萬二千餘坪、樹木多く神々しい感じを起させる。

我ゆきて七月は過し龍田彦、ゆめ此花を風に散らすな。 萬葉集

龍田川

龍田川——其源を生駒の山峰より發し、龍田町の西端を南に流れて大和川に注いでゐる川で、古來から紅葉の名所として著はれてゐる所だ、紅葉の水に散り浮きて、錦を張れる如くなれば、渡らは錦中や絶々なんさなり。と謠曲龍田にあるが如く、昔は滿堤の楓紅を帯び、龍田の清流に其妍姿を寫して川底に錦織を敷くの美觀を具へてゐたのであらうが、今は只僅に龍田橋(驛より東北廿四丁)の近傍五六丁程の間がよいのだ、豫想さへ逞くせなければ確に一盞を傾ける價值はある、橋の東五丁龍田町に龍田新宮がある

龍田新宮

初め龍田の神を法隆寺の鎮守神とせしが立野までは程遠しさて此處に其神靈を迎へ新宮を營んだのである
又龍田の地は慶長十九年(凡そ二百年前)徳川家康、片桐且元を攝津次木よりこゝに移し三萬石を興へて治
めさした處だ。

金勝寺

金勝寺 — 龍田橋から龍田川に沿ふて西北一里餘丁橋原にある、天平十八年(凡そ千八百八十年前)行基の
開基、本尊は機織の靈木を以て行基が彫刻したといふ有名な薬師如来を安置してある。

から衣うつ音しゆく聞ゆなり、曉さむき橋原の里。 淳仁天皇御製

鳴川千光寺

附近龍田川の景趣殊によく旅杖を曳く者が多い。金勝寺の西北卅丁に鳴川千光寺がある、詳しくは大軌電
車瓢箪山參照。

達磨寺

達磨寺 — 驛の南九丁王寺村にある、聖徳太子が路傍に倒れてゐた飢人に衣食を恵み給ひしが幾もなく
死せしに身體はなく只衣服のみ残りしに太子其墓を築き達磨塚と名付け給ひしが當寺の縁起である、今は
南禪寺に屬し、寺中に松水久秀の墓がある。

法隆寺

(湊町驛より十八哩二分、到着時間約一時間)

法隆寺

法隆寺 — 驛の北十三丁(龍田新宮の東北十丁)にある、法相宗の大本山、又の名を斑鳩寺とも號び、南都
七大寺の隨一である、用明天皇の勅によつて、聖徳太子が創建せられたことは人の知る處、推古元年(凡
そ千三百二十年前)から十五年に亘つて増築された大伽藍で、其多くは創建當初のものである、特別保護建
造物廿餘棟、國寶百餘點といふからして大したものだ、建物の主なるものは、南大門、中門、金堂、五重
塔、講堂、西園堂、東大門、禮堂、夢殿、舍利殿等で、料金を拂つて中門(仁王門)を入ると金堂、五重塔、
講堂、鐘樓、經樓がある、金堂に釋迦如来、脇土薬王薬上菩薩及薬師、日光、月光の三尊を安じ、模範美
術工藝品として有名な玉蟲厨子がある、又内部の壁に四佛淨土の圖が描かれてゐる、四佛淨土とは彌陀、
寶生、釋迦、藥師の四佛の淨土をいふのである、最も内陣の拜觀は更に料金を支拂はねばならぬが、壁畫
は近年保存の爲め白布を以て掩はれ、四月一日から五月中頃、十月廿二日から十一月廿日迄の間以外は拜
觀を許されぬ、夢殿は聖徳太子が入寂せられし處、八稜形の建築で、太子作救世觀音を安置してゐる、何
れも其當時の精美を極めたもので歴史家や美術家をして垂涎賞さしてゐることはいふまでもない。法隆
寺の東院に接して中宮寺がある、眞言宗、推古十五年に聖徳太子が御母君の爲めに創建せられし所で、今

中宮寺

の堂は天文年間（凡そ二百八十年前）の再建である、本尊如意輪觀音を安置してゐる、又寺寶の天壽國曼荼羅刺繡の掛幅は本邦最古の織物として著はれてゐる。

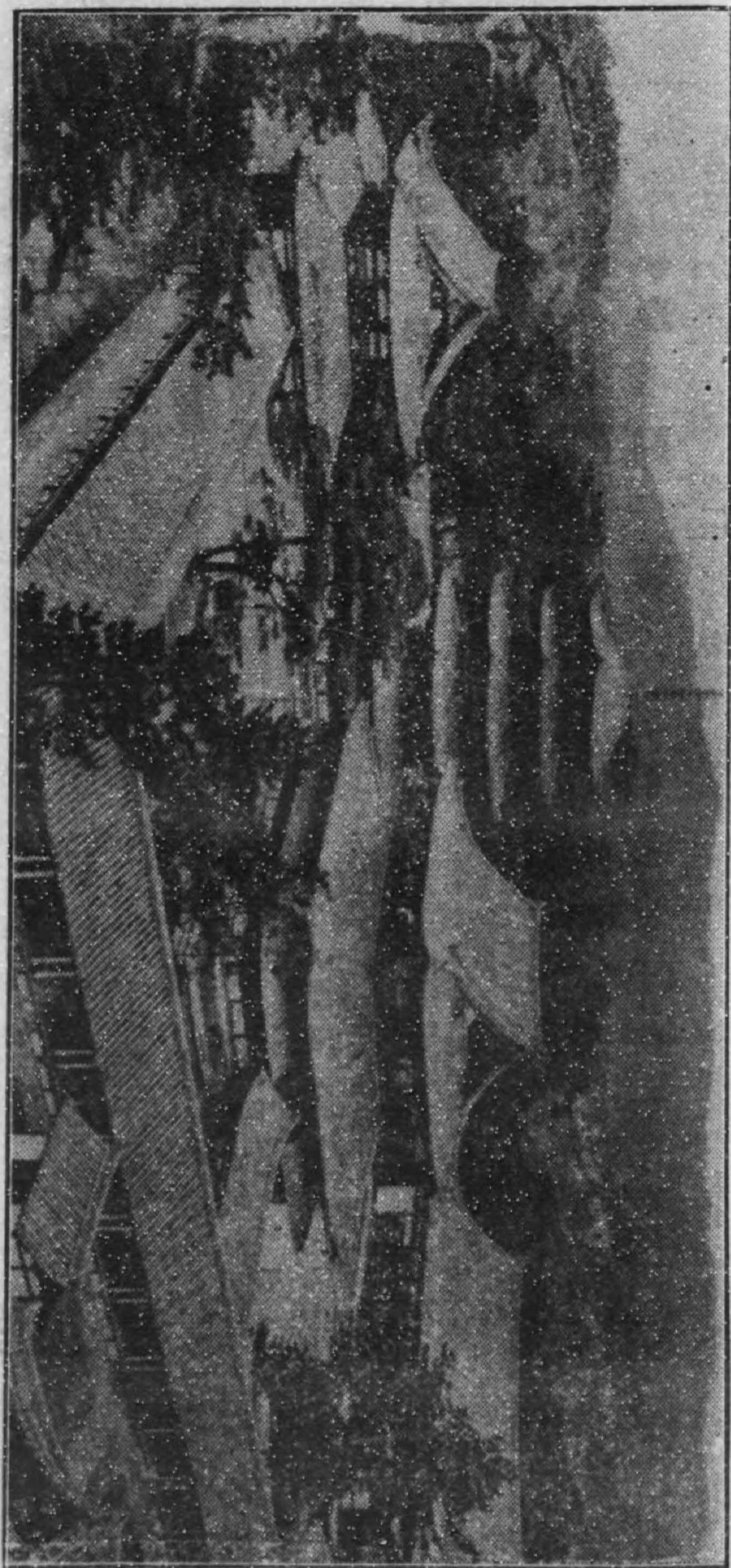
法輪寺

法輪寺——法隆寺夢殿から北九丁三井にある、山背大兄王の創立、上宮妃膳三種姫の祈願といふ、本尊の觀世音は百濟傳來といふ靈像で其他藥師、虚空藏、吉祥天の諸佛を安じてゐる、三重塔は法起寺の塔と共に推古朝建築研究上最も價値あるものといはれてゐるが其他は悉く徳川時代の再建である。法輪寺の東五丁岡本に法起寺がある（法隆寺の東北十丁）、地は聖德太子岡本宮の遺跡で、寺は太子建立四十八寺の一に數へられてゐるが度々の災厄に遇ひ、今は延寶年間（凡そ二百四十年前）の再建である、只三重塔のみが創建當時の佛を殘してゐるに過ぎない、本尊十一面觀音と虚空藏像とは國寶になつてゐる。

法起寺

松尾寺

松尾寺——法隆寺の北廿五丁（郡山驛西南方一里廿丁）矢田村松尾山の山腹にある、曹陀落山と號ふ、養老二年（凡そ千二百年前）僧永業の開基、本尊は天武天皇の皇子舍人親王作といふ千手觀世音で俗に厄除觀音といはれてゐる、又大黒堂の本尊は弘法大師の作であるといふ、土地高燥、老樹鬱蒼たる中に、本堂、三重塔、行者堂、阿彌陀堂等の諸堂がある、新舊の初午には遠近から參詣する人が多い。



寺
松
尾

金剛山寺

金剛山寺 — 松尾寺の北十七丁(郡山驛より西一里餘) 矢田村の山中にある、又の名を矢田寺といひ、眞言宗の寺で、白鳳二年(凡そ千二百五十年前)天武天皇の建立、智通僧正の開基、本尊の地藏菩薩は満米一人の作で本邦最初の尊像であるといふ、又観音堂の本尊は聖徳太子の作に係るものといふ、境域に念佛院大門坊、北僧坊、南僧坊等の宿坊と念佛院に地藏菩薩の老樹がある、毎年四月廿三四の兩日の練供養の法會は佛面を被り相連れて菩薩堂に詣るもので中興の満米上人と小野篁が地藏に行つて地藏菩薩に遇つたといふ古傳を演ずるものといふ、眺望殊によく又附近一帯は矢田山といひ松茸の産が多く秋は遊山客で賑ふ。

廣瀬神社 — 驛の東南十四丁川合にある、官幣大社、白鳳四年(凡そ千二百五十年前)の創建、水を司り穀物を護らせ給ふ豊宇氣媛を祀る、正殿、神饌所、勅使殿、繪馬殿等がある。

廣瀬神社

郡山驛

(湊町驛より二十二哩六分、到着時間約一時十三分)

郡山町附近の名所舊蹟は便宜上大軌電車郡山の項に詳しく説いて置いたから其部参照。

奈良驛

(湊町驛より二十五哩五分、到着時間約一時二十一分)

櫻井線の分岐點。又驛の北二丁に大軌電車が接續してゐる。

奈良の見物

奈良 七代 七堂 伽藍 八重櫻、芭蕉

奈良市は大和平野の東北隅に位し、東に春日、三笠山を負ひ、西から南にかけて廣々とした田野に臨んで、生駒、二上、金剛の諸山を繞らし、北は奈良坂の丘陵を境として山城に接してゐる、京都に對して南都の稱がある國中第一の都會だが、今の奈良市は古の平城京の遺址ではない、平城京のあつた處は市の西方で今は田畝と化してゐる(大軌電車西大寺參照)、即ち今の市中は其當時大宮人が逍遙した遊樂地であつたのだが、京都奠都の後平城京の衰頽と反對に漸次發達して出來上つたものと思はれる、東部は寺や神社で殆んど市の四分の一を占め、何百とも知れない神鹿が柔かい芝生の上に群して、馴々しく旅客の袂を引く状態は他處で味はふことの出來ぬ情趣がある、奈良は何うしても遊覽の都だ。

開化天皇陵 — 驛から三條通(平城京の三條通に當る)の大道に出で、東に三四丁進むと北側にある、率河坂上陵といふ。

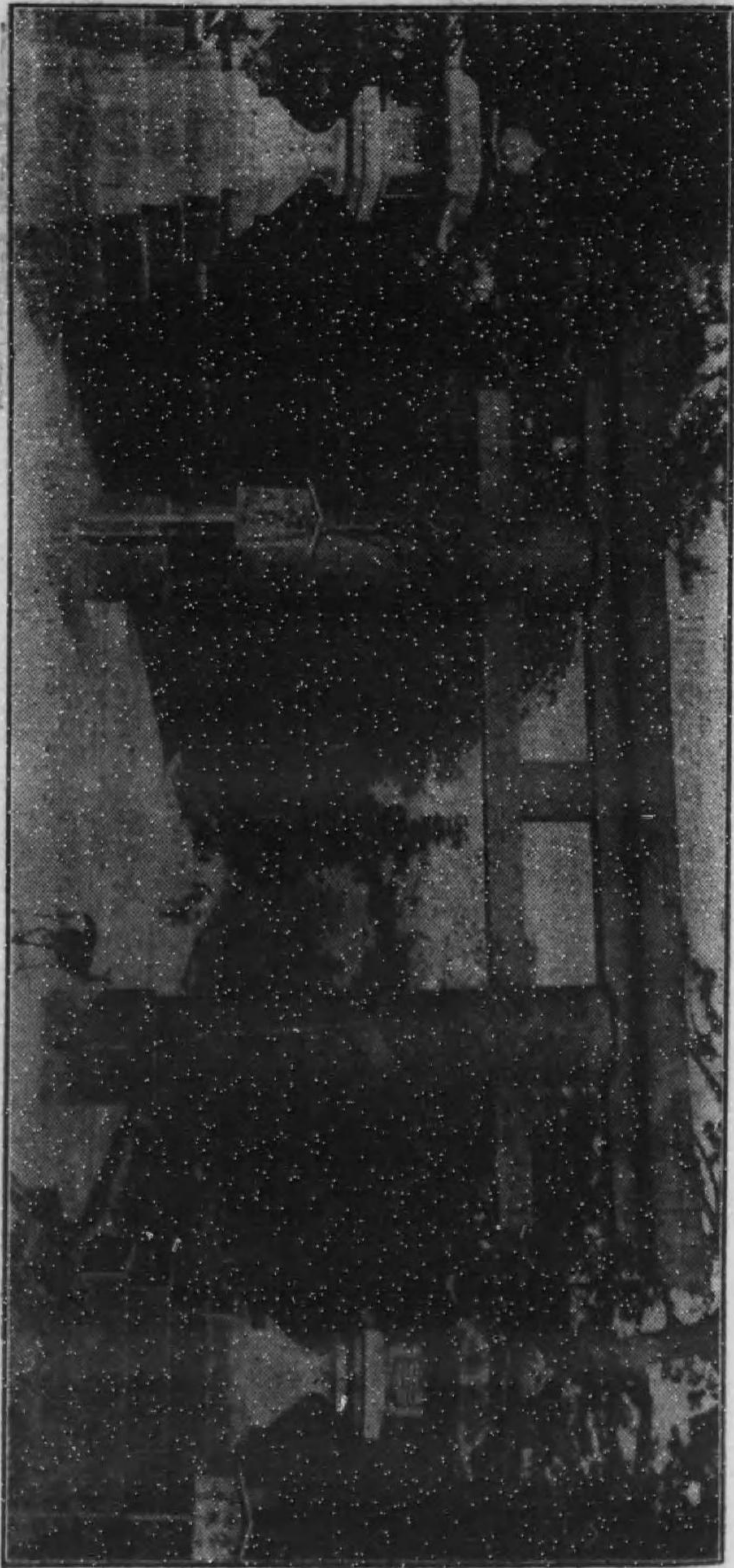
猿澤の池

猿澤の池 — 驛の東九丁(大軌電車の南二丁)にある、奈良公園の入口に當る所で、池は周圍百八十六間、緋鯉や龜などが人の足音を聞いて餌を求めにくる、池の西に采女の社がある、又采女が身を投げるさき衣

關西本線(奈良市)

を掛たさいふ衣掛柳がある、謠曲采女からその傳説を載せて見よ。

シテ詞「是は昔采女と申し、人、此池に身を投げ空しくなりしなり、されば天の帝の御歌に謠「吾妹子が寝ぐたれ髪を猿澤の玉藻と見るぞ悲しきと、よめる歌の心をば、しろし召され候はずや。ワキ詞「實にく此歌は承はり及びたるやうに候。委しく御物語り候へ。シテ詞「昔天の帝の御時に、一人の采女有りしが、采女とは君に仕へし上童なり、始めは敷慮浅からざりしが、程なく御心變りしを、及ばずながら君を怨み参らせて、此池に身を投げ空しくなりしなり。ワキ詞「實にく我も聞き及びしは、帝あはれと思召し、此猿澤に御幸なつて、シテ詞「采女が死骸を敷慮あれは、ワキ詞「さしもさばかり美しかりしシテ謠「翡翠の簪、嬋娟の鬢、ワキ謠「桂の簾、シテ謠「丹花の唇、ワキ謠「柔和の姿引きかへて、シテ、ワキ謠「池の藻屑に亂れ浮くを、君もあはれと思召して、上歌地謠「わきもこが、寝ぐたれ髪を猿澤の、寝ぐたれ髪を猿澤の、池の玉藻と見るぞ悲しきと、敷慮に懸し御情、かたじけなやな下として、君を怨みしはかなさは、たごへ及びなき水の月取る猿澤の、生ける身と思すかや、我は采女の幽霊とて、池水に入りけり、池水の底に入りけり。(謠曲采女)



興福寺

興福寺——池の北石段を登ると既に興福寺の境内である、薬師寺や法隆寺と共に法相宗三本山の一に数えられ、始め藤原鎌足が山城國宇治郡に建立せし山階寺を、天武天皇の御時、大和高市郡に移し、和銅三年(凡そ千二百年前)鎌足の子不比等が今の地に移して興福寺と改稱した大伽藍で藤原氏の氏寺である、藤原氏の盛時は最も隆盛を極め僧徒の跋扈甚だしく禪を懸け春日神祇と稱して京師に入り延暦寺と争つたことが史上に見えてゐる、寺は度々の兵燹に罹り今は創立當初の建物は一つも残つてゐないが、寺の歴史は大佛よりも古く、往古の佛を偲ぶことが出来る、金堂、東金堂、南圓堂、北圓堂、三重塔、五重塔等がその境域にある。金堂は和銅三年藤原不比等の創立、釋迦の坐像を安置してゐる、今の堂は文政二年(凡そ七百四十年前)の假堂であるといふ。南圓堂は弘仁四年(凡そ千百年前)の建立、長岡右大臣藤原高鷹が弘法大師に請ふて本尊を得、其子多嗣が白銀を以て千體の觀音像を造りそれを地に埋め其上に堂宇を建てたのが南圓堂であるといふ堂は八角寶珠形で本尊不空羅索觀音を安置してゐる、西國第九番の札所だ、神陀落の南の岸に堂たて、いまそさかゆる花の藤なみ。

(新古今集)

春の日は南圓堂にかやきて、三笠の山に晴る、うすくも。

詠歌

金堂
南圓堂

三重塔

北圓堂

東金堂

五重の塔

三重塔は康治二年(凡そ七百八十年前)鳥羽法皇の後の祈願により建立せられたもので創建當初のものであるといふ。南圓堂の北に北圓堂がある、本尊釋迦如來の坐像は定朝の作といひ、堂は康平三年(凡そ八百六十年前)の造營で特別保護建造物である。東金堂は金堂の東にある、聖武天皇が元正上皇の病氣平癒の祈願により建立せられし堂宇で、薬師佛を安置してゐる、今の堂は應永二十二年(凡そ五百十年前)の重建に係はるものである。又堂前に弘法大師手植と傳ふ花の松がある。東金堂の南にある五重の塔は天平六年(凡そ千九十年前)光明皇后の造營に係り、今のは應永二十八年(凡そ五百年前)の重建、東金堂と共に東山時代の粹を發揮せるものといはれ、佛像は藤原時代の製作で、美術工藝上甚だ尊重せられてゐる。寺の北方に興福、縣會議事堂、圖書館、師範學校等の建物がある。

縣會議事堂

圖書館

師範學校

古の奈良の都の八重櫻、けふ九重に匂ひぬるかな。 伊勢大輔

のお馴染の歌で者はれてゐる八重櫻は師範學校々内にある。のが其嗣種たさうな。

十三鐘——猿澤の池の東にある昔十三になる稚兒が誤つて春日の神鹿を殺した罪で六ツと七ツの鐘を合圖に石子詰の刑に處せられたといふ悲しい石子詰の古跡で、土壇の上に二株の楓樹が其哀話を物語つてゐる。

春日野
博野館
公會堂
淺茅原
荒池
片岡の梅林
丸窓の亭
雪消の澤

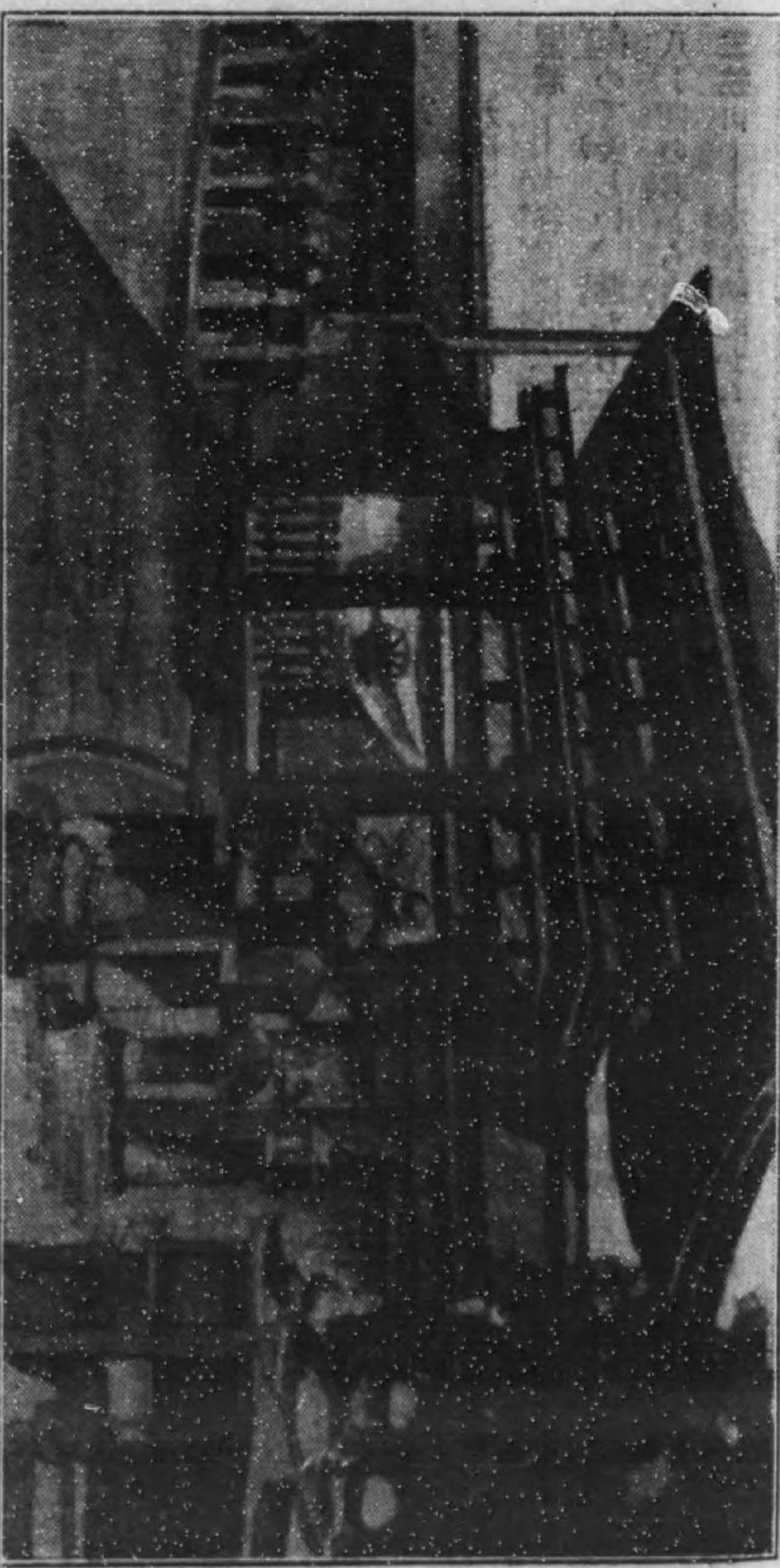
春日神社

春日野の雲間を分けて生出る、草の葉つかに見ゆし君かも。 壬生忠岑

春日野に朝居る雲のしづくにわれは戀ます月に日にけに。 大伴像見

の詠がある春日野は春日の一の鳥居から左三笠山麓一帯の總稱で、中に博物館や公會堂などの建物がある鳥居から右の丘を淺茅原といひ、荒池を隔て、諸山を望む風景がよい、附近に片岡の梅林、丸窓の亭等がある、片岡の奥に續く原を雪消の澤といひ、孝徳帝の「春くはれば雪消の澤に袖たれて」の御製を偲はしむ一の鳥居から左右に杉檜繁茂し、石燈籠が奥へ進むほど多く續く、芝生の上には所謂春日の神鹿が三五五々群を成して遊んでゐるなど、のんびりとした奈良の気分が漲つてゐる。

春日神社——奈良市の東、(驛より東二十丁)春日山の麓にある、一の鳥居から二の鳥居を過ぎることここに樓門が見えてゐる、謡曲采女に「そもく春日社と申すは、神護景雲二年に、河内國枚岡より、此春日山本宮の峰に影向ならせ給ふ。」と社の起原を扱つてゐる、官幣大社、武甕槌命、經津主命、天兒屋根命、比賣神の四柱の神を祀る、今の社殿は慶長十七年(凡そ二百年前)の修造で頗る神殿を極め、檜皮葺丹塗にして結構甚だ巧である、例祭は三月十三日で勅使の参向があり、毎年節分の夜は廻廊に吊るす無数の燈



春日神社

龍に悉く點火するといふことだ、又社殿の左側に七種の寄生木がある。

長松老樹影層々。翠巖三神宮。山氣凝。庭内千年無一夜。常明三百六十燈。佐野東庵

春日若宮

春日山

春日若宮——本社の南にある、春日神社の攝社で、長承三年（凡そ七百九十年前）の創建、天押雲命を祀る、春日山は三笠山に連り老松古杉鬱々として畫向暗く、山中に大杉、編蝠窟、七本杉等の凄じ處がある

水谷神社

ものおもひかくろひ居りて今日見れば、春日の山は色つきにけり。（萬葉集）
春日神社から北二丁、水谷川の橋畔に水谷神社がある、素齋鳴尊外二座を祀る社で、社側の寄生木が著はれてゐる、水谷川は宜寸川といひ、末は佐保川に注いでゐる。

わきもこに衣借香のよしや川、よしもあらぬかいか目を見む。（萬葉集）

鶯瀧

鶯瀧——水谷川に沿ふ山路を登つて東一里（二三丁の處）に月日亭、紅葉の瀧等がある、途次楓樹多く秋は極めて美しい、瀧から上二丁に興福寺の別院聖天堂がある、俗に「鶯瀧觀喜天」といはれてゐる、師路十

八丁目の處から右に小徑を辿ると二丁餘で、三笠山の山頂鶯瀧のある處へ出られる。

三笠山

三笠山——水谷神社から水谷川に架す橋を渡つて進むと全山剃つた様な美しい草山があるのがそれだ、又

手向山八幡

の名を嫩草山ともいひ、山頂鶯瀧から四邊を望む風景が頗る壯觀である、山上にさしのぼる次の月は、明州から歸朝せんとする安倍仲麿をして、

天の原ふりさけ見れば春日なる、三笠の山に出でし月かも。 安倍仲麿

さ歌はしめた、仲麿は日本に歸る途中難風に遇ひ、再び唐土に吹き返されて遂に彼地の土を成つたことは人のよく知る處である、川柳に「月の歌ばかり歸朝し奏聞し。」

手向山八幡——三笠山の北麓にある、縣社、聖武天皇の勅願で、豊前宇佐から勧請して、東大寺の鎮守神とせられた社である、菅公の「紅葉の錦神のまに」の詠は此處での作であるといふ、今の社殿は元祿四年（凡そ二百三十年前）の再建で、境内に運慶作の狛犬や菅公の腰掛石といふものがある。

東大寺

東大寺——華嚴宗の總本山、天平年間（凡そ千九百年前）の創建、聖武天皇の勅願、良辨僧正の開基、行基菩薩の勸進、菩提仙那の導師で世に四聖建立の伽藍といひ、金光明四天王護國之寺の扁額を賜り、日本總國分寺の稱もあつた大伽藍だが、屢々の火災で堂塔の多くは灰燼と化し、今は三月堂、法華堂、大佛殿（金堂）、二月堂、南大門、轉害門、戒壇堂、千手堂、灌頂堂、三昧堂等が残つてゐる、其多くは特別保護

關西本線(奈良市)

三〇

三月堂

二月堂

鐘樓

大佛殿

建造物である。三月堂は手向山八幡の北にある、天平五年(凡そ千百九十年前)の創建、奈良最古の建築物で、本尊の不空羅索觀音、日光月光、梵天帝釋、金剛密迹、四天王、執金剛神等、天平時代の精華を盡した佛像を安置してある。三月堂の北に二月堂がある、巖に架かつた堂がそれだ、天平勝寶四年(凡そ千百七十年前)の創建、今の堂は寛文九年(凡そ二百五十年前)の再興である、本尊十一面觀音を安置してある、三月二日から二週間修二會の行法がある、これを俗に「お水取り」といふ、堂前から眺めた風景がよい。

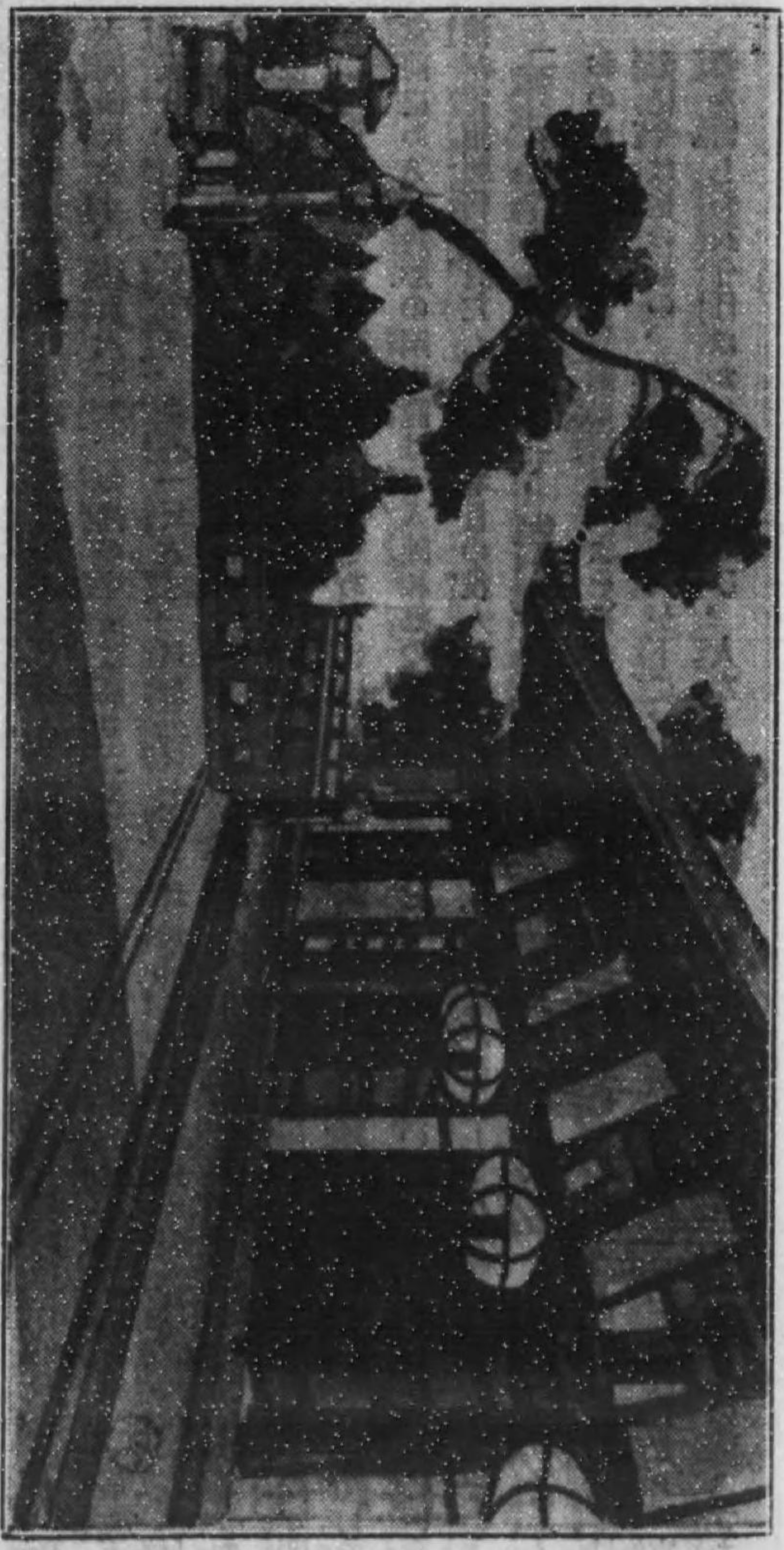
水とりや、こもりの僧の杏の音。芭蕉

(川柳)

はるく、若狭から来る二月堂。川柳

附近にある良辨杉は良辨僧正が幼時のごとき大鷲に攫はれて此樹の上に引掛つてゐたと傳ふるもので、何ちちにして引掛つてゐたといふ良辨はタコに縁のあるしるものだ。二月堂の西にある鐘樓に懸がける符鐘は、京の智恩院の鐘と並稱されてゐる名高いもので、天平勝寶四年(凡そ千百七十年前)に鑄造されたものといふ、撞くには料金を要するので、「ゴーン」と撞や愁ひね」といふ唄の文句が流行したさうだ。

大佛殿——鐘樓の西にある宏大な佛殿がそれだ、東大寺の金堂で、世に奈良の大佛」といはれてゐる有名な



三月堂 二月堂 鐘樓 大佛殿

な盧舎那佛はその中に安置されてゐるのである、堂は東西卅一間二尺二寸、南北廿七間四尺六寸、高さ廿六間四尺六寸、柱數六十本、大佛の寸法は高さ五丈三尺五寸、面長一丈六尺、廣さ九尺五寸、眉長五尺四寸五分、目長二尺九寸、鼻高一尺六寸、口長二尺七寸、耳長九尺五寸、胸長一丈八尺、肩長二丈八尺七寸、さいふ金銅製の座像で、天平十五年(凡そ千七百七十年前)聖武帝の勅を奉じて行基が造つたものである、鑄造佛としては世界第一のもので、嗣は最初のもつたが首は兵火の爲めに焼け落ちて、今のは元祿年間(凡そ二百卅年前)に鑄直した四代目であるといふことだ、左右に如意輪觀音、虚空藏の脇士を安置してゐる堂前にある八角形の銅燈籠は宋人陳和卿の補修とも寄進とも傳ふる名高いものである、諸曲大佛供養は景清が將軍頼朝を討たんとして春日の役人に粧つて入り込み、隠謀が發覺して身を隠すといふ筋である。

「面白や奈良の都の時めきて、色々飾る物語で、我はそれには引きかへて、敵をうたん謀を思ふ心はおのが名の、悪七兵衛景清と、よそにもそれ人やもし、白張淨衣に立烏帽子、實に我ながら思はざる姿に今は楢の葉の、時雨降り置く天が下に、身を隠すべき便りなし、憂き身の果ぞあはれなる。官人の姿を暫し狩衣今日ばかりこそ鏡さび、人なごがめそ神だにも、聖に交はる官寺の、供養の場に立ち出づ

る、こは何者なれば御前真近く参るぞこ退き候へ、是は春日の宮つこなるが今日の佛の御供養、搦を清めの役人なるを、何しにこがめ給ふらん、春日祭にあらはこそ、是は佛の御供養、なう水波の隔てこ聞く時は、佛も神も同一體、その上貴賤の事なるに、何さて選み給ふべき、包むとすれと神はなほ、君を守りの御威光、あらはれけるか白張の脇より見ゆる具足の金物、光りを放つ、打物の鞘つまりたる言葉の末、名のれこく責めければ、顯れたりと思ひつゝ、さらぬやうにて立歸り、又人かけに隠れけり

南大門 たてうまれしや鹿の聲 正秀

南大門
正倉院
轉害門
般若寺

大佛殿の前にある南大門は即ち東大寺の總門で、正治元年(凡そ七百廿年前)の再築に係り、西は運慶作の金剛力士、東は湛慶作の密迹力士で有名である。大佛殿の北二丁程の處に正倉院がある、今は帝室の所有となつて濫りに拜觀は許されないが、聖武天皇より嵯峨帝に至る歴代の寶物を收めたる我國無二の寶庫で、其當時の美術工藝の發達を知る唯一の參考資料として尊重せられてゐる。その西に東大門の西門であつた轉害門がある、天正年間(凡そ二百五十年前)の再築、昔平家の侍大將悪七兵衛景清が此門に潛んでゐたのを畠山重忠に捕はれたといふ説のある處で俗に「景清門」の名もある。轉害門の北五丁般若坂に般若寺

新薬師寺

奈良土産

奈良線
片町線

がある、眞言律宗、白雉五年(凡そ千二百七十年前)に蘇我日向臣の草創、聖武天皇の朝に堂塔等を造営し中々盛大を極めたといふが、歴々の變亂で、今の堂は寛文の頃(凡そ二百六十年前)に再建せられたものである、本尊文殊菩薩を安置してゐる、昔此の寺で護良親王が經函の中に匿れ給ふて賊手を免れ給ひし事蹟は人の知る處である、境内に聖武天皇が大般若經を書かれて地に埋め、其上に十三層の石塔を置かれたといふ、高さ五丈に餘る塔がある、それで寺の名が起きたといはれる。

新薬師寺——猿澤の池の東手を雨に月ヶ瀬道に出で東に十丁高島井之上町(春日若宮の西南四丁)にある一に香藥師寺といひ、天平十九年(凡そ千七百七十年前)光明皇后の御願にて聖武天皇の眼病平癒を祈らん爲めに、東大寺大佛殿の餘材を以て建立せられし古刹、本堂、鐘樓、南門は特別保護建造物になつてゐる、本尊は行基作の藥師如來で天平時代の傑作であるといふ、十二神將、佛涅槃圖と共に國寶に編入されてゐる、奈良土産——あられ酒、奈良木綿、鹿の角細、木刺、筆墨等。

▼木津 驛 (淡町驛より二十九哩九分、到着時間約一時卅八分)
奈良線、片町線の分岐點、詳細は各線の部参照。

木津町

大智寺

哀堂

國分寺

木津町——山城南端の繁昌地で、大和街道の要衝である、往昔は泉の里、又は高瀬、岡田等といはれた處だが、聖武天皇の朝に奈良東大寺造營の木材を諸國から運送して來た着津で今の名が起きたのだといふ。町の東三丁程に大智寺がある、昔泉川(木津川)に架す泉橋が破壊せしに、興正菩薩、佛工安阿彌に命じて曼珠大士の像を作らしめ、一字を建立して安置したのが當寺で、其當時は橋柱寺と號したさうだが中世今の名に改めたのである。寺の東に哀堂がある、淨土宗、本尊阿彌陀佛を安置してゐる、境内に重衡の塔といふ十三層の石塔がある、壽永の戦ひに廢はれてこの地で首を切られた平重衡の菩提の爲めに建立したものとといふ、寺の東北木津川の堤下に重衡の首を洗つたといふ池がある。

▼加茂 驛 (淡町驛より卅三哩、到着時間約一時五十六分)

國分寺——驛の北十八丁、木津川の北岸、瓶原村河原の東二丁にある、聖武天皇が行基に勅して各國に國分寺を置かれたことが史上に見えてゐる、即ち山城の國分寺はこゝで、今は荒廢久しくたゞ草堂が一つ残つてゐるに過ぎないが遺墟を調べると流石に昔の壯大な佛を伺ふことが出来る、附近瓶原村は百人一首のみかの原わきて流るゝいづみ川、いづみきさてか繼しかるらん。

滋原離宮の址

とある、みかの原のところで泉川は今の木津川のことであるといふ、滋原離宮の址は定かならねども、村から千年以上の古瓦を發掘することがあるさうだ。

海住山寺

海住山寺——國分寺趾から北十丁例幣から山路八丁位の所にある、眞言宗、聖武天皇の勅願で良辨僧正の開基、保延三年(凡そ七百八十年前)に焼失し今は承元元年(凡そ七十年前)解脱上人の再建である、本堂に本尊十一面觀音、脇土地藏菩薩、毘沙門天を安置してゐる、堂内に古彩爛熳たる法華普門品の説相を畫く、文珠堂、五層の塔は特別保護建造物で其他藥師堂と解脱上人及其の高足悲心上人の石塔がある、奥の院は本堂の北約半丁、十一面觀音と兩上人の像を安置してゐる、極めて幽邃な所だ。

岩船寺

岩船寺——驛の東南一里九丁、當尾村岩船の山中にある(淨瑠璃寺の東北十四丁)眞言律宗、天平年中(凡そ千九百九十年前)行基の開基、本尊は行基作の阿彌陀佛を安置してゐる、三層塔は仁明天皇の創建、壁畫は巨勢金岡の筆といふ大分破損はしてゐるが尙古彩觀るべきものがある、塔は保護建造物になつてゐる、本堂の南にある石造三重塔は南都般若寺のそれと並稱されてゐる有名なもので國寶に編入せられてゐる、淨瑠璃寺——驛の南一里餘(奈良般若寺の東北一里)字西小上にある、西小田原山と號ふ、又俗に九體寺、

淨瑠璃寺

九品寺ともいはれてゐる、眞言律宗、天平三年(凡そ千九百九十年前)行基の開基、昔は五十近い坊舎があつた大伽藍といふが、興國四年(凡そ五百八十年前)の火災で本堂、護摩堂、三層塔の他は悉く灰燼と化した、爾後舊觀に復しないが現存せるものは何れも創建當初のもので、山城南都の最古たる靈刹だ、本堂に定朝作の九品の阿彌陀佛を安置してゐる、三層塔の釋迦八相圖の壁畫は巨勢金岡の筆で、塔は本堂と共に特別保護建造物である。

▼ 笠

置

山

(淡川驛より廿七哩七分、到着時間約二時九分)

笠置山——元弘元年(凡そ五百九十年前)後醍醐天皇が九重の雲深き御身を以て此山に北條氏の兵を避け給ひしことは誰知らぬ者もあるまい、

さして行く笠置の山を出でしより、天が下にはかくれ家もなし。

後醍醐天皇

の御詠を思ふと涙が零れる、登山道は驛の東、追手橋を渡つて右に一丁、石標から二丁登ると上の堂、下の堂がある、元弘のときこゝに一の木戸の城門があつた所、三河國住人足助次郎重範、辱なくも一天の君に頼まれ進らせて、此城の一の木戸を固めたり。前陣に進んだる旗は、美濃、尾張の人々の旗と見るは

笠置山

上の堂
下の堂

地獄谷
名切石
笠置寺

樽木殿
管公廟址
駒止め松
毘沙門堂

御目撃、十萬の君の御座す城なれば、大波羅殿や御向ひ有らんぞ心得て、御座の爲に、大和銀治のきたうて打たる鐵を、少々用意仕て候と強弓を以て賊軍を思ふ存分に備ましたことが太平記に見れてある、その南の深谷は賊軍が人馬諸共陥落したといふ地獄谷で、ここから七丁程登ると名切石がある、元弘に忠死した勇士の名を刻した石であるといふが地震で覆没して字が判らない、石段を上ると笠置寺がある、鹿鷲山と號ふ、天武天皇が皇子で在らせられた時分此山に獵せられて馬を岩の上に乗上げられた、岩の下は十餘丈の深谷で一足を過ると、人馬諸共に粉砕の臺目を見なければならぬので、山神に我命を助けは此山に伽藍を建立することを誓われて危難を逃れ給ふた、御着の笠を取つて岩の上に置き再び尋ぬる印となされたので山の名が起きたのだ、白鳳十二年(凡そ千二百四十年前)彌勒石を本尊に文珠、藥師の大石をも籠めて廣大壯嚴なる伽藍を造營せられ、方丈、及び諸堂も臺を列べたといふが、元弘の亂に灰燼と化じ、福壽院即ち今の笠置寺が残つてゐるに過ぎない、北隣の鐘樓の鐘は建久七年(凡そ七百卅年前)に中興の解脫上人が鑄たものだ、その傍に椿本殿、管公廟址、駒止め松及び高所に毘沙門堂がある、駒止めの松といふのは天武天皇が駒を繫ぎ給ふたのであるといふその關松たそな、毘沙門堂の本尊は楠正成が

笠置山

春佳篇



五輪の塔
千手の瀧
薬師石
文珠石
彌勒石

本堂
金剛界石
胎藏界石
虚空藏石
胎内賣り
太鼓石
平等石
東觀
蟻の戸渡り
搖ぎ石

彫られたものであるといふ、堂の東方溪谷を隔て、解脱上人の墓なる五輪の塔や、墓の附近に京都の清水寺の本尊が出現したといふ千手の瀧がある、椿本殿の前を左に北へ行くに森林に高さ四十尺廣さ卅一尺の薬師石、高さ廿二尺廣さ十六尺の文珠石、高さ五十二尺廣さ四十二尺の彌勒石がある、昔は其石面に何れも其佛像が刻まれてあつたが、元弘の兵燹で害はれ今は彌勒の像がやゝその形状を認められる位だ、この三石が笠置寺の本殿に納められてゐたので、あるからして、當時の伽藍の規模の大きさを伺ふことが出来る、傍の本堂に観音菩薩を安じてゐる、そこを降りて佛殿の下を過ぎると、高さ四十尺廣さ卅六尺の金剛界石と高さ四十八尺廣さ廿七尺の胎藏界石がある、其間の洞窟を千手窟といつて、昔良辨僧正が千手の秘法を修した所、胎藏界石に隣りて高さ四十二尺廣さ廿四尺の虚空藏石がある、こゝは弘法大師が求聞持の法を修した跡で虚空藏の像が石面に認められるそこを過ぎると胎内賣りといつて大石が自然に重なり合つて隧道をなしてゐる、そこを出ると太鼓石がある、擊太鼓の響きがするといふので其の名がある、その西北の高崖に高さ廿五尺廣さ卅六尺の平等石この石から木津川の清流を望んだ風景がよい東觀といふがそれだ、崖の下に不動の石像がある、その裾の道を蟻の戸渡りといふ、平等石の傍に搖ぎ石がある、元弘

行宮址
笠置石
貝吹岩
祖師堂
笠置温泉
笠置新温泉
鷲峯山金胎寺

の投石の遺物たといふ周圍三十尺推すと動搖するので名がある、頂上に南朝の悲史を語る行宮址がある、地平坦石欄を繞らしてその趾を劃してゐる(彌勒石の上に當る)その側らに天武天皇が笠を置かれた。笠置石がある、行宮址から少し隔て、高さ十六尺廣さ三十六尺の貝吹岩がある、元弘の役に陣貝を吹いて軍を指揮した所、岩上に立つて山下を望んだ風光は實に三歎の價値がある、祖師堂は明治二十六年の建立で弘法大師の像を安じてゐる、下山して北し、木津川に架す橋の畔に至ると笠置温泉、橋の北詰を東すると笠置新温泉に出る。橋から笠置山の北面の山腹を望むと、故小松宮彰仁殿下の御染筆になる高さ廿五尺、廣さ廿六尺の大石に刻んだ「行宮遺址」の四大文字が目に入る。
維昔帝蒙塵。至今人濕巾。北條皆亂賊。楠氏獨忠臣。御座不違暖。
怪巖何足珍。猶憐民俗厚。順逆絶婚姻。篠崎小竹

鷲峯山金胎寺——驛の西北方二里、東和東村字原山から山路卅餘丁、鷲峯山の山頂にある、白鳳四年(凡そ千二百五十年前)役小角、此山に登り、天竺鷲峯山に倣つて八峰を八葉の蓮華に表し、巖に座して法を修めて遂に常山を開基した、養老六年(凡そ千二百年前)泰澄法師その遺跡を慕ふてこの山に修法してこゝ

に伽藍を建立し、後行基、鑑真、弘法、傳教等皆此の山に登つて練心修行をせられ、醍醐の信仰篤く行幸なされたところもあるといふ、後醍醐天皇は初め此山に蒙塵せられて後笠置に入らせられたのである、今の堂は文政九年（凡そ百年前）の再建で、本堂の彌勒佛は行基の作、開山堂には小角自作の像を安置してゐる、其の多寶塔、金剛童子社等がある頂上の空鉢峰から望むと西に生駒、金剛の峻峰、遠く摩耶、六甲の連山、淡海の碧色、北に愛宕、比叡の高翠、東に琵琶の明鏡を一眸に收め、實に壯絶なる大觀を具へてゐる、又東の山腹は役小角及泰澄の二人が密法修行した靈地で、そこを巡拜するのを俗に行場廻りといつてゐる、迎行者、東觀音、千手瀧、五光の瀧、胎内賣り、鐘掛、愛宕、仙人窟、水晶山、黒白岩、天狗岩、老瀧、加持水、養生芝等の數多い、難路や勝區で冷汗を流すこと一再に留まらない、西麓、郷の口まで一里半、郷の口から宇治迄一里卅丁である。

▼大河原驛

（湊町驛より四十一哩一分、到着時間約二時二十二分）

明神の大瀧——木津川の上流、名張、上野兩川の合流點、懸崖百五十尺、風光頗る奇絶を極めたが近時水力電氣が企畫せられ、昔時の壯觀は失はれた。

明神の大瀧

▼島ヶ原驛

（湊町驛より四十五哩五分、到着時間約二時四十分）

月ヶ瀬——月ヶ瀬の梅を採るには島ヶ原、上野、笠置の三道がある、島ヶ原道島ヶ原驛の東、木津川に架した一橋を渡り、東南に岐れたる道を南に取つて約二里、上野町から来る道と合する石打に至る、更に西南廿六丁で月ヶ瀬の入口、尾山に着く。上野町道上野驛から伊賀鐵道に依つて鍵屋辻に下車、西南に路を取つて北山、法花を経て、島ヶ原より来る道と合する石打迄二里十餘丁（上野町からは自動車、馬車、人力車の便がある）。笠置道笠置驛から追手橋を渡り南笠置を通り抜け、柳生迄東南一里餘、地は柳生十兵衛の本陣のあつた所、更に東南方邑地を経て、月ヶ瀬の裏口に當る桃香野迄二里餘、路は峻しくて遠いが此路が一番風光がよい。

月ヶ瀬
島ヶ原道

上野町道

笠置道

「何れの地にか梅無からん。何れの郷にか山水無からん。唯和州の梅溪、花は山水を挾んで奇に、山水は花を得て麗し、天下の絶勝たり。」と齋藤拙堂が世に紹介してから月ヶ瀬は梅の名所として天下に鳴り響いてゐる、案内は道順として表口即ち尾山から説く、尾山から舊道を迎ると梅がたん／＼と多く成つてくる、二丁行くと眼界豁然と展く、斷崖から望むと白雪とまばら梅花、名張の清流は脚下に流れて兩岸の

峰巒重々として連る、頗る附の所に出る、附近は尾谷八景とて「八谷各々數日千樹、眞福寺は其極西に在り。其下を初谷と爲す、名づけて敵谷と曰ふ。第二を鹿飛と曰ひ第三を捜し窪と曰ふ其上に天狗巖有り謂ふ。羽客の棲止する所也。第四を祝谷と曰ひ、第五を葛蒲谷と曰ひ、第六を杉谷と曰ひ、第七は即ち一目千本なり。第八を大谷と曰ふ。花の多きこと一目千本と相類す。相距ること、皆數十歩に過ぎず」と拙堂の明文を拜借する九曲の大觀坂を過ぎて名張川に架した五十餘間の月ヶ瀬橋から四邊を眺めた趣きは實に絶佳である、橋を渡つて左の小路六七丁登ると一目萬本壺に至る、句碑に

春もや、景色と、のふ月と梅、芭蕉

向三丁で總見山に至る、附近第一の高所でその名の如く月ヶ瀬の全景を指點することが出来る頗る絶勝の地である、山を西に下つて通路を桃香野に進むと、老梅道を挟んで萬葉の香氣馥郁として清氣を發してゐる、程なく龍王橋に出る橋の畔を見返り千本といふ、橋を左に歩を移すと龍王の瀧がある、梅ヶ谷に行くこと不動の瀧がある、共に極めて幽邃な所だ、以上で月ヶ瀬の大略は終つた、島ヶ原方面から来た人は、から道を邑地にとつて笠置に出るか元の道に引返すかは遊者の意に委すこと勿論だ、笠置から来た人は

今の順路を逆に探らばよいのである。

萬樹梅園溪水長、芳山寧敢擅春芳、東風一樣晴雲白、孰與此中雲有香。 賴山陽

正月堂——驛の北十二丁である、觀音提寺と號ひ、奈良二月堂の別院、聖武天皇の勅願、實忠和尚の開基本尊十一面觀音を安置してゐる、正堂及樓門は共に天平時代建物で、樓門の仁王は佛師春日の作と傳ふ。

▼伊賀上野驛 (湊町驛より五十哩、到着時間約二時五十五分)

伊賀鐵道の接續點、同線は此驛から南、上野町を経て名張町に通じてゐる、哩數一六哩三分、到着時間約一時三十分を要す、即ち上野町や赤目四十八瀧見物は此線に依ればよいのだ。

上野町——驛の南二哩を隔てゝある(前記伊賀鐵道に依ればよい)、伊賀第一の繁昌地で、舊藤堂家の分城のあつた處、城址は町の北部にある、その天守臺のあつた跡は今公園に開放せられ花樹多く殊に展望がよいので知られてゐる、町に菅原神社、念佛寺、愛染院、廣禪寺、萬福寺等の名所がある、愛染院に

雲こそへたつ友や雁の生きわかれ 芭蕉

の一句を残して去つた松尾桃青の所謂芭蕉の古郷塚といふがある、町の西端伊賀街道筋にある健屋の辻

上野町 城址 公園 菅原神社 念佛寺 愛染院 萬福寺 芭蕉の古郷 健屋の辻

正月堂

名張町

は、寛永十一年(凡そ二百九十年前)お馴染の劍客荒木又右衛門が義弟に當る備前池田家の臣渡邊數馬と共に敵河合又五郎を討取つた處、講談や芝居で名高い伊賀越の仇討といふのがそれだ。

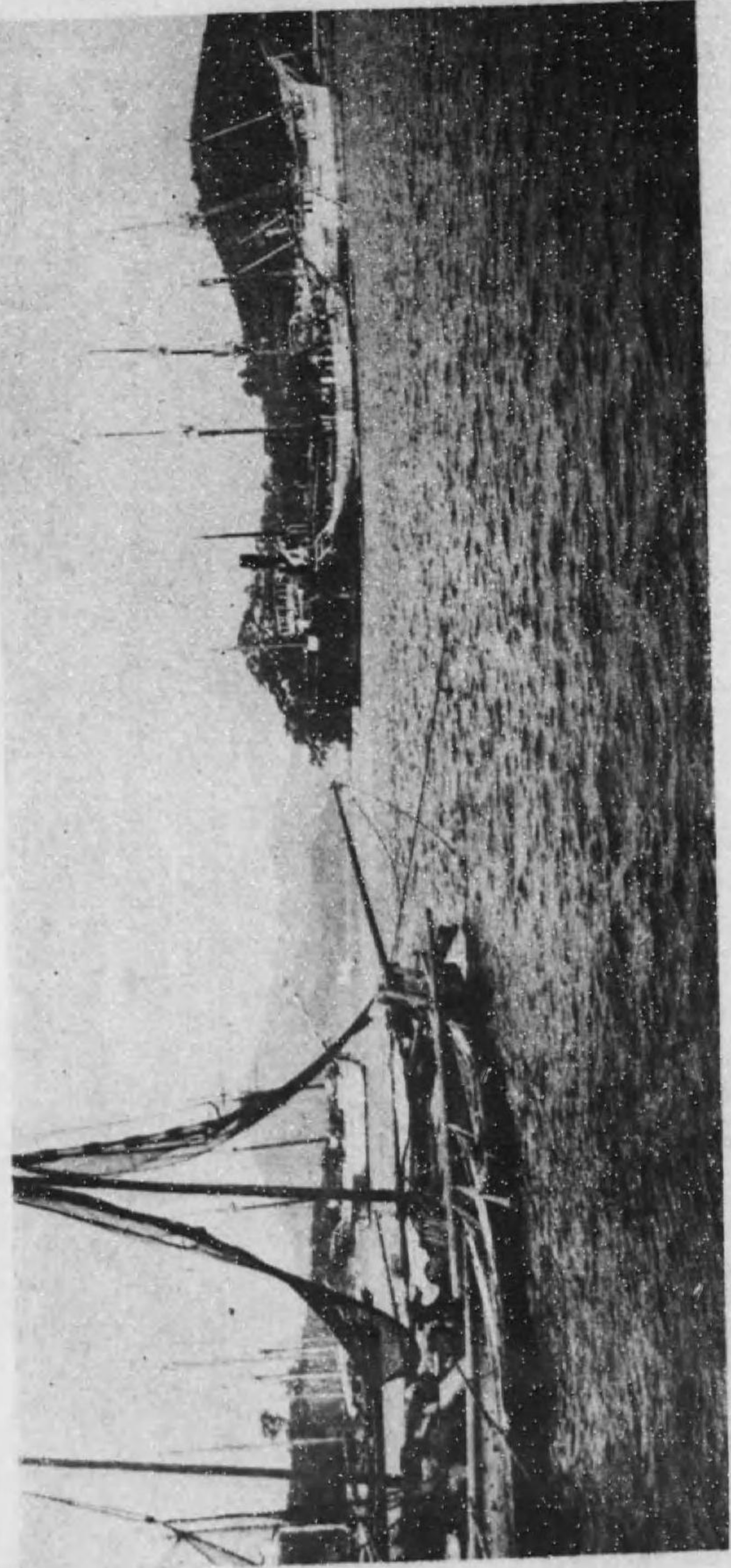
赤目四十八瀧

名張町——上野町の南五里、(前記伊賀鐵道に依ればよい)、名賀郡の町で昔は梁瀬といひ、大和路から伊勢參宮する要驛であつたといふ、宇陀、長瀬の兩川此處で會流し名張川となつて月ヶ瀬の方面に流れてゐる赤目四十八瀧——名張町の西南二里、(赤目の延壽院まで乗合自動車の便がある)、赤目の瀧は經ヶ塚を中心に獨鈷山其他の峰巒の裂け目を流下する瀧川で一に阿智の瀧ともいひ大小四十八の瀑布があるといふので其名がある瀧口から龍ヶ壺に至る間を前瀧とし龍ヶ壺から奥を後瀧と名稱してゐる、日がへりの見物としては先づ前瀧位であらう、小さい瀧は長坂の邊からあるが見るべきものは赤目の延壽院から奥である。延壽院は天臺宗で黃龍山聖王聖寺といひ、役小角の開基、寛永十三年の本堂勸進帳の序に不動明王赤目宮の牛に乗つて出現されたのであるので里の名これに依るといふ、役行者、行基、弘法等修法の靈地として留錫したと傳ふる古刹、昔は八坊を有し、藩主藤堂家の祈願所で、四十八瀧は實に此寺の城内であつたのだ、不動堂に智證作の本尊不動明王を安じてゐる、其他觀音堂、十三層塔と國寶になつてゐる石燈籠が

延壽院



延壽院 (記事三三三)



香落峽

ある、瀧道は寺から右に小徑を川邊に下つて行のである、前淵で著名な瀧は大日、行者、銚子、靈蛇、不動、千手、曳布、龍ヶ壺等で、勝區としては東硯、西硯、懸衣岩、屏風岩、胎内賣、天王舞臺石、護摩窟、天狗、踏岩等である、後淵では鐘藤、夫婦、降雨、陰陽、柿窪、荷擔、琵琶、崖窟の諸瀧で、斧、釜、横等の諸瀧がある、潭には大きな山椒魚やアメゴといふ鮎に似た美味な魚が住んでゐる、樹木鬱蒼、岩石怪奇、岩石又は樹の根等を握んで這ふ様な處もある、満山彩る秋の頃は非常に美しい。

香落峽——香落峽は名張町の東南一里半餘、大和の奥、宇陀兜ヶ嶽の麓から伊賀に曲流する、青蓮寺川の兩岸二里に亘る間をいふのである、巨巖疊々して奇岩怪石相迫り、楓、榎、山櫻等の紅葉之れを彩り、處處に潭あり、瀑布あり、歩々其景觀を新にする美觀は、眞に一大繪巻物を展べたるが如しとでもいはふか兎に角豊の耶馬溪に勝るまでにははれてゐる絶景の處だ。

岩倉峽

岩倉峽——釋の西甘餘丁、長田川と服部川の合流する所、峽中に獅子岩、太鼓岩、鬼面石、屏風岩、千疊敷岩等の奇巖怪石が峭立し、急湍、深潭、奔流岩に激する様等、景趣轉變して頗る奇絶である、兩岸に櫻、楓多く、春の花、秋の紅葉の頃は極めて美しい風致を添へる。

敢國神社

敢國神社——驛の南廿丁、府中村字一の宮南宮山の麓にある、伊賀國の一の宮で、國幣中社敢國津命を祀る、昔の社殿は天正年間(凡そ三百年前)の兵火に罹り、今は慶長十四年(凡そ三百年前)の再建といふ、樹木鬱蒼、幽邃の境である。次の▼新堂驛省略。

▼拓植驛

(淡町驛より五十九哩一分、到着時間約三時廿五分)

草津線の分岐點、詳細は左記参照。次の▼加太驛省略。

——以下 草津線——

草津線

草津線は關西線拓植驛から岐れて東海道線草津驛に至る二二哩六分をいふもので即ち關西線と東海道線の連絡線である京都から伊勢參宮する人は此線に依つて關西本線に乗次けばよい

▼拓植驛 (起點)

次の▼大原驛、▼深川驛省略。

▼貴生川驛

(拓植驛より九哩五分、到着時間約四十分)

近江鐵道

近江鐵道の接續點、詳細は東海道本線其部参照。

廣徳寺

廣徳寺——驛の西南一里、北杣村山上にある、延暦寺の末寺で、俗に甲賀の庚申堂といはれてゐる、昔里人に藤右衛門といへるが家貧なるを悲しみ、七日間絶食して此寺に祈念せしに靈夢を感じ、銅に亞鉛を混ぜて眞鍮を鑄製するを發明し、家大いに榮わたといふので今に鍊銅經業者の信仰が篤い。

▼三雲驛

(拓植驛より十二哩七分、到着時間約五十分)

三雲
三雲神社
妙感寺

三雲——東海道の一村で、三雲は即ち日雲の訛であるといひ、垂仁天皇の御宇、天照皇大神の大和より伊勢に遷座ある時、四年間鎮座せられたる處で、驛の西南八丁にある三雲神社は即ち其靈蹟であるといふ妙感寺——驛の西南廿丁、字妙感寺にある、寂照禪師の開基、本尊千手觀音を安置してゐる、開基の寂照禪師は即ち建武中興の失政を諫言した藤原藤房卿のことで、寺はその遁世の舊蹟であるといふ、世のうさをよそに三雲の奥深く、てる月影や山すみの友。

寺に藤房の墓及び其遺物といふがある、境域楓樹多く秋は美しい。

善水寺——驛の西北廿五丁、岩根村字岩根にある、和銅年間(凡そ千二百年前)の創建、初めは和銅寺と

關西本線(草津線)

いつてゐたが、桓武天皇の御宇傳教大師此處に住し、帝不豫の時、寺に湧出する清泉を献つて今の善水寺の號を賜ふといふ、本尊の藥師佛は傳教大師の作で、其胎内に同大師感得の靈佛を收めてゐる、昔は十二坊を備へた大伽藍であつたが文龜年間(凡そ四百廿年前)の兵火に罹り本堂の外は悉く灰燼に歸した、境内に本堂、大師堂、觀音堂、仁王門等の建物がある。

▼石部 驛 (柘植驛より十七哩一分、到着時間約一時間)

石部 甲賀郡の西端、横田川(野州川)の南岸に位する東海道五十三驛の一で、古は磯部といつた處ださうな、驛に吉姫明神を祀る石部神社がある。

夏衣ゆくても涼しあつさ弓、いそへの山の松の下風 藤原家隆

東寺 驛の東南約一里、字東寺にある、阿尾山長壽寺と號ふ、西寺と共に金勝山の別院である、聖武天皇が信樂宮遷都の時、鬼門守護の爲めに建立せられし古刹、本尊の地藏尊は行基の作で寺寶の羅漢圖は國寶になつてゐる。東寺の西十丁字西寺に西寺がある、阿尾山常樂寺と號ひ、即ち東寺と共に聖武帝の勅願で、本尊觀音菩薩を安置してゐる、昔は七堂の伽藍であつたさうだが兵火に罹り、今は觀音堂及び寶塔を残すのみである。

のみである。

金勝寺 驛の南約二里、金勝山の頂にある、觀音寺ともいひ、天平五年(凡そ千百九十年前)聖武天皇の勅願、良辨僧正開基、歷朝の崇信篤かつた大刹だが中世灰燼に歸し、今は佛殿と山門が存してゐるに過ぎない、前記東寺、西寺は即ち當寺の別院である、本尊釋迦如來を安置してゐる、又山頂から湖水を望んだ風景がよい。驛の西北三十丁に新善光寺がある、詳しくは東海道線守山驛參照。

▼草津 驛 (柘植驛より二十二哩六分、到着時間約一時廿分)

東海道本線の接續點、詳細は同線草津驛參照。

—以上 草津線—

▼關 驛 (湊町驛より六十八哩、到着時間約三時五十四分)

關町 「與作思は、照日も曇る、關の小まんが涙雨」を近松の題材伊達染手綱に唄はれてゐる關町は、鈴鹿峠の下にある町で、東海道と大和街道の要衝に當り、昔鈴鹿の關を置かれた處である、振すて、誰かは越さむ鈴鹿山、關屋は夜半の月くもりけり 荒木田氏忠

關の地蔵

關の地蔵——驛の北西四丁關町にある、眞言宗、仁和寺の末で、九關山寶藏寺と號ふ、本尊は一休禪師の開眼で「關の地蔵さんに園子あけて」なご、俗語にまで唄はれた有名な地蔵尊である、今の堂宇は元祿九年（凡そ二百廿五年前）の再建で、寺内に蝦夷櫻といふ老樹がある。

鈴鹿峠

鈴鹿峠——驛の西北二里（國境迄）、伊勢近江の國界で、東海道中第二の難路といはれ、峰巒重疊、溪谷多く八百八谷の稱もある、その最も峻路を多津加美坂といひ約八町程である、つさる程に山河を動かす鬼神の聲、天に響き地に満ちて、満目青山動搖せり」と謠曲田村に坂上田村麿が此山に棲む鬼神を退治したことを扱つてゐる、山頂に天照大神を祀る鈴鹿神社がある、満山彩る秋の頃に關から此峠を越り、土山を経て水口町（東海道線の部近江鐵道参照）に至る即ち舊東海道の草鞋の旅を試むもよい、行程約七里、端唄に「のぼり下りのおつら馬よ、さてもみごな手綱染かいな、馬士衆のくせか高聲で、鈴をたよりに小諸節、坂はてるく鈴鹿はくもる、あひの土山雨がふる」と唄はれてゐる。

鈴鹿山浮世をよそに振りすて、いかになり行く我身なるらん 西行
（淡町驛より七十一哩五分、到着時間約四時二分）

龜山

參宮線

龜山町

眞澄神社

參宮線の分岐點、同線の詳細は卷末伊勢參宮の項参照。

龜山町——伊勢鈴鹿郡の集散地、東海道五十三次の一驛で石川氏大萬石の舊城下である、町の北端に城址がある、今は公園で眺望がよいので知られてゐる、園内に石川氏の祖を祀る眞澄神社がある。

▼關西渡町、三等汽車に乗り、今宵過ぐれば天王寺が見ゆる、平野八尾柏原王寺法隆寺、郡山、奈良に着して若宮さんから春日に參る、其れより左に取つて三笠山、名物鹿角細工に菊一文字をこら邊からお土産如何とすがり附く、鹿の張子を二箇さけて、御座れ参りませう、二月堂に參詣して坂を下れば大佛鐘の音、南圓堂に北圓堂に興福寺、猿澤の、池の邊に衣掛け柳にもさめの社、紅葉の錦手向山菅公の昔を思ひ出す、ぬさも取りあへぬ、神の間に、お叩頭する鹿にから買ふて遣る南圓堂には六つと七つの鐘撞くあわれな勅作石子詰、勢見の燈籠や良辨杉にこ瓦、若狭くさ水を呼ぶ、七荷半汲み取りや跡はからじやさいふ井戸、廻りくして武藏野へ。（五段かへし）

和歌山線

王寺—和歌山市間

附 吉野鐵道 吉野口—吉野間

和歌山線とは關西本線王寺驛から岐れて南に走り、高田驛に至つて櫻井線に接続し、吉野口驛からは吉野鐵道に連絡して、吉野川の流れに沿ひ、橋本驛に行つて南海電車高野線に會ひ、更に紀の川の沿岸を走つて和歌山市に通じてゐる關西線の一支線である。王寺、和歌山市間五哩三分、約三時廿分で着く、即ち吉野觀櫻や高野詣り(大阪からは、別に南海電車高野線の便がある)は此線に依ればよい。

▼王子驛 (起點)

關西本線の接続點、詳細は同線王寺驛參照。

▼下田驛 (王寺驛より四哩一分、到着時間約十四分)

顯宗天皇陵—驛の北十丁北今市にある、更に北十五丁今泉に武烈天皇陵がある、驛の西方、二上山の北に接して河内へ通ずる路がある、これを穴虫越といひ右すれば田尻を経て國分村に出で、左すると磯長

顯宗天皇陵
武烈天皇陵
穴虫越

石光寺

駒ヶ谷に出る、古は此路を大阪越といつたのたさうだ。

大阪をわか越來れば二上に、もみちは染めり時雨ふりつ。

萬葉集

石光寺—驛の西南廿五丁當麻村宇染野にある、染寺ともいひ、天智天皇の御宇此處に夜光の三大石あり、三尊の彌勒の像を刻んで本尊させるより石光の寺名があるといふ、中將姫の舊蹟で當麻寺の屬寺だ、諸曲當麻に「又是なる池は蓮の糸を濯ぎて清めし其故に、染殿の井さも申すさかや。あれは當麻寺、是は染寺」とある寺で、其古池も残つてゐる、又「あれこそ蓮の糸を染て、掛て乾されし櫻木の、花も心ある故に蓮の色に咲くともいへり」とある糸掛櫻があり、別堂に中將姫が頭巾を冠り袈裟を掛た木像もある。

當麻寺

當麻寺—石光寺の南五丁(高田驛の西一里)二上山の麓當麻にある、淨土、眞言宗、白鳳二年(凡そ千二百五十年前)に聖德太子の御弟、皇子皇子が建立せられた河内山田郷の禪林寺を此處に移したもので、金堂に本尊彌勒菩薩、四天王の像を安置してゐる、其他講堂、藥師堂、東塔、西塔、曼陀羅堂、法華堂等がある、東西兩塔揃つてゐるのは此寺だけであるさうな、曼陀羅堂の曼陀羅は土佐光茂の筆といひ、奈良朝の右大臣藤原豐成の女であつた中將姫が繼母に苛め出されて此寺で尼になり、化人の助けによつて蓮絲で織

つたさいふ當寺著名の寶物曼陀羅を、もも本尊としてゐたが今は寶藏に納めてある、

さなたゞさ中將姫もまほしがり。(川柳)

高所にある奥院の、大師堂の本尊圓光大師自作の像は「血垂の尊像」といつて有名だ、又寺に駄羅尼助といふ腹痛の妙薬を賣つてゐる、境城一萬二千四百坪に餘る大刹だ。

二上山

二上山——大和の北葛城郡と河内の南河内郡に跨がる高峰で、山頭が南北の二峰に分れ、南を女嶽、北を雄嶽といつてゐる、當麻寺の側から此二峰の間を越えて河内の山田村に路が通じてゐる、岩屋越といひ頗る嶮岨で雨後は此路に依らぬ方がよい、俗に當麻越といふのは多く穴虫越か山田村から當麻の南七丁竹ノ内に通ずる竹内峠の二路をいふのである。

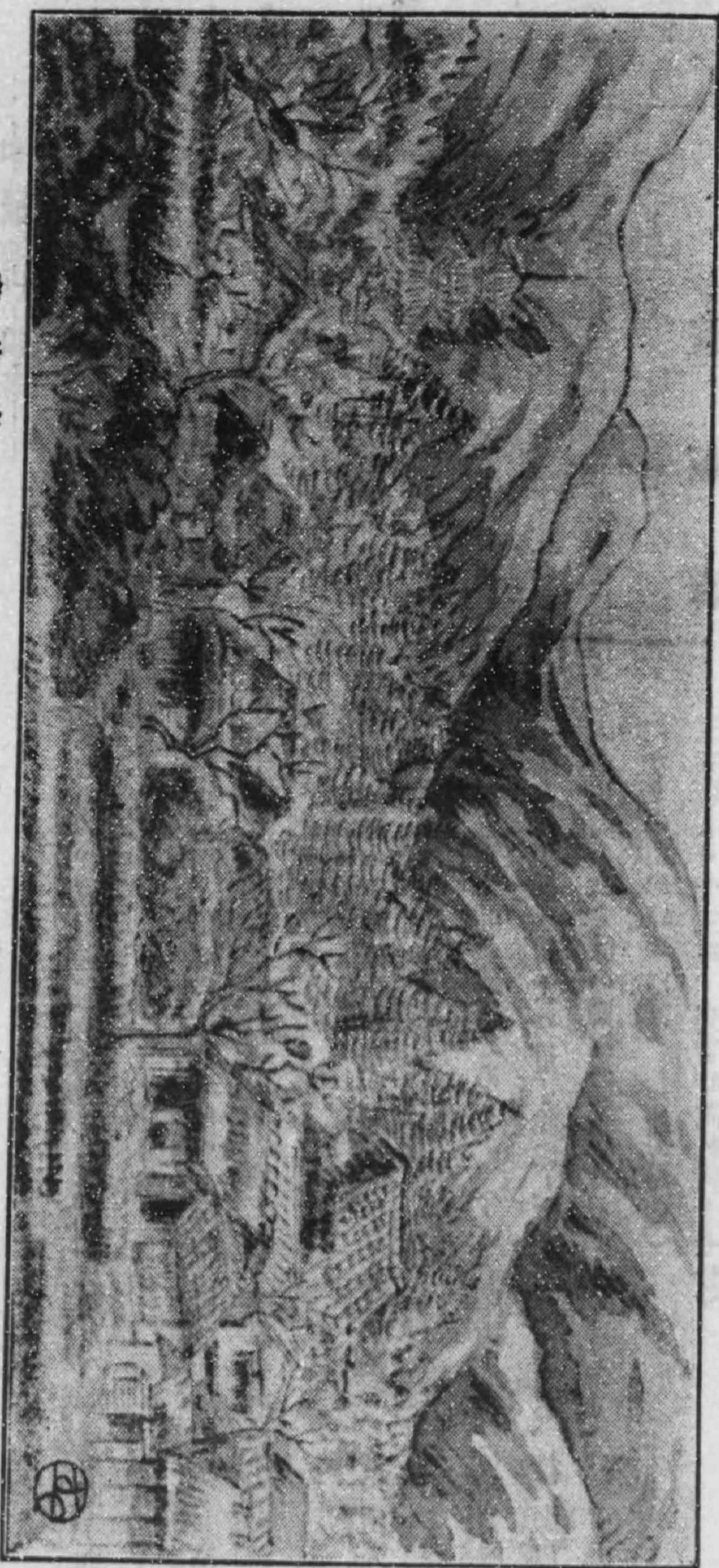
時雨ふる二上山を見渡せば、梢もあけに染めてけるかな。 行家

▼高田驛 (王寺驛より七哩一分、到着時間約廿三分)

櫻井線

▼御所驛 (王寺驛より十哩九分、到着時間約四十分)

櫻井線の接續點。高田町は大和西南部の都會で木綿買の市場で知られてゐる。次の▼大和新庄驛省略。



新佳春寺麻堂

御所町
孝照天皇陵
孝安天皇陵

一言主神社

茅原寺

葛城山

檜灘の瀧

御所町——南葛城郡の町で大和絛の主産地である。驛の南十丁三室村に孝照天皇陵及び驛の東南十五丁掖上村字玉手に孝安天皇陵がある。

一言主神社——驛の西南卅丁吐田郷村字森脇にある、葛城の一言主の神を祀る、社域一萬餘坪、老樹鬱蒼として甚だ幽邃なよい所である。又驛の東十丁茅原には役小角の誕生地といふ茅原寺がある、吉祥草院と號ひ、同行者の開基、本尊に行者自作の像を安置してゐる。

葛城山——「篠懸の袖の朝霜起臥の、袖の朝霜起臥の、岩根の枕松の根の、宿りも茂き嶺つゞき、山又山を分け越えて、ゆけは程なく大和路や、葛城山に着きにけり。」とある葛城山は、驛の西方に聳いてゐる連峰、即ち北は竹ノ内峠から南は金剛山を越ゆる千早嶺に至る間の總稱であるが、今は金剛山の北方に時つ峰を單稱するのである、最高三千三百餘尺、驛の西方廿丁檜灘村より卅丁餘にして其山頂に至る、役小角修法の靈區で奇岩怪石多く、檜灘村に屬する山中に高さ六丈餘の檜灘の瀧がある。

よそにのみ見てややみなん葛城や、たかまの山の峰の白雲。(新古今集)

▼壺坂驛 (主寺驛より十三哩、到着時間約四十七分)

高取町
城址

壺坂寺

高取町——驛の東卅丁、大和高市郡の町で、高取山を貫ひ植村氏二萬九千石の舊城下である、城址は町から一里程登つた高取山にある、南北朝時代に南朝の據つた要塞で、寛永十八年(凡そ二百八十年前)以來植村氏の居城となり明治維新の廢城に及んだのである、文久三年八月天誅組の志士吉村寅太郎が「無腸の男子何をかなさむ」と決死の士十三人と共に乾草を背にして襲ふたのも此城だ、墨嶽今尙殘し展望がよいので登る人が多い。

壺坂寺——高取町字清水谷から山路十六丁、眞言宗、南法華寺と號ふ、大寶年間(凡そ千二百廿年前)辨基上人の開基、本尊千手千眼觀世音を安置してゐる、西國第六番の靈場だ、

岩をたて水をたへて壺坂の、庭のいさごも浄土なるらん。 詠 歌

寺傳によると開基の辨基上人が靈夢によつて此山に庵を結び、或日所持の壺の中に觀音の尊容を拜して大いに悦び、其壺を坂の上に安じて修練苦行をしたので壺坂の名があるといふ、元正天皇上人の徳を聞こし召され八角造りの佛殿を營み、其壺を納めて山の鎮となし給ふ、上人又尊像を刻んで安置せられたのが今の本尊であるといふことだ、三層塔、禮堂、本堂、仁土門寺がある、奥の院は寺の東八丁高香山の中腹にあ

—和歌山線(吉野鐵道)—

(三)

る、自然の大岩石に五百羅漢(古代の神像ともいふ)の半體彫や丸彫にしたもので中々奇觀である、寺城樓樹多く花の頃は美しい、寺は二三ッ違ひの兄様と、云ふて暮してゐる内に、情なや此方様は、生れも付かぬ抱瘡で、目かいの見ゆぬ其上に、貧舌に迫れど何のその、一旦殿御の澤市さん、例へ火の中水の底、未來迄も夫婦じやと思ふ許りかコレ申し、御前のお目を癒さんご、此重坂の觀音様へ、明の七つの鐘を聞きそつと抜け出で只一人、山路厭はず三年越」と澤市お里が信仰した所、寺にその澤市の杖といふ面白いものを藏してゐる。

▼吉野口驛

(王寺驛より十五哩五分、到着時間約五十九分)

吉野鐵道の接續點。

—以下吉野鐵道—

吉野鐵道

此線は關西和歌山線の吉野口驛を起點とし東南に走り、吉野山の登山口六田に通じてゐる、其間七哩二分約三十五分で着く、即ち吉野觀櫻や大峰登山は此線に依るのである。

▼吉野口驛

(起點)

▼下市口驛

(吉野口驛より四哩七分、到着時間約廿七分)

下市町——驛の南、吉野川に架した千石橋を渡るこ下市町である、吉野郡第一の町で、吉野塗は此處の産である、町に「春は來ね共花咲かす、娘が漬た鮓ならば、なれがよかるこ、買ひにくる、風味も吉野下市に、賣弘めたる釣瓶鮓、御鮓所の彌左衛門、留主の内にも商賈に抜目もない義が早漬に、娘お里が片綿繰裾に前垂ほやくこ、愛に愛持鮓の鮓、押へてしめてなれさする、味い盛の振袖が、釣瓶鮓とは物らし、」と院本義經千本櫻にある名高い釣瓶鮓屋がある、平重盛の嫡子三位中将維盛が、熊野浦から下市に逃れ來て、此鮓屋で世を忍んでゐたといふ舊蹟たさうな。

丹生川上神社

丹生川上神社——驛の南約二里、南芳野村字丹生にある、同社は上下の二社に分れ、上社は吉野川の上流川上村字迫にある、下社即ち當社は水神彌都波能賣神を祀る、白鳳四年(凡そ千二百五十年前)此神敎して曰く「人聲の聞ぬ深山吉野丹生の川上に我宮柱を建て敬奉らば甘雨を降らし霖雨を止めむ」と敎へられたので此處に齊き祀るといふ祈雨の大神である、附近に丹生の瀧がある、山水の景趣に富む幽邃の境だ。

▼吉野驛

(吉野口驛より七哩二分、到着時間約卅五分)

—和歌山線—(吉野鐵道)

(三)

上市町
青山
妹山

上市町——驛の東廿丁吉野川の北岸にある、林木の寄渡地として知られ、對岸の青櫓、水上から流す筏も風情がある、上市町から更に東十丁に吉野川を挟んで兩岸に小峰が對峙してゐる、南を青山北を妹山といふ、古來歌によく詠まれた妹山はこれたといふが、紀の川にも妹山がある、

妹山なき名もよしやししの川、よに流れてはそれこそ見め。(菅笠日記)

吉野山

吉野山——これはくさ花の吉野山「歌書より軍書に悲し吉野山」の二句は遺憾なく此山の史蹟と櫻花の美を物語つてゐる、驛の東、北六田から對岸の六田に至る吉野川の清流に今は橋が架けられてあるが昔は渡船の便によつたもので、此渡を大田の柳の渡といひ、上市の櫻の渡、瀬上の梅の渡と共に吉野川三渡の稱があつた處だ、

大田川かぜものさかにゆく水の縁によさむ柳かけかな。 加茂真淵

一の坂

橋を渡つて左に折れ、右に曲るこの一の坂そこから五つ曲りの坂を経て進むと間もなく

吉野宮

吉野宮——の社前に入る、(登山口より約廿丁、勾配の緩い新道には車の便がある)、官幣大社、明治二十五年の創建、祭神は後醍醐天皇で、攝社の御影社に藤原光朝同俊基、船岡社に兒島高德、松山慈俊、瀧櫻社に

村上義光の

長峰の櫻
口の一目千本

大橋の櫻
一關の櫻
吉野の櫻
銅の鳥表
金峯山寺
藏王堂

十居通増、得能通信の靈を祀る、吉野宮から五六丁行くこ、右側の小丘に村上義光の墓がある、地は太平記に見いてゐる二の木戸の高橋があつた處といふ、「天照大神の御子孫、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇第二の皇子、一品兵部卿兼干護良、逆臣の爲に亡され、恨を泉下に報ぜん爲に、唯今自害する有様見置て、汝等が武運忽ちに盡きて、腹をきらんする時の手本にせよ」と村上義光が大塔の宮の身代りとなつて悲壯なる最後を遂げたことは人の知る處、そこを過ぎると五六丁の長峯の櫻にかゝる、長峰を行き盡す道の左に明治皇后御野立址の木標がある、此處から左方の谿を望むと一簇の紅雲が棚引いてゐる口の一目千本といふ、俗語に「君は吉野の千本櫻色香好けれ木が多い」などある所だ、上市町から丹治を経て來る裏道の七曲から見上げた景色は頗る絶佳である、下の千本の櫻を左に眺めて進むと擬寶珠のついた大橋俗に一の橋に出る豊臣秀頼の寄進、慶長九年(凡そ二百廿年前)の竣功だ、此處から黒門に至る間の櫻を關屋の櫻といふ、黒門を這入ると吉野町で、吉野の土産物を賣る店や、旅館等が軒を列べてゐる、町を過ぎると銅の鳥表がある、額の「發心門」の三字は弘法大師の筆といはれてゐる、石段の上の仁王門をくぐる、金峯山寺の木堂藏王堂の境内だ。(吉野宮から十六丁)役小角の開基、眞言天臺兩宗を兼ねてゐる、

本尊は二丈五尺餘の藏王權現の立像で、堂前の四本の櫻は元弘三年(凡そ五百九十年前)大塔の宮が最後の御酒宴を催された遺趾で、村上義光が身代りの爲めに宮の御鎧、直垂を申し受けた所といふ、太平記から當時の状を抄録する。

「宮は藏王堂の大庭に並居させ給て、大幕打揚て、最後の御酒宴あり、宮の御鎧に立所の矢七筋。御頬さき二の御うで二箇所つかれさせ給て、血の流る、事瀧の如く。然れ共立たる矢をも抜給はず、流る、血をも拭給はず敷皮の上にながら、大盃を三度傾けさせ給へば、木寺相摸四尺三寸の太刀の鋒に敵の首をさし貫いて宮の御前に畏まり、戈鋌劍戟を降事電光の如く也。盤石岩を飛す事春の雨に相同じ、然りとは云へ共、天帝の身には近づかで、修羅かれが爲に破らるゝはやしを揚て舞たる有様は、漢楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが、劍を抜いて舞しに樊噲庭に立ながら、帷幕をか、けて項王を睨みし勢ひも角やと覺ゆる許り也。(太平記)

實城寺の趾
吉水神社

藏王堂前から境内に入らないで右に一丁程も行くこ、後醍醐天皇以下南朝三帝の皇居であつた實城寺の趾がある、藏王堂から東南敷丁本道から左に半丁程離れた所に吉水神社がある、昔は吉水院といつてゐた所

で後醍醐天皇が實城寺に宮居を定めらるゝまでは此寺に在らせられたのである。

花にねてよしやよしの、吉水の、枕の下に石はしる音。 後醍醐天皇

勝手明神
山口神社
中の千本
如意輪寺
誓塚の碑
至情塚

の御詠のあつた涙の趾だ、又その昔源義経が逃れて此寺に潜居してゐた所、今は神社に改められ、後醍醐帝と楠正成を奉祀してゐる、社から又もこの本道に還り、東南院、大日寺等の僧房を経て一丁程行くこ勝手明神がある、山口神社 ともいふ、義経の愛妾靜が此處で法樂の舞を奏して大衆の注意を奪ひ義経を無事に落した所といふ、社後の丘陵を袖振山といつて、天武天皇が此山に御潜居のとき御琴か遊はすこその音につれて天女が天降つて舞つたといふ傳説がある、明神の前から右に小徑を五六丁行つた所に村上義光の子義隆の墓がある、義隆は追ひ縋る賊軍を遮つて大塔の宮を無事に落しまゐらせ遂に此處で討死をしたのである、勝手明神から左に向ふ側の山腹まで咲き上る花の谿が中の千本で、明神から此花の谿を迂曲すること八丁に如意輪寺がある、延喜年中(凡そ千十年前)日藏上人の開基、本尊如意輪觀音を安置してゐる、南朝當時の勅願所で、正行が鐵でもつて「かへらじさ」の歌を彫り附けたといふ扉や其他南朝の遺物を多く藏してゐる、境内に正行の誓塚の碑、辨の内侍至情塚等がある、境内の東側から數十級の石段を登

後醍醐天皇
塔尾陵

り盡すと後醍醐天皇塔尾陵がある(藏王堂から十二丁)、落花粉々のとき此處に詣で、吉野朝の古を思へば、誰か感涙に咽はぬ者があらう。

御廟年を経て忍ぶは何をしのか草。

芭蕉

古陵松柏吼天鷹。

山寺尋春春寂寥。

眉雪老僧時轉錄。

藤井竹外

山禽叫斷夜寥々。

無限春風恨未消。

露臥延元歲下月。

滿身花影夢南朝。

河野鐵兜

竹林寺

天泉橋

小山神社

上の千本

猿の坂

獅子尾坂

花矢倉

中院谷

吉野水分社

勝手明神から南敷丁に竹林寺がある、椿山寺ともいふ、日藏上人の住んでゐた所、庭園は小堀遠洲の設計になるものた、附近は山中での絶勝の地で眺望が非常によい、竹林寺から本道を南に數丁天皇橋を渡ると小山神社を左折すると上の千本といふ一面櫻で埋まつた路た、(花の間の路を辿ると如意輪寺に出られる)小山神社からたんぐと登りになつて猿の坂、辰の坂と過ぎ獅子尾坂を登り詰めた左方の小丘が花矢倉で附近は義経が山僧に追はれたとき佐藤忠信が必死の勇戦をした所、附近の中院谷に忠信に討たれた山僧の首塚等がある、花矢倉から望むと下、中、上の千本櫻、峰、谷、町、寺と脚下に展けて頗る大觀た、そこから更に進むと吉野水分神社がある、祭神は天水、分神で幼児の守護神として信仰され、俗

子守神社

金峰神社

安禪寺趾

西行庵

苔清水

奥の千本

大峯山

に子守神社といはれてゐる、神社から奥は老松、古杉繁茂して凄愴感が起きる、十八丁位も行くと金峯神社がある(藏王堂から二十丁)、吉野山の地主神で金山彦、金山姫の二神を祀る、神達な所た、石段を降つて右に坂を上ると安禪寺趾に出る、昔は多寶塔等があつて中々立派な寺であつたさうだが今は地名が存してゐる丈だ、そこを右に細路を四丁程も下ると西行庵がある、

そくくく落ちる岩間の苔清水、汲ほす程もなき住居かな。

西行

花見つゝ住みし昔の跡訪へは、苔の清水に存ぶ面影。

本居宣長

露さくく心に浮世すがはや。

芭蕉

等の詠で知られた苔清水は左の山溪から滴る清水をいふのた、實際此處に至ると全く俗離れがして神と接近したかの様に崇高な信念が起きる、背後の半腹にある數十株の櫻を奥の千本といふのである(山麓より七十餘丁)。

大峯山——安禪寺趾から南へ進む路が山上岳に通じてゐる、行程五里、路傍に女人結界の石標がある、高野山と違つて此山は絶対に之より奥は女人禁制である、詳しくは巻末大峰登山参照。

▼北宇智驛

(王寺驛より十九哩六分、到着時間約一時十八分)

金剛山
阿太桃園

金剛山——驛の西北方に聳てゐる高峰がそれだ、山麓水野まで卅餘丁、更に四十餘丁で山頂の葛木神社に至る、詳しくは南海電車高野線千早口及び大阪鐵道瀧谷参照。驛の東卅丁阿山村に阿太桃園がある、十餘丁に渉つた桃園で花の頃は美しい。

高鴨神社

高鴨神社——驛の西北卅丁鴨神にある、縣社、孝昭天皇の御宇(凡そ二千三百六十年前)に奉祀した古社で、祭神は阿遲劔高日子根神である。

▼五條驛

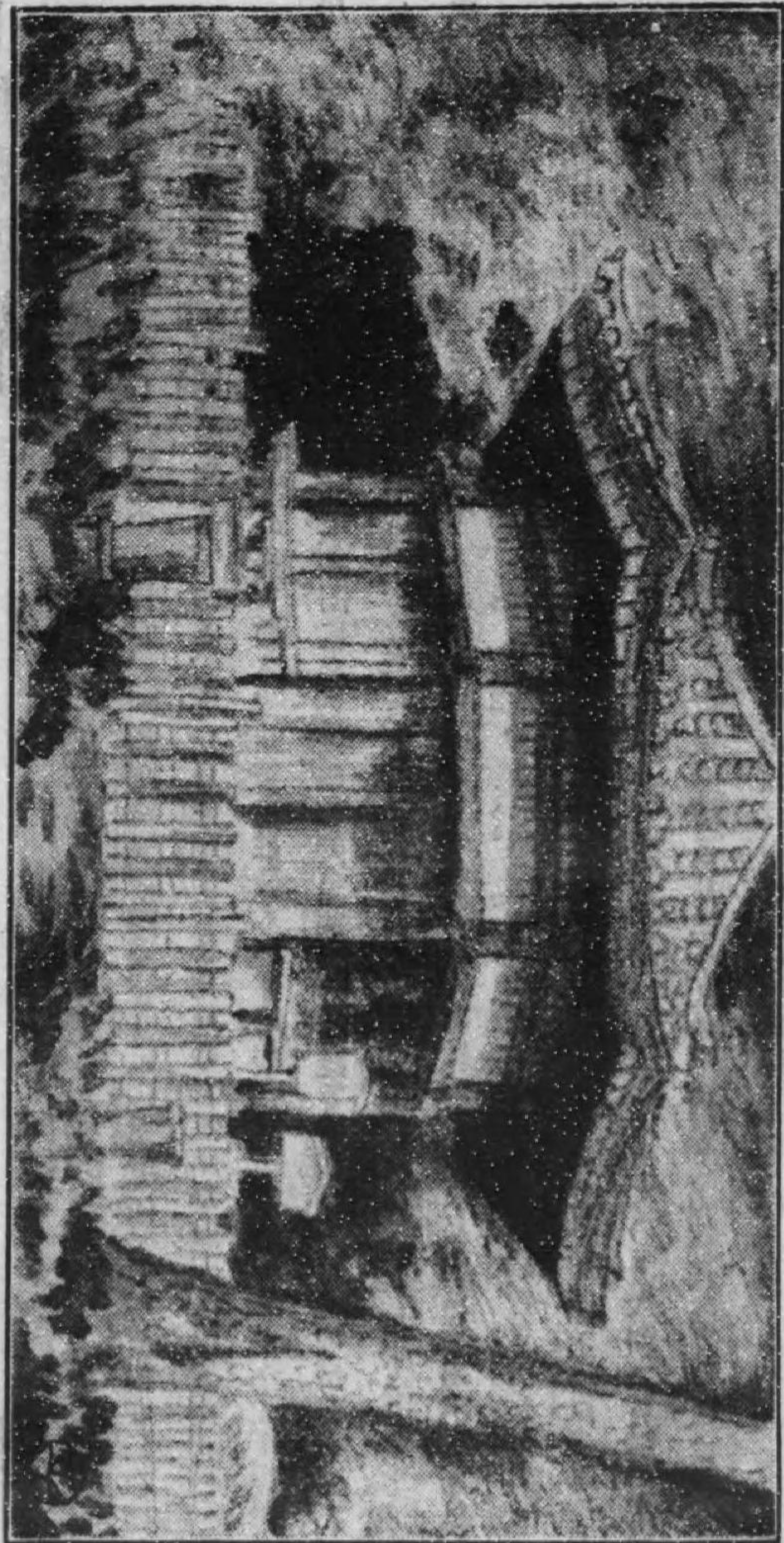
(王寺驛より二十二哩、到着時間約一時廿五分)

五條町

五條町——郡中第一の町で、鮎、蜜柑、凍豆腐、晒等で知られてゐる、驛の西近くに宇智郡役所がある、昔代官所があつた所で天誅組の志士、吉村寅太郎、藤本鐵石等が中山忠光卿を奉じて天下の義舉に魁すべく、軍神の血祭に幕府の代官鈴木源内を襲ふて之を斃した所だ。

榮山寺

榮山寺——驛の東廿丁吉野川の北岸小島にある、眞言宗賢山派、聖昌山と號ふ、役小角の開基、養老三



聖住寺

寺

三

榮

年(凡そ千二百年前)藤原武智磨の建立、地は弘法大師密法修業の舊蹟といふ、八角圓堂は藤原豊成の造營で當時の彩畫が存してゐる、大日堂、阿彌陀堂等がある、寺に山城の深草里の清澄寺にあつたといふ小野道風の銘文の鐘が國寶になつてゐる、寺から金剛山、また前の音無川を望んだ風景がよい、音無川は吉野川のことで此邊七八丁の間の稱である、鮎狩には最もよい所だ。

賀名生皇居址

賀名生皇居址——驛の南二里和田にある後醍醐天皇蒙塵の宮址で、其當時のものが存してゐる、丘陵を貫ひ溪流を巡らした茅葺の百姓家がそれだ、茅葺の門に「皇居」の匾額が掲げられてゐる、かゝる山家に漂泊し給ふ天皇の御心勞を偲び、奉る涙の種である。その南東黒洲に後村上天皇の宮址黒木御所址がある、太平記に「天の河の奥賀名生と云ふ所に、僅かる黒木の御所を造りて御座あれば、彼唐堯虞舜の古茅茨不剪柴椽不剝、淳素の風も斯やと思ひ知られて、誠なる方も有りながら女院皇后は柴葺庵のあやしきに、軒漏る雨を禦ぎかね御袖の涙ほす隙なく」と悲しい文字で綴られてゐる。次の▼大和二見驛、▼隅田驛省略。

▼橋 本 驛 (王寺驛より二十八哩、到着時間約一時五十二分)

南海電車高野線接續點、橋本町及高野登山は同線橋本の項参照。

慈尊院

▼高野口 驛 (王寺驛より三十一哩四分、到着時間約二時二分)

慈尊院——驛の西南約廿丁紀の川の南岸宇慈尊院にある、弘法大師が母の爲めに彌勒の像を彫してこの寺を建立した所、初めは慈氏寺と號けてゐた、承和元年(凡そ千九十年前)に大師の母が、讃岐から大師を慕ふて此地に來たが山は女人禁制の地であるので此寺に迎ひ入れ、月に九度、山から下りて母に孝養を竭くしたので附近の九度山の稱が起きたといふ、母は翌年八十三歳の高齡で安寂した、その舍利と彌勒の摩訶像を靈窟に安置してから今の慈尊院と改稱したのである、又寺は俗に女人高野ともいはれてゐる、附近に善名院がある、地藏尊を安置してゐる、寺は眞田幸村が其父昌幸と共に閑居して有名な眞田紐を案出し、家人を行商人に仕立て、各地に派し、天下の機を窺つてゐたといはれてゐる所だ。

善名院

高野山

高野山——山上迄三里半、道は橋本から登山するよりも一里近い、即ち驛の南十五丁九度山村から丹生川の溪流に沿ふて卅丁で推出に至る、更に坂路一里で橋本から來る路と合する神谷に出る、是から上は南海電車高野線橋本参照。次の▼妙寺驛▼笠出驛▼名手驛省略。

▼粉 河 驛 (王寺驛より四十一哩、到着時間約二時卅一分)